第１部　本校の概要

第２部　全校研究

Ⅰ　これまでの研究について

Ⅱ　平成 30 年度，令和元年度の研究について

Ⅲ　今年度の研究テーマについて

Ⅳ　研究の経過・結果・まとめ

Ⅴ　今年度の研究のまとめ

本校の概要

本校は，神奈川県横須賀市野比にあり，知的障害を伴う自閉症幼児児童が学ぶ特別支援学校である。昭和 48 年に設立された本校の前身である国立久里浜養護学校の実践を踏まえつつ，平成 16 年度からは，筑波大学の附属学校として知的障害を伴う自閉症の子供たちに対する教育についての研究に取り組んでいる。

本校の教育目標は，「子供一人一人の思いや個性を大切にし，障害特性等に応じた指導を通して，豊かな心と丈夫な体を育み，主体的に考え，判断し，表現する力と態度を育成する。」である。子供たちは，一人一人障害の状態や特性，心身の発達段階が異なり，実態は様々である。また，個々に有する思いや個性，興味・関心なども様々である。これらの多様な実態の子供一人一人に応じた指導を行うことで，個々の良さや可能性を広げていくことが学校の役割である。子供の実態を的確に捉え，指導目標・指導内容を適切に設定し，有効な手立てを用いるあるいは必要な配慮を行いながら指導を展開することにより，将来の自立や社会参加のために，たくましく生きる力の基盤を，確かに育てることを目指している。

さて，本校には，幼稚部と小学部の二つの学部が設置されている。令和２年度の幼児児童及び教諭の人数は，表１のとおりである。

表１　幼児児童及び教諭の人数

部	教室	幼児児童	教諭
幼稚部	ひよこ組（３，４歳児）	６	３
	りす組（４歳児）	５	２
	うさぎ組（５歳児）	５	３
小学部	第１学年	６	３
	第２学年	５	３
	第３学年	６	３
	第４学年	６	３
	第５学年	６	３
	第６学年	６	３

幼児児童の居住地は，学校がある横須賀市を中心に，三浦市や横浜市，川崎市などである。幼児児童は，二台のスクールバスや公共交通機関，保護者やヘルパーの送迎で登校している。今年度は，感染症対策のため，スクールバス内での密を避けるために，保護者に協力を仰ぎ，可能な家庭には，自家用車での送迎を依頼した。

学校には寄宿舎があり，遠方に居住地がある児童が，平日に入舎して生活をしている。今年度は，小１～３年及び５年の児童５名が利用している。児童がくつろげる空間を整え，児童の思いをくみ取りながら，家庭的な雰囲気を大切に日々の生活指導を行っている。子供たちは，寄宿舎指導員と生活をすることを通して，挨拶やマナー，食事や入浴，排せつに関することなどの日常生活における基本的生活習慣を学んでいる。今年度は，感染症予防のため実施できなかったが，一昨年度から，子供の生活上の課題を学級と寄宿舎と保護者とで連携しながら解決していく取組として，寄宿舎生以外の幼児児童を対象にして「生活体験入舎」も実施している。

教諭の約４割は，11 道都県から人事交流で赴任した者であり，交流期間は３年程度となっている。様々な地域や校種，学部を経験した教諭が集まっていることから，互いに意見を交わし合いながら実践に取り組んでいる。そして，教諭はもとより管理職，栄養教諭，養護教諭，寄宿舎指導員，看護師，事務職員やスクールカウンセラーなど，全職員で協力しながら，子供たちへの指導を行うことを大切にしている。

保護者との連携では，PTA 活動に加え，父親を中心とする「おやじの会」がある。今年度は，オンライン配信で性に関する学習会を行ったり，桜やブルーベリーの木の植樹を行ったりするなど，保護者が子供との関わり方や育ちを学び合う取組を企画したり，子供たちが安心して，楽しく学校生活を送ることができるように学校の環境を整えたりすることに取り組んでいる。

Ⅰ　これまでの研究について

本校の研究の経過は図１に示すように，大きく四つの時期に分けることができる。

まず，平成 16～22 年度までは，自閉症児の特性に応じた教育課程の研究に取り組んできた。その後，平成 23～26 年度までは，子供たちの思いや考えといった内面の育ちに着目しながら，一人一人の実態に合わせた指導の在り方を追求するために，日々の実践をベースにした研究を進めてきた。平成 27～29 年度までは，それまでの研究の成果を踏まえて，子供たち一人一人が確かに育つ授業を行うためには，どのような方策が必要であるかを，実践を通して明らかにするための研究に取り組んできた。そして，平成 30 年度からは，子供たち一人一人の指導課題を踏まえた自立活動の指導と各教科等の授業づくりについての研究を進めている。

＜平成 16～22 年度＞
・自閉症児の特性に応じた教育課程の研究開発をした

↓

＜平成 23～26 年度＞
・子供たちの思い，考え，行動する／表現する力を育てる指導を追求した

↓

＜平成 27～29 年度＞
・根拠に基づいて授業づくりの PDCA サイクルを進め，子供が確かに育つ授業を追求した

↓

＜平成 30～令和元年度＞
・一人一人の指導課題を踏まえた自立活動と各教科等の授業づくりを追求している

図１　本校の研究の経過

Ⅱ　平成 30 年度，令和元年度の研究について

平成 29 年４月に告示された特別支援学校幼稚部教育要領，特別支援学校小学部・中学部学習指導要領には，自立活動の指導に当たって，子供一人一人の「障害の状態や特性及び発達の程度等の的確な把握」に基づき，指導すべき課題を明確にすることによって，（中略）個別の指導計画を作成することが明記された。このことを踏まえ，各教科等を学ぶための基盤となる力を育てる自立活動の指導を理解することが，子供が確かに育つ指導につながると考え，平成 30 年度から「一人一人の指導課題を踏まえた各教科の授業づくり」を研究テーマに設定し，自立活動を主としながら教科（平成 30 年度：音楽，令和元年度：体育）にも焦点を当て，授業実践を積み重ねてきた。

１　自立活動の指導

平成 30 年度の自立活動の授業づくりでは，子供の学習上又は生活上の困難さから指導課題を導き出すプロセスとポイント，また，授業づくりで大切なことを明らかにした。令和２年度は，幼児児童一人一人の指導課題を明らかにした上で，指導する場・人・時間を明確にした指導計画を立てて指導することで，自立活動の指導を着実に行うことができることを明らかにした。また，そうした指導を行う上で，大切になる学級経営のポイントを整理した。以下，「指導課題を導き出すプロセスとポイント」，「学級経営のポイント」について述べる。

（１）指導課題を導き出すプロセスとポイント，自立活動の授業づくりで大切なこと

教師が指導課題を導き出すためには，子供の実態から学習上又は生活上の困難さを把握し，その理由や原因を子供の実態に戻りながら導き出すプロセスをたどる必要があることや，それぞれのプロセスの中で押さえておくべきポイントがある。また，自立活動の授業づくりで大切なこととして，「自立活動の時間の指導と他の指導の関連性を図ること」，「子供に合わせた指導方法を見付けていくこと」，「自立活動の評価は，子供の困難さの改善という視点から行う必要があること」の３点が挙げられる。（詳細は「平成 30 年度　自閉症教育実践研究協議会　実践研究集録」）

（２）学級経営のポイント

幼児児童一人一人の自立活動の指導を確実に行っていくためには，以下の点を踏まえて，指導計画を立案し，学級経営を行っていくことが大切である。

ａ）子供の自立活動の指導内容に応じて，指導の場・人・指導の時間を明確にして指導計画を立案すること

幼稚部や小学部低学年段階の子供への指導では，教師との信頼関係を作るために，教師は子供の気持ちや要求をすぐに受け止め応じていくことが不可欠である。教師が一人の子供とじっくりと関わる時間を設定したり，子供のその時々の状態に応じて関わる教師を変えたりすることができるように，子供の状況に応じて変更できる柔軟な指導体制の計画を立てることが大切である。具体的には，学級のどの子供とどの教師が一緒に活動するのか，どの場所でどの教師が誰を指導するのかなど教師の動きを明確にすることで，子供の状態と指導内容に合わせた指導が安全に，確実に実施ができる学級経営につながった。

小学部の高学年段階では，自立活動の時間の指導の中で，教師と一対一で学んだ内容を，学校の授業で発揮するなど，子供が自信をもって様々な場で自分が学んだことを発揮できるように，自立活動の指導目標を明確にした上で，各教科等の指導と関連性を図りながら，指導を行うことが大切である。

ｂ）教師同士が子供の目標や授業における評価を共通理解して指導を行うこと

子供が日々の学習で獲得したことを，他の生活場面で存分に発揮するためには，学級の教師だけでなく，日頃子供と関わる教師が，子供の課題や変容などを共通理解することが欠かせない。そのためには，日々時間を定めて授業の振り返りをすることや，日案や指導案などに子供の目標や評価を記入し，授業を行う教師同士が互いに確認できるようにすること，学級や学部の教師が継続しやすいように簡易で，記入しやすい，子供の変容等を記録する方法を工夫することなど，子供の今の状態を指導に携わる教師が共有できるような方法を考え，日々，地道に継続していく必要がある。また，そうした方法を継続するためには，教師同士が互いの思いや考えを尊重しながら，率直に意見を伝え合うことができるような関係を作って行くことが不可欠である。

ｃ）生活年齢に応じて指導の場・人・時間の設定には段階があること

指導の場・人・指導の時間には，生活年齢に応じた段階性があることが示唆された。「指導の場」については，幼稚部段階では，好きな場所や安心できる場所が中心であるが，小学部段階になると，目的に応じた場所や初めての場所などでも指導が行われることがあった。「人」については，幼稚部段階は，身近な教師との関わりが重要であったが，小学部段階になると，他学年の教師や様々な友達といった関わる人が広がっていくように指導が行われていた。「指導の時間」については，幼稚部は遊び中心の生活づくりであったが，小学部段階になると，生活年齢に応じた日課の中で指導が行われることが明らかになった。このように段階性を押さえた指導も大切なポイントであった。

（詳細は「令和元年度　自閉症教育実践研究協議会　実践研究集録」）

２　各教科の授業づくり

音楽の授業づくりでは，これまでの実践を整理することを通して，音楽の授業づくりのポイントを明らかにした。また，体育の授業づくりも同様に，令和元年度の授業づくりの実践を通して，各学級が工夫し，見直してきたことを整理して体育の授業づくりのポイントを明らかにした。以下，「音楽の授業づくりのポイント」，「体育の授業づくりのポイント」について述べる。

（1）音楽の授業づくりのポイント

（ア）選曲，編曲，自作曲に関すること

授業のねらいを達成できるように，曲を準備することが大切であった。具体的には，音楽によって生活が豊かで明るくなったり，落ち着いた気持ちを抱いたりすることができるように，子供の興味・関心に合うことや，生活場面や教師や友達と一緒にした楽しい経験などの実体験を表現した曲を作ったりするなど，音楽による子供の生活や気持ちへの影響を考えて，曲を選んだり，自作したりすることが大切である。

（イ）楽器や教材に関すること

幼児期，児童前期，児童中期では，音の鳴る物にじっくりと触れ，振動を感じ取ったり，自分が触れることで音が鳴ることを十分に経験したりすることが大切である。児童後期では，いろいろな楽器の音の鳴る仕組みを体験的に理解したり，鳴らし方によって音色や音の大きさが変わったりすることなどを聴いて表現したりする力を育むとともに，掛け声を聴いて表現したり，友達の出す音や他の楽器の音を聴きながら楽器を鳴らしたりするなど，友達や教師の鳴らす音に合わせることの面白さや楽しさを味わわせていくことが大切である。

（ウ）教師の関わりに関すること

幼児期・児童前期は，子供人一人一人の表現を教師が見逃さず，受け止め，返していくことが大切である。児童中期は，少しずつ自己表現が現れ始めるが，教師の支えや受け止めがあることで，最後まで表現することができ，満足感や達成感を感じることができるようになる。また，教師自身がリズムの特徴を意識して身体表現や楽器の演奏を行い，子供と一緒にリズムや音楽の楽しさを感じられるように関わることが大切である。児童後期は，教師自身がリズムや曲想の特徴を意識した身体表現や楽器の演奏を行い，音楽に対する興味・関心を子供にもたせることが大切である。また，児童は自分の表現が認められることにより満足感や自信をもったり，表現する意欲につながったりするため，一人一人の児童の発言や表現を大切にしながら授業を進めていくことが必要である。

（エ）授業の展開に関すること

幼児期・児童前期は，児童が興味・関心をもてそうな一つの活動にじっくりと取り組み，教師と一緒に楽しめるようになることや，活動の始まりと終わりを意識できるような授業の展開にすることが大切である。児童中期は，児童が好きな話や題材を基に，ストーリーに沿って授業を展開することでイメージしたことを身体表現や発声，楽器などで表現することに楽しく取り組むことができるようにすることが大切である。児童後期は，いろいろな友達や教師の表現に気付き，一緒に音楽活動することの楽しさを感じられるようにすることが大切である。また，自分の表現に自信をもったり，友達の演奏を聴いて友達の表現の良さに気付いたりすることができるように，友達と協力して演奏する機会をもたせたりすることも大切である。

（詳細は「平成 30 年度　自閉症教育実践研究協議会　実践研究集録」）

（2）運動遊び・体育の授業づくりのポイント

（ア）教師の関わり方の工夫

教師が目標としている動きができたか，できなかったかという技能面の評価だけでなく，子供が器械・器具に関わるときや動き出すときに考えていることや考えたこと，判断していることや判断したこと，伝えようとしていることや伝えたことなどを見逃さずに評価できるように関わることが重要である。そのために，子供に質問や提案をするなど問い掛けを増やす，言葉を掛けるタイミングを工夫する，教師自身が楽しそうに体を動かす様子を見せる，子供の試行錯誤の時間に十分に付

き合うことが大切である。

（イ）教材研究

子供がやりたくなる活動として，子供のできる動きを取り入れ，みんなで一緒に運動することを楽しむことができるようにしたり，子供のイメージできる動きや音楽を取り入れたりすることが重要である。また，子供が自分から工夫して体を動かすために，器械・器具の使い方を限定せず，複数の使い方をしたり，児童が考えた使い方を取り入れたりして授業を行っていくことが大切である。

（ウ）子供の再確認

教師が子供に対して感じたり，考えたりしていることと，子供たちが感じたり，思ったりしていることは必ずしも一致していないことを認識して子供の理解や実態把握に努めることが大切である。子供が今もっている力を十分に発揮して，活動に取り組むことができるように，教師は子供一人一人の動きを見逃さずに評価し，認めていきたい。

（エ）場の設定と安全面の配慮

子供の実態を踏まえながら，器具の選定や配置を工夫し，安全で安心して運動ができる環境作りを行う必要がある。子供の意欲を引き出すために，活動場所の入口側に子供の興味関心のある器械・器具を設置することや，始まりと終わりが分かりやすい直線のコースを作ること，活動の中心部分を決めて，そこを起点とした器械・器具の配置をすること，３名の教師が指導を行うために，３本の直線コースを三角形の形に配置することなど，器械・器具の配置を工夫して指導を行うことが大切である。

（オ）豊かで意味のある生活づくり

①なじみのあるもの

子供たちの生活の中にあり，なじみのある好きな物を題材にすることで，活動に安心感や期待感をもって取り組むことができるようにすることが大切である。

②子供の興味・関心と他教科等との関連性

子供の興味・関心のあることを題材にして，体育では，器械・器具を使って体を動かしたり，図画工作では，制作活動を行ったり，音楽では，題材に関する曲を歌ったり，楽器で演奏したりするなど，他教科等と関連させて指導をすることで，子供たちは共通のイメージをもちながら，意欲的に活動に取り組むことができるようになっていく。

③共通の生活体験

子供たちが共通のイメージをもちながら，友達や教師と一緒に活動に取り組むことができるように，子供たちの生活体験を踏まえて指導内容を設定することが大切である。

④毎年行われる活動

水泳や運動会など，毎年同じ活動が繰り返されることにより，子供たちは見通しをもって意欲的に活動に取り組んでいた。毎年，同じ時期に，その時期に応じた運動を行うことは，期待感や，新しいことに挑戦したいという思いを抱いて活動に向かうために大切である。

（詳細は「令和元年度　自閉症教育実践研究協議会　実践研究集録」）

Ⅲ　今年度の研究について

１　研究テーマ設定の理由

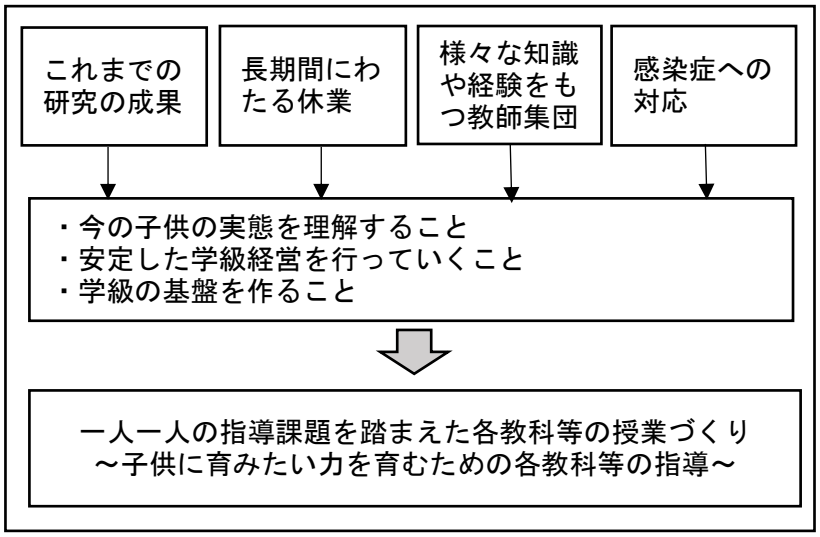


図２　研究テーマ設定の理由

昨年度の２月末に，新型コロナウイルス感染症に対応した一斉休業の要請を受け，本校では，３，４，５月の約３か月間，臨時休業を行った。その間，感染症対策を行いながら学校施設の開放を行ったり，学校全体で各家庭のオンライン環境を調査し，必要な家庭には器機の貸し出しを行いながら，インターネット環境を整え，Web 会議システムを活用したオンラインでの学習に取り組んだりした（オンラインでの学習の取組については，P57～84 に記載）。学校が再開した６月に，３か月ぶりに会う幼児児童は，体が大きくなっていたり，平仮名の読み書きができるようになっていたりするなど，年度末に個別の指導計画に記入されていた実態から大きく成長し，変化していることが分かった。加えて，この新型コロナウイルス感染症については，収束する気配がなく，学校では，感染症対策をしながら制限のある中での教育活動を試行錯誤しながら行っていくことになった。

また，今年度，本校の約３分の１の教師が，他県からの人事交流や他業種から異動してきて初めて特別支援学校で働く，初めて教師の仕事に携わるなど，様々な知識や経験をもつ教師集団であった。本校では，１学級に対して３名の教師が配属されるが，どの学級にも今年度着任した教師がいる構成となっていた。

これらのことから，今まで積み上げてきた研究成果にさらに新たなことを積み上げていくのではなく，まずは，今の多種多様な経験をもつ教師集団で，私たちが関わることのできなかった約３か月で大きく変化した今の幼児児童の実態を理解することが必要であると考えた。併せて，幼児児童の実態を理解するといっても，様々な背景をもつ教師集団であることや，今年度は感染症対策で他学年との交流が制限された環境での教育活動であることなどの理由から，例年以上に学級の基盤作りが幼児児童にとっても，教師にとっても重要になってくると考えた。

そこで今年度は，学級という基盤を作りながら，幼児児童一人一人の発達の状況や障害の状態など，実態を的確に理解し，指導課題を明らかにした上で，日々の実践を行うこと，各学級で幼児児童の実態を踏まえて，何を大事にして授業づくりをしたいのかを決め，授業づくりを進め，幼児児童の変容を基に，指導で何が大切であったのかを明らかにしたいと考え，今年度の研究テーマを「一人一人の課題を踏まえた各教科等の授業づくり～子供に育みたい力を育むための各教科等の指導～」とした。

２　研究の目的

（１）幼児児童の学習上・生活上の困難さから指導課題を導き出し，幼児児童の実態を捉えた授業づくりをする。

（２）各教科等の授業において幼児児童の変容から，目標設定や指導計画，指導内容や指導方法などにおいて効果的であった指導についてまとめる。

3　研究の方法

研究の目的（1），（2）を達成するために，それぞれ以下のように取り組むことにした。

（1）幼児児童一人一人の指導課題を導き出すために，学級担任全員で自立活動の「流れ図」を活用しながら，幼児児童の学習上・生活上の困難さを明らかにし，その理由や原因を探り，整理しながら指導課題を明らかにする。

（2）各学級が幼児児童の実態を把握し，指導課題を導き出した上で，幼児児童にどんな力を育てたいか，何を大切にして授業づくりを行うかを考えて研究テーマや指導の場を設定し，授業実践を行う。また，その授業実践を行いながら，幼児児童の評価を基に，目標設定や指導計画，指導内容や指導方法などにおいて効果的であった指導について整理する。

Ⅳ　研究の経過・結果・まとめ

1　自立活動の授業づくりについて

（1）自立活動の指導について理解する

まずは，自立活動の指導について，各学部で研修会をし，以下のことを共通理解した。

・子供たち一人一人の実態に応じて指導するものであること。

・子供の調和的な発達の基盤となる力を育てるための指導であること。

・子供たち一人一人の実態から障害による学習上又は生活上の困難さを把握し，指導課題を明らかにすること。

・子供の評価を基に，授業や指導計画を見直し続けること。

その上で，今年度は，平成 30 年度の研究で明らかになった指導課題を導き出すプロセスとポイントに沿って，幼児児童一人一人の実態から指導課題を導き出し，自立活動の指導に取り組んだ。

（2）幼児児童の実態を捉え，指導課題を導く

今年度の研究は，月に１回程度設定し，研究日を中心に進めてきた（P○に研究日等の日程を記載）。幼児児童の実態を的確に捉えるために，図３の平成 30 年度の指導課題を導くプロセスを参考にした流れ図を活用し，表３の流れで進めてきた。

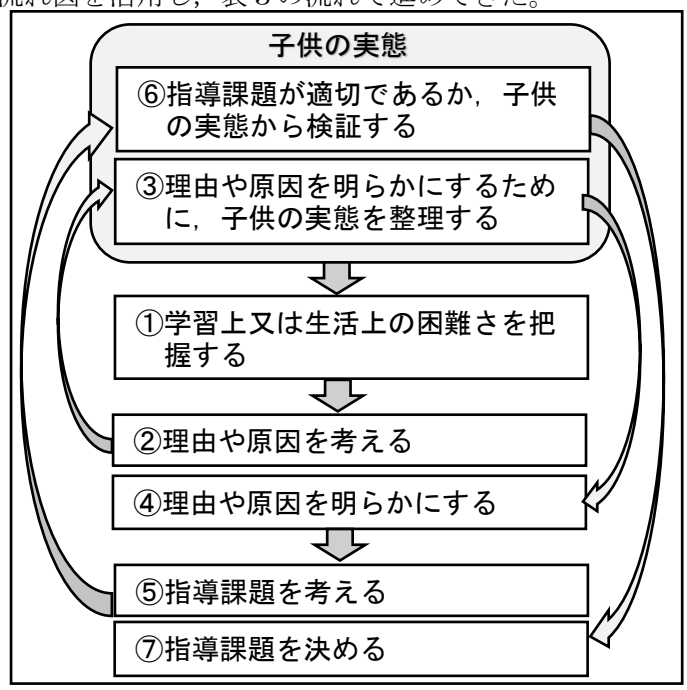
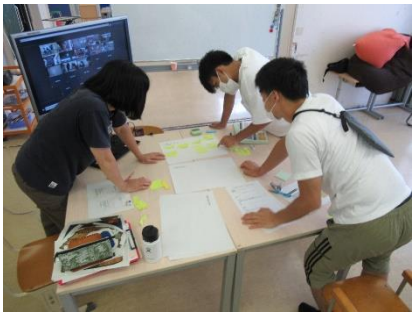


図３　指導課題を導くプロセス

表３　研究日の経過

実施日	内容
6 月 12 日	全校研究の進め方を共通理解する
6 月 22 日	各学部会で，自立活動の指導について共通理解する
6 月 26 日	各学級で，代表児を決め，流れ図の項目に沿って，指導課題を導く
6 月 29 日～7 月 2 日	個別の指導計画作成日 各学級で，各児童の流れ図の考え方を基に，各児童の指導課題を導き出し，個別の指導計画を作成する
7 月 15 日	各学級の研究テーマ，指導の場を共通理解する
9 月 23 日	今後の授業研究会の進め方の確認をする
9 月 30 日	流れ図の反省について
10 月 26 日～10 月 30 日	個別の指導計画の前期評価をする
11 月 11 日	授業研究会１回目
11 月 25 日	授業研究会２回目
12 月 9 日	授業研究会３回目



6 月 22 日に小学部主事（平成 30 年度の研究主任）から各学部の学部会で自立活動とは何か，自立活動はなぜ行うのか，どのように行うのかなどについて説明をしてもらい，共通理解をした。その上で，６月 26 日の研究日に，図２の指導課題を導く方法を基にした図３の「流れ図」（幼児児童の困難さから自立活動の指導計画への流れを表した図）を活用して，教師が意見を出し合いながら代表児１名の指導課題を導き出すことに取り組んだ。今年度，感染症対策により，研究日はすべて Web 会議システムの ZOOM を活用して行った。各学級を

ZOOM でつなぎ，進捗状況を確認したり，質問等を随時聞き取ったりしながら，「流れ図」を活用して，指導課題を導き出すことができるようにした。また，その後の６月 29 日から７月２日までの個別の指導計画作成日には，学級の他の児童についても，「流れ図」を活用して，子供一人一人の指導課題を導き出すことに努め，個別の指導計画を立案した。

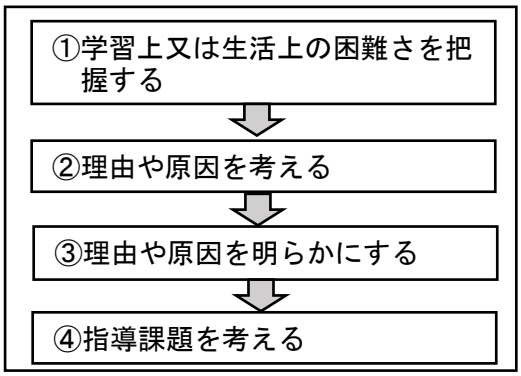


図４　流れ図の項目

（３）幼児児童一人一人の指導課題を導き出した授業づくりの実際

今年度，各教師が一事例取り上げて自立活動の授業づくりについてまとめたが，本誌では，各学級の代表児１名の授業づくりの実際について報告する。（P12～）

「自立活動の指導」の指導事例（幼稚部ひよこ組　Ａ児）

幼稚部ひよこ組　教諭　大門　志帆

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・教師や友達が関わろうとしてくれても気付かず，一人で遊びを楽しんでしまう。 ・自分の思い通りにいかないことや，嫌なことがあると，泣いたり相手をつねったりしてうまく伝えられない。
②困難さの背景とその実態	**〇一人の遊びに集中しているため，教師や友達からの関わりに気付いていない。** 水遊びやプラレールなど好きな遊びのときには，教師や友達が近付いたり言葉を掛けたりしても視線を向けたり受け入れたりせず，一人で遊びに没頭している。 **〇相手に気持ちや要求を伝える経験や伝える表現が少ない。** 泣いたり，気持ちが高ぶっていたりするときに声は出るが，言葉はない。自分の気持ちに応えてもらえなかったときには感情を抑えきれず泣いてしまう。 **〇望ましくない関わり方で相手や周りの大人に自分の気持ちを伝えている。** 嫌なことがあるときには，相手をつねる。また，一緒に遊ぼうとする相手を押したり，友達が遊んでいるおもちゃを取ったりする。
③指導すべき課題	教師に抱きかかえられてグルグル回してもらったり，くすぐられたりするなど身体接触を伴う遊びを好み，笑顔で声を出し，楽しい気持ちを表す。その際，教師に近付いて視線を合わせる等，教師を意識する姿が見られる。一方でおもちゃを友達と共有したり，一緒に遊ぼうとする教師からの働き掛けを受け入れたりすることが少ない。 これらのことから，まずは，身近な大人と一緒に好きな遊びをする中で，教師からの関わりに気付き，楽しい気持ちやうれしい気持ちを感じる経験を増やすことが大切だと考える。その中で，教師と視線を合わせたり，楽しい・うれしい気持ちを表現したりする場面を増やしていきたい。
④指導目標	・教師からの関わりに気付いたり，期待したりしながら教師と一緒に遊ぶ。 ・好きな遊びを通して，自分の気持ちを声や表情，体の動きで表現する。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項目		・情緒の安定に関すること	・他者とのかかわりの基礎に関すること	・感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること		・コミュニケーションの基礎的能力に関すること

⑤具体的な指導内容	・教師からの関わりに気付き，受け入れて遊ぶ。	・教師に近付いたり，視線を合わせたりして楽しい気持ちを表現する。	・写真カードや具体物を見て行き先や活動内容を知り，教師と一緒に取り組む。
⑥指導の場	日常生活の指導・個別活動・朝の遊び・設定遊び	朝の遊び・設定遊び・個別活動	日常生活の指導・朝の遊び・設定遊び

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	遊び全般	朝の遊び・個別活動	日常生活の指導・設定遊び
⑦指導内容・方法	・自分に関わろうとしている教師の存在に気付くことができるように，本児の近くで視線を合わせながら言葉を掛ける。 ・教師に近付いたり，教師と視線を合わせたりした際には楽しい気持ちを共有する。	・期待して教師の声や動きを見聞きできるように本児と視線を合わせ，「せーの。」等の掛け声をしてから身体接触遊びを行う。 ・本児が好きな遊具で，教師と一緒に楽しめる遊具を設定する。	・本児が行き先や活動内容を理解しやすいよう，場所の写真カードや活動内容を象徴する具体物を提示したり，身振りや言葉を掛けながら誘ったりする。 ・自分から取り組もうとした際は，たくさん褒める。

Ⅱ　指導の経過・結果

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	遊び全般	朝の遊び・個別活動	日常生活の指導・設定遊び
指導の実際と子供の評価	・教師が正面から名前を呼び，手を出すと，笑顔を向けたり，視線を合わせたりしながらハイタッチをして返事をすることができるようになった。 ・教師が視線を合わせながら「まてまて。」と言って近付くと，教師と視線を合わせながら笑顔を向けたり，走ったりして遊ぶことができた。 ・抱っこで遊ぶ際に何回か繰り返し遊んだ後，教師が少し離れた位置で手を広げて待っていると，笑顔で視線を合わせながら抱き着き，やりたい気持ちを表現することができた。 ・教師の手を引き，パネルシアターのパネルに手を伸ばしたり，取ってほしい物に手を伸ばしたりすることが増えてきた。	・教師が本児の正面からくすぐると教師と視線を合わせて笑ったり，くすぐりを期待して自分から近付いたりすることが増えた。 ・自分から教師に近付き，教師の手を取ってグルグル回しをするように何度も伝えたり，教師に笑顔を向けて楽しい気持ちを表現したりすることができた。 ・トランポリンでは，教師と手をつなぎ視線を合わせて体を動かしたり，笑顔を見せたりして教師と一緒に遊ぶことができた。 ・本児が好きな「アンパンマン」のパネルシアターでは，教師の歌に合わせて出てくるパネルをじっと見たり手を伸ばしたりすることができた。	・ふりかけを見て給食の時間ということが分かり教室に入ったり，石鹸を見て手を洗うことが分かり手洗い場に移動したりできるようになった。 ・散歩用の乗り物が見えると，散歩に行くことが分かり，自分から近付き，乗ることができた。 ・教師が提示した活動場所や活動内容の写真カードを見て自分から靴を取り出したり，教室のドアの前に移動したりすることが増えてきた。 ・トイレに行きたいときに教師の手を引いてトイレの前に行ったり，トイレバッグを手に取ったりして伝えることがあった。 ・自分の遊びたい遊具の写真カードを三択の中から選ぶことができるようになってきた。
困難さの変容	教師が正面から大きく身振りをしたり，言葉掛けをしたりするなどの関わりをしたことで教師からの関わりに気付き，視線を向けたり自分から近付いたりすることが増えた。本児が好きな身体接触を伴う遊びや遊具を使った遊びをすることで教師からの関わりを受け入れ，一緒に遊べるようになった。写真カードや具体物を見せながら次の活動に繰り返し誘うことで，次の活動場所や内容を理解できるようになり，自分から靴やトイレバッグを持つなど，準備する様子も見られるようになってきた。さらに，教師が提示した複数の写真カードから自分の遊びたい遊具のカードを選択するなど，写真カードを用いて気持ちを伝える様子も見られる。一方で，好きな遊びに集中していると，活動の切り替えが難しく，教師が次の活動の写真カードや具体物を提示すると耳をふさいだり，泣いたりすることがある。		

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　教師が本児の好きな遊びや遊具を使用して活動内容を設定すること

教師が，本児の好きなトランポリンやブランコなどの遊具を使用することで，教師からの関わりを受け入れ視線を合わせたり笑顔を向けたりすることができた。また，本児が好きな追い掛けっこやくすぐり遊び等を繰り返し行うことで，教師からの関わりを期待して近付いたり，自分から教師の手を引いたりすることが増えた。

２　本児の正面で関わったり，本児と目を合わせながら言葉を掛けたりすること

本児の正面から名前を呼んだり，本児の視線の高さに写真や具体物を提示したりして関わることで教師からの働き掛けに気付き，視線を向けたり，顔をのぞき込んだりすることが増えた。遊んでいる本児の様子に合わせて，「楽しいね。」，「～したいんだね。」など，本児の思いに寄り添った言葉掛けを繰り返すことで，教師に笑顔を向けたり，自分から近付いたりして気持ちを伝えることが増えた。

「自立活動の指導」の指導事例（幼稚部　りす組　Ｂ児）

幼稚部りす組　教諭　若林　季

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・やりたくないことを要求されたときや嫌なことをされたとき，気持ちをうまく伝えられず，泣いたり物を投げたりして表現することがある。 ・自分ではうまくできず手伝ってほしいことがあるときに，教師にお願いすることができないでいる。
②困難さの背景とその実態	**○気持ちを表現する手段が少ない。** 嫌な気持ち，悲しい気持ちになったときに，泣くか物を投げて怒りを表現する。 **○自分の思いを表現する言葉が少ない。** 気持ちを表現したり，助けを求めたり，要求したりする言葉が少なく，表出できない。 **○人と関わり，気持ちを共有したり，やり取りしたりする経験が少ない。** 自分ではうまく解決できないときに，教師が近くにいても呼んだり声を掛けたりすることが少ない。困ったときに，自ら発信して助けを求めることができない。 **○教師からの働き掛けを受け入れることが難しい。** 教師がおもちゃを持って行き，遊びに誘うと，何も言わずに教師の手から取り，一人で遊び始めたり，教師が他の遊びを提案しても手を払いのけたりして受け入れることができない。
③指導すべき課題	「あっち。」や「こっち。」，食べたい物の具体的な名称などは以前から言葉で伝えられることもある。しかし，それだけでは伝えきれない場面が多く，自分の思いをうまく表現できずに困っている場面も見られる。また，自分から教師に関わったり思いを伝えたりすることは少ない。そこで，教師や友達と関わりながら遊ぶことを通して，教師とのやり取りを楽しみ，「○○が楽しい」，「もっと～してほしい」などの思いを伝えようとする意欲を育みたい。
④指導目標	・教師と一緒に体を動かしたり，物を介して遊んだりして，教師とのやり取りを楽しむ。 ・自分のやりたいことや教師にやってほしいことを，言葉や身振りなどで伝える。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項目		・情緒の安定に関すること	・他者とのかかわりの基礎に関すること			・コミュニケーションの基礎的能力に関すること ・言語の受容と表出に関すること

⑤具体的な指導内容	・教師と一緒に体を動かしたり物を介して遊んだりして，「楽しい」と感じる経験を重ねる。	・教師とやり取りをしながら遊ぶ。	・教師との遊びのなかで，やりたいことや要求を伝えること。
⑥指導の場	朝の遊び・設定遊び	個別活動・朝の遊び・設定遊び	朝の遊び・設定遊び

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	朝の遊び	個別活動・設定遊び
⑦指導内容・方法	・「もっと～したい」という思いをもって遊べるように，体を使った遊びや，数字を使った遊びなど，本児の好きな物で一緒に遊ぶ。 ・教師とやり取りできるように，本児の働き掛けに合わせて，教師が表情豊かに動きや声で反応する等，本児の好きな関わり方で遊ぶ。	・教師の働き掛けに合わせてペープサート等を操作して遊ぶ。 ・教師や友達とやり取りをしながら遊べるような活動を設定する。

Ⅱ　指導の経過・結果

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	朝の遊び	個別活動・設定遊び
指導の実際と子供の評価	・教師とアルファベットを交互に言い合い，発音しづらい「ジェイ」の音を「ゼイ」と言い間違えて笑い合う遊びを繰り返した。 ・教師と交互に数字を言い合ったり，教師が書いた数字に続けて書き足したりしながら遊んだ。 ・読んでいた絵本をきっかけに，教師が「シュルルルー。」と大きな動きと声で遊び始めると，「もう一回。」と言って繰り返し同じ動きをしてほしいことを伝えて遊んだ。 ・抱っこをしたり身体接触を伴う遊びをしたりする中で，笑顔で視線を合わせ，「もう一回やってほしい」という気持ちを，声や指差し，身振りなどで伝えて繰り返し遊んだ。 ・教室に貼ってある，おもちゃの写真カードを教師に手渡し，取ってほしいおもちゃがあることを伝えるようになってきた。	・個別活動では，掛け合いのある「カレーライスの歌」に合わせて，具材や調味料のイラストカードを鍋に入れたり，調理器具で炒める動作をしたりした。他の遊び場面で，「にんじん。」「にんじん。」等と教師と掛け合いをしながら歌うことがあった。 ・動物のイラストに食べ物を食べさせるふりをする教材では，教師の言葉を聞いて「ねずみ。」や「いちご。」と言うことがあった。 ・乗り物遊びでは，教師が「ぶつかる，ぶつかる。」と言いながら三輪車をこぐと，逃げ回ったり追い掛けてきたりした。また，友達が乗るそりを三輪車で追い掛けたり，わざとぶつけたりして遊んだ。
困難さの変容	教師と追い掛けっこをしたり，数字やアルファベットを交互に言ったり書いたりするなど，教師とやり取りをしながら遊ぶことができるようになってきた。また，友達とおもちゃや本の取り合いになったときに，「かして。」，「ちょうだい。」と言ったり，教師の提案や要求を拒否するときは「ちがう。」，「いらない。」と言葉で伝えたりする場面が増えてきた。教室からプレイスペースに出たいときは「開けて。」と言ってドアを開けてほしいことを伝えられるようになってきた。また，取ってほしいおもちゃがあるときは，おもちゃの写真カードを教師に手渡して伝えられるようになった。しかし，友達からの関わりが嫌だと感じ，相手の髪の毛を引っ張ってしまったり，思い通りにならないことがあると，教師にうまく伝えられず，突然泣き出してしまったりすることがある。	

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　幼児の好きな関わり方で遊ぶこと

本児は，教師が大きな動きをしたり，大きな反応をしたりして関わることを好む。絵本や遊具を介して，「シュルルルー。」や「まてまてー。」など大きな動きや表情，声などで関わることで，「もっと～したい」，「もう一回やってほしい」という思いを引き出すことができた。

２　幼児の好きな物を介して遊ぶこと

本児が興味のある数字やアルファベットであれば，教師の働き掛けを受け入れ，交互に書いたり言い合ったりするなど，やり取りをしながら遊ぶことができた。歌や調理も好きである本児には，教師が歌う「カレーライスの歌」を聴きながら，食材のイラストカードを鍋の中に入れたり、中身をかき混ぜたりして操作することは，教師の働き掛けを受け入れたりやり取りをしながら遊んだりすることのできる活動であった。また，教師と一緒に寝転がりながらぐるぐる回るような体を使った遊びでも，「楽しい」「もう一回やってほしい」という思いを，表情や身振りなどで繰り返し伝えて遊ぶことができた。

３　教師と一緒に遊んで「楽しい」という経験を積み重ねてきたこと

教師と一緒に遊んで「楽しい」，「もっと～したい」という思いを重ねてきたことや，教師と一緒に遊びながら好きな遊びが増えてきたことで，伝える意欲が育ちつつあり，遊びたいおもちゃのカードを教師に手渡し伝えることができるようになってきた。

「自立活動の指導」の指導事例（幼稚部うさぎ組　C児）

幼稚部うさぎ組　教諭　遠藤　佑一

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・初めての環境で活動するときや，初めて取り組む活動のとき，苦手なことに取り組むとき，何かを指示されたときなど，取り組むことを拒んだり，物を投げたり，たたいたり，その場から離れたり，別の活動を続けたりすること。
②困難さの背景とその実態	**○様子や動きを表す言葉など，正しく理解している言葉が少ない。** 友達とぶつかったときに，「どっちーんしたね。」と言ったり，服を脱ぐことを「ばんざいする。」と言ったり，紙を投げて遊ぶことを「ひらひらする。」と言ったりするなど，知っている絵本に出てくる言い回しをそのまま使ったり，動作を行うときに掛けられた言葉をその動作語として使用したりすることが多い。 **○伝えたいことを適切に言葉で伝えることが難しい。** 苦手なことや嫌なことを言葉で伝えることが難しく，全て「ばいばいしー。」と言って，働き掛けてくる相手を拒む。苦手なことや，嫌なことがあると，独語が増えたり，思っていることと逆のことを言ったりするなどする。 **○初めて関わる人や行うこと，活動の切り替えなど，変化への対応が難しい。** 初めて関わる人に抵抗を示し，一度苦手だと感じると，受け入れるまでに時間がかかる。登校時に母親から離れることが難しく，特定の友達が来るまで玄関に入れないことが多い。活動の終わりや移動を伝えられると，拒否して遊び続ける。
③指導すべき課題	安心して活動できる環境の中で，教師とのやり取り遊びを楽しみ，様々な活動に取り組みながら，気持ちを表す言葉や動きを表す言葉などを覚えて，適切に自分の気持ちを相手に伝えられるようにする。
④指導目標	・教師と一緒にごっこ遊びや絵本の再現遊びをするなど，やり取り遊びを楽しむ。 ・様々な遊びや活動に意欲的に取り組む中で，気持ちを表す言葉や動きを表す言葉を覚えたり，使ったりする。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項目		・情緒の安定に関すること ・状況の理解と変化への対応に関すること	・他者とのかかわりの基礎に関すること ・自己の理解と行動の調整に関すること	・認知や行動の手掛かりとなる概念の形成に関すること		・コミュニケーションの基礎的能力に関すること ・言語の形成と活用に関すること ・状況に応じたコミュニケーションに関すること

⑤具体的な指導内容	・自信をもって取り組めることを増やすために，様々な活動に意欲的に参加し，成功体験を重ねる。	・活動動画，タイマーなどを活用し，順序や，内容，量，時間を視覚的に理解し，安心して活動に取り組む。	・気持ちや動きを表す言葉を聞いたり使ったりしながら，教師と一緒にやり取り遊びを楽しむ。
⑥指導の場	設定遊び・個別活動	日常生活の指導	遊び全般・個別活動

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	設定遊び，個別活動	日常生活の指導，遊び全般
⑦指導内容・方法	・興味・関心の高い教材等を使う。 ・教師と一緒に道具を操作したり，絵本を見たりしながら，動きを表す言葉や，物の名前などを覚える。 ・具体的な活動内容が分かるように手本動画を事前に見る。様々な表現をしていいことを伝え，教師の手本と違う動きを考えて表現したときには，称賛したり，教師も一緒に行ったりする。	・活動の内容や順序などを理解できるように，スケジュールを文字で書いたり，写真やイラストカードを活用したりして伝える。 ・気持ちや動きを表す言葉を使うときには，身振りや表情，擬音語や擬態語なども使用しながら伝える。 ・タイマーで終わり時間を示したり，本児に終わりの時間を決めてもらったりする。

Ⅱ　指導の経過・結果

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	設定遊び・個別活動	日常生活の指導・遊び全般
指導の実際と子供の評価	・遊びから個別活動に切り替わるときに，個別活動では普段から繰り返し楽しんでいる絵本や，道具を教材として使用することを示すことで，遊んでいるおもちゃ等を片付けて，スムーズに学習スペースへ移動できることが増えた。 ・運動遊びが始まるときに，実際に取り組む場所や使用する器械・器具が示された手本動画を用意したことで，本児に動画が始まることを伝えると遊びを切り上げて着席するようになり，その後，活動場所に移動するための準備を進んで行うようになった。 ・素材遊びを始めるときに，活動内容や流れが示されている動画を視聴することで，説明後の活動にスムーズに移動し，活動の途中で別の遊びを始めたり，その場から離れたりすることなく，最後まで活動に集中して取り組めることが増えた。 ・設定遊びの中で本児から提案されたことを，危険のない範囲で受け入れたり，教師も一緒に楽しんだりしたことで，意欲的に活動に参加したり，様々な表現を考え出したりして，教師に伝えることが増えた。	・どの順番で何回行うことができるかなどが分かるように順番表を用意したことで，自分の番まで待つことができるようになった。 ・残り時間が視覚的に分かるタイマーを使用することで，終わりに気付いて活動を切り替えられることが増えた。 ・石や木片などが落ちている場所で靴を脱いで遊ぼうとしているときに，「危ないから靴を履いてね。」ではなく，「足の裏ちっくんして，痛い痛いなったら大変だから靴はこうね。」などと身振りや表情を交え，具体的で分かりやすい言葉を使って伝えることで，教師の指示を受け入れられることが増えた。 ・朝の遊びや休憩時間に興味・関心の高い絵本やアニメを話題にして再現遊びを行うことで，本児から教師を遊びに誘うようになったり，その中で出てくる言葉を再現遊び以外の日常場面で使用したりすることが増えた。 ・外遊びで，本児が教師にシャベルで穴を掘ってほしいことを「しゃべってください。」と伝えてきたときに，「先生はシャベルで穴をザクザク掘りますね。」と道具の名前と動作を表す言葉を正しく伝え，実際に穴を掘りながら「あなあなほりほり♪」とリズムを付けながら言ったり，「ザクザク。」と言ったりすることで，「青いシャベルで，ザクザクしてください。」や「穴を掘ろうよ。」などと正しい表現で教師に要求できることが増えた。
困難さの変容	・一人遊びが減り，教師を遊びに誘ったり，教師が提案した遊びを受け入れて一緒に楽しんだりすることが増えた。 ・タイマーが鳴ったら今取り組んでいることを終わりにして次の活動に取り組むことなど，終わりの時間を自分から提案し，切り替えを行うことができるようになった。 ・活動の説明が始まると進んで着席し，初めて取り組む活動でも，取り組む内容を理解して意欲的に活動へ参加できることが増えた。 ・適切な言葉で要求や拒否を伝えられることが増え，物を投げたり，たたいたりすることが減った。 ・教師との好きな関わり遊びが増え，教師に「○○（苦手なこと）したら，△△（好きな遊び）しようね。」と言う等，好きな遊びを励みに，自分から苦手なことに取り組もうとすることが出てきた。	

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　本児にとって分かりやすい言葉や表現で指示をしたり，活動内容を伝えたりしたこと

活動内容等を伝えるときに，身振りや表情，擬音語や擬態語を使用したり，視覚的に分かりやすい教材を使用したりすることで本児が伝えられた言葉の意味や活動内容を正しく理解できたこと。

２　教師との信頼関係を高め，教師と一緒に行いたいやり取り遊びを増やすことができたこと

一人遊びが減り，教師とのやり取り遊びが増えたことで，教師が使う言葉を聞いたり，間違って覚えている言葉を正しく教えてもらったりする機会が増え，語彙の拡大につながった。また，教師と一緒に遊ぶことを励みに苦手なことに取り組んだり，切り替えのきっかけになったりすることが増えた。

３　タイマーやスケジュール表を活用し，始まりと終わりを明確にしたこと

活動の切り替えのタイミングや順番，活動内容が明確になり，見通しをもち，安心して活動に参加することができるようになった。

「自立活動の指導」の指導事例（小学部１年生　Ｄ児）

小学部１年１組　教諭　小林　健吾

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・睡眠リズムが安定しない。 ・常に動いており，じっくりと活動に向かったり休んだりすることができない。 ・壁や床を強くたたくためけがが多い。本児はけがに気付かずやり続けてしまう。 ・大人の手を引く，体によじ登る以外に，自分の要求を伝える方法がない。
②困難さの背景とその実態	**○生活リズムを作ることが難しい。** 休息を取ることや落ち着いて過ごす経験が少なく，睡眠や遊び，生活習慣などを作ることが難しい。また，睡眠リズムを整える薬の調整はまだできていない。 **○周辺視遊びやあご打ちなど自己刺激行動を続けている。** 感覚遊びが多く，物に働き掛けることが難しいため物の操作や機能を学習することが難しく因果関係や始点終点の理解が育ちにくい。 **○感覚の鈍麻** けがをしていることに気付かない等，感覚の鈍麻が見られる。そのため自己刺激も激しくないと満足ができず常に動いていたりあごや足を打ちつけていたりする。 **○人とやり取りする経験が少ない。** 感覚遊びに没頭し，人の働き掛けに気付いたり一緒に活動する経験が育ちにくいため人に働き掛ける力が弱かったり人からの働き掛けに気付きにくかったりする。
③指導すべき課題	・教師の呼び掛けに気付く等，人への意識を高め，人と一緒に活動することの楽しさを感じられるようになってほしい。 ・教師と一緒に落ち着いて物と関わり，物事の意味を知り，満足感や自分でやった達成感を感じてほしい。
④指導目標	・教師の呼び掛けに気付いたり応えたりする。 ・教師と一緒に落ち着いて物を見たり，操作したりする。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項目		・情緒の安定に関すること	・他者とのかかわりの基礎に関すること	・保有する感覚の活用に関すること		・コミュニケーションの基礎的能力に関すること

⑤具体的な指導内容	・教師の呼び掛けに気付いたり応えたりする。	・教師と一緒に落ち着いて物を見たり，操作したりする。	・感覚に働き掛ける遊具で活動をしたり，休息を取ったりする。
⑥指導の場	教育活動全般	国語・算数・自立活動	休み時間

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	教育活動全般	国語・算数・自立活動	休み時間
⑦指導内容・方法	・教師からの働き掛けに気付けるように正面から関わり，視線を合わせてから本児に向けて言葉を掛ける。	・正面から具体物を提示したり，言葉を聞かせたりする。また，入れたり片付けたりする場所を明確に示して伝える。 ・終わりや，活動の結果が分かるように，刺したり，入れたりした際に，手応えや音の出る教材・教具を使用する。	・本児から腕を引いたり，声を掛けて「～してほしい」と要求があった際には，正面から視線を合わせて応えたり言葉を掛けたりして応えるようにする。 ・休息を取る際は，落ち着いた状態を作れるように，教師に体を預けて一緒に休んだり，教師が，本児の手や足に触れたり動かしたりしながら身体接触を伴うやり取りを行う。

Ⅱ　指導の経過・結果

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	教育活動全般	国語・算数・自立活動	休み時間
指導の実際と子供の評価	・教師が，正面から視線を合わせて名前を呼んだり，具体物を提示したりすると，その働き掛けに気付いて視線を教師に向けたり，提示した物に手を伸ばしたりすることができた。 ・９月になると，３メートル程離れた距離から本児に対して名前を呼び掛けると動きを止めて振り返るようになった。 ・着替えの際に，更衣室で着替えの袋を正面から見せながら「着替えるよ。」と言葉を掛けると服を脱ぐようになった。12 月頃になると「座って。」や「トイレに行くよ。」,「片付けて。」などの自身に掛けられた言葉に気付いて教師と一緒に行動に移すことが増えてきた。	・一人で椅子に座り，教師が正面から提示する教材をじっと見たり，自分から手を伸ばしてやろうとしたり，うまくできないときに教師の手を取り「いっしょにやってほしい」という思いを伝えることができるようになってきた。 ・本児が操作することができるスイッチ教材や，音と光の出るコマを使用した際に，教材が動いたり，光ったりすることに気付き，手元をじっと見るようになった。 ・輪抜き課題では，６月の段階では，２軸を抜くことも難しかったが，12 月頃には，手元や，少し先を見ながら輪を操作し，３軸の輪抜きがスムーズに行えるようになってきた。	・遊びの時間や休み時間など，好きなつり遊具で遊ぶ際には教師の顔を見ながら腕を引いて「やりたい」という要求を伝えることができた。さらに，押している教師を見ながら笑顔を見せたり，つり遊具が止まると，再び教師の腕を引いて「もっとやってほしい」と何度も要求したりするなど，教師の働き掛けやその結果を理解してやり取りをしたり応えたりすることができた。 ・教師に体を預けて体の力を抜く等，ゆっくり休んだり，教師が本児の手や足に触れると視線を向けたりするなど落ち着いて過ごすことのできる時間が増えてきた。11 月頃にはクッションに一人で座ったり，横たわったりするなど教師からの身体接触を伴うやり取りがなくても落ち着いた状態を保てるようになってきた。
困難さの変容	・一人で座っていられるようになり，教師が読み聞かせる絵本を見て，展開に期待して教師にほほ笑み掛ける等やり取りを楽しんだり，呼び掛けにタッチなどで応えたりするようになってきた。手元や操作する物に視線を向けたりすることができるようになり，図画工作で行った絵の具での活動では，絵の具の入ったカップを自分で持ち，キャンバスに垂れる様子をじっと見つめたり休み時間にタブレット端末を見たり，画面に触れたりして過ごすことができるようになってきた。 ・つり遊具に乗せてほしいときや揺らしてほしいときに，教師の顔を見ながら腕を引いて連れていくようになり，活動の中で楽しい気持ちを教師に向かって笑顔を見せ気持ちを共有するようなやり取りが増えてきた。 ・足を踏み鳴らしたり，壁をたたいたりする行動が減った。手に持った物であごをたたく行動は見られるが，以前のようにたたき続けることは減った。		

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　教師が正面から，視線を合わせて関わったこと

教師が視線を合わせたやり取りを徹底したことで，本児が自分に働き掛けられていることに気付き，本児からも教師に視線を向けて関わろうとしたり，教師の働き掛けに応じたりするようになった。

２　感覚に働き掛ける活動を存分に行ったこと

回転遊具等を用いて，壁や床をたたいて充足していた感覚を補ったことで，自己刺激行動が軽減された。その上で，教師とやり取りしながら遊んだことで，人と一緒に活動する楽しさを味わい，「○○してほしい」という思いを自ら伝えるようになった。

３　本児の体を，教師の体に預ける等，リラックスした状態を知る活動を行ったこと

常に動き回っていた本児が，教師と一緒に休息したり，リラックスした状態を味わったりしたことで，目の前の物に気付いたり，落ち着いて物を操作したりすることができるようになった。

「自立活動の指導」の指導事例（小学部３年生　Ｅ児）

小学部３年１組　教諭　五反田　明日見

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・不安なことや自信がないことがあると，泣いたり怒ったりして活動に取り組めないことがある。 ・自分の思いや気持ちを相手に伝わる言葉で表現することが難しい。
②困難さの背景とその実態	**〇失敗を恐れる。これから先に起きることに対して，心配になりすぎる。** 自分一人ではうまくできないかもしれない，母が迎えにくるのかなどと，不安になり，泣いたり大きな声を出したりすることがある。 **〇自分が抱いている感情を受け止めながら，物事に冷静に取り組むことが難しい。** 「早く終わらせなければならない」「自分はこうしたい」などの感情が先走り，落ち着いて教師の話を聞くことができないことがある。 **〇相手への伝え方が分からない。** 教師にやってほしいことを「〇〇先生がやりたかったんでしょ。」と言ったり，母に座っていてほしいときに「ママ，携帯，お菓子。」と言ったりする。嫌なことや悔しかったことを言葉にできず，泣いたり怒ったりして伝えることがある。
③指導すべき課題	・教師と一緒に自分のもてる力，できることを十分に発揮して，一つの活動をやり遂げたり，新しいことに挑戦したりすること。 ・相手に思いや気持ちを言葉で表現すること。
④指導目標	・新しいことに挑戦したり，できることは自分で取り組んだりして，自信をもって一人で取り組めることを増やす。 ・教師とのやり取りを通して，自分の気持ちや思いを相手に伝わる言葉で表現する。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項		・状況の理解と変化への対応に関すること	・自己の理解と行動の調整に関すること	・感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること		・状況に応じたコミュニケーションに関すること

⑤具体的な指導内容	・感情を表す言葉や動きを表す言葉を理解する。	・相手に分かりやすく自分の気持ちや思いを伝える。	・自分でできることは自分で取り組んだり，教師に依頼して一緒に取り組んだりする。	・教師の簡単な手伝いを通して，新しいことに挑戦したり，多くの人と関わったりする。
⑥指導の場	国語・算数・自立活動 いきいきタイム	日常生活の指導 教育活動全般	日常生活の指導	日常生活の指導

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	国語・算数・自立活動 いきいきタイム	教育活動全般	日常生活の指導
⑦指導内容・方法	・本児や友達が映っている動画を見て，その様子を動きを表す言葉で伝える。 ・３文程度の教師の話を聞いて，３場面の順番通りに，イラスト等を並べる。 ・教師の話が理解できるように，手本を動画で見せる。	・教師の話が理解できるように，イラストを描いたり，動作で示したりしながら伝える。 ・本児が気持ちや思いを言葉で表現した際には，「～だったのね。」と語り掛けて共感する。	・見通しをもって取り組めるように，教師が手本を見せたり，言葉掛けをしたりする。 ・初めてできたことや取り組んだことは，ノート等に言葉で書いたり，イラストを描いたりして振り返られるようにする。 ・相手から感謝されたり，褒められたりしてやりがいを感じられる活動を設定する。 ・教師が失敗する姿を見せて，誰にでも失敗することがあるということを教える。

Ⅱ　指導の経過・結果

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	国語・算数・自立活動 いきいきタイム	教育活動全般	日常生活の指導
指導の実際と子供の評価	・自分や教師が映っている動画を見て，「ぼくが，ピアノを弾いた。」「〇〇先生が，顔を拭いた。」などと，誰が何をしたのかを答えることができた。 ・教師の簡単な物語の話を聞いて，身近な名称やその物の動きを表す言葉を手掛かりに，イラストカードを順番通りに並べることができた。 ・じゃがいもの植え方や収穫の仕方などを，教師の手本動画を見たり，教師の話を聞いたりして，活動内容を理解し，自分で取り組むことができた。	・教師の言葉をまねして，「〇〇ちゃん，泣かないでよ。怖いよ。」，「〇〇くん，だめだよ。」，「〇〇くん，止めてほしいってよ。」などと，自分や他者の気持ちを友達に伝えることができた。 ・「朝の会に行きたくない。」「〇〇の授業，飽きちゃった。」などと，「〇〇したくない」という気持ちを言葉で教師に伝えることができた。 ・友達の活動を見て，拍手をしたり，「上手だった。」と言ったりして，称賛することがあった。	・なぜ靴下や靴を履くのか，なぜ給食では何でも食べなければならないのかなどと，「なんで？」と教師に尋ねることが増えた。教師がノートに書いて示したり，教材を作成して説明したりすることで，理由が分かり，行動に移そうとすることが増えた。 ・事前に教師と一緒に一人ですることを決めたり，手順表を見たりすることで，着替えや帰りの支度，おもちゃの片付け，歯磨きなどを一人で取り組んだりする。 ・教師の簡単な手伝いとして，ゴミ捨ての係活動を行った。係活動の名前を「おたすけまん」とし，「おたすけまん」の腕章を用意したことで，意欲をもって取り組むことができた。 ・「おたすけまん。ゴミ捨て係をお願いします。」と言葉掛けすると，自ら“おたすけまんの腕章”を腕につけて，ゴミ袋をゴミ箱から出し，ゴミ捨て場まで持っていくことができた。また，「おたすけまん，行ってきます。」，「ただいま。」と自ら，大きな声で教師に伝え，自信をもって取り組むことができた。
困難さの変容	イラストや文字，動画などを活用した教師とのやり取りを通して，理解できる言葉や物事が増え，なぜそれをするのかの理由が分かり，自ら取り組もうとしたり，取り組むことでどのような良さがあるのかを本児自身が感じて取り組んだりすることができた。また，自分で取り組むことや教師と一緒に取り組みたいこと，自分ではやりたくないことが分かるようになったことで，自分の気持ちや思いを言葉で伝え，教師とのやり取りをすることが増えた。		

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　イラストや文字，動画などを活用して，教師とのやり取りを行うこと

イラストや文字，動画などを活用して，教師とのやり取りを行うことで，活動への見通しをもち，自分のすることが分かり，活動に自信をもって取り組めることが増えてきた。本児が，「なんで？」と疑問に思ったことに対しては，教師が説明する時間を設定し，それらを活用して丁寧に教えることで，本児の理解につながり，本児の行動にも変容が見られた。

２　本児の気持ちを受け止めて，教師とやり取りしたり，一緒に過ごしたりする時間をつくること

本児が特に，「～したくない」という気持ちや思いを教師に伝えたときには，なぜ，それをしたくないのかを聞いたり，「～したくないんだね。」と語り掛けて共感したりした。その中で，やり取りをしながら，「このようにしたらいいのではないか。」という教師からの提案を受けて，取り組むことができるようになってきた。また，言葉で表現できずに泣いたり怒ったりしたときに，別室に移動して，話を聞いたり遊んだりして過ごし，同じ時間を共有することで，本児自身が自分の思いを受け止めてもらえた安心感をもち，自ら，気持ちを整理して，次の活動へと参加することもあった。

「自立活動の指導」の指導事例（小学部４年生　Ｔ児）

小学部４年１組　教諭　稲本　純子

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・好きなキャラクターの名前は答えられることはあるが，「どれにする？」「何をしたい？」などの質問をされると黙ったり，その場から離れたりする。 ・教師からやりたくないことを促されたとき，「きーっ。」と大きな声を出したり，頭を壁にぶつけたりすることがある。 ・遊び（特に，水を床にまいて滑るなどの感覚的な遊び）を終えることが難しい。
②困難さの背景とその実態	**○理解できる動作や感情，状況などを表す言葉が少ない。** 単語で要求を伝えることはあるが，質問に答えたり，教師からの要求などに「したくない。」「嫌だ。」などの気持ちなどを言葉で伝えたりすることが難しい。 **○物事の始まりや終わり，ルールや決まりなどの理解が難しい。** 遊びを止めること，遊びのルール(時間ややり方)を守ことが難しい。
③指導すべき課題	・動作や気持ちを表す言葉など，理解できる言葉を増やし，教師と一緒に好きな活動に取り組んだり，好きな物を介して遊んだりすることを通して，教師の働き掛けを受け入れ，自分の行動を調整したり，自分の気持ちを言葉で伝えたりする力を育てる。 ・物事のルールや決まりを理解する力を育てる。
④指導目標	・教師の働き掛けを受け入れ，自分の行動を調整したり，「○○で遊びたい。」「○○が嫌だ。」などの自分の気持ちを言葉で伝えたりする。 ・物事のルールや決まりを理解する。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項目		・情緒の安定に関すること ・状況の理解と変化への対応に関すること	・他者とのかかわりの基礎に関すること	・保有する感覚の活用に関すること		・コミュニケーションの基礎的能力に関すること ・言語の表出と受容に関すること

⑤具体的な指導内容	・自分の気持ちを文字や絵カードから選択したり，言葉で表現したりする。	・物事の始まりや終わり，決まりやルールを理解する。	・教師の言葉や動作に合わせて，具体物やペープサート，などを操作したり，体を動かしたりする。
⑥指導の場	国語・算数・自立活動・日常生活の指導・いきいきタイム	いきいきタイム・日常生活の指導	いきいきタイム・体育・音楽

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	日常生活の指導	国語・算数・自立活動	いきいきタイム	音楽・体育
⑦指導内容・方法	・好きな活動や遊びの中で，やりたいことやしたいことを聞きながら，教師と一緒に遊ぶ。 ・教師の働き掛けを受け入れられずにいるときは「○○したくないんだね。」などと言葉を掛けたり，文字やイラストを書いたりして，本児の気持ちを確認する。	・自分で順番を決めて課題に取り組む。 ・写真やイラストを見たり，好きなキャラクター，ぬいぐるみを動かしたりしながら，動作や気持ち，物事の状態などを表す言葉を理解する。	・教師の見本を見たり，合図や言葉に合わせたりしながら，具体物を操作したり，体を動かしたりする。 ・学習内容等を複数用意し，内容や順番を選択したり，自分で決めたりする。 ・教師や友達と一緒に簡単なルールのある遊びをする。	・教師の合図や言葉掛けに合わせて，楽器を鳴らしたり，体を動かしたりする。 ・複数の活動を用意し，教師と一緒に何をするのか決めて学習に取り組む。

Ⅱ　指導の経過・結果（記録）

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	日常生活の指導	国語・算数・自立活動	いきいきタイム	音楽・体育
指導の実際と子供の評価	・教師と一緒にタブレット端末で好きなキャラクターの画像を見たり，キャラクターの絵を描いたりして遊んだ。そのときに「〇〇，描く。」と言って，教師に好きなキャラクターの絵を描いてほしいことを伝えたり，「〇〇〇，茶色，描く。」と描いてほしい色を教師に伝えたりした。 ・給食では，その日に食べたいふりかけの種類を自分で選ぶことができた。また，苦手な食材を教師が「〇〇を一口食べてから，△△を食べよう。」と提案をすると，教師の提案を受け入れて食べたり，時には，「一口たべる。」と言って，食べる量を減らしてほしいことを伝えたりすることができた。教師が「一口は少ないね。」と言うと「二口。」と自分から食べる量を増やして提案し直すなど，教師とやり取りしながら量を決めることができるようになった。	・自分で課題の順番を決めたり，やりたい課題を教師に伝えたりすることができるようになった。また，「〇〇の課題を２枚したら，好きな△△の課題をしよう。」等の教師の提案に応じたり，課題の枚数や種類を教師と一緒に決めたりしながら，課題に取り組めるようになってきた。 ・イラストや写真を見ながら，「M，～を〇〇する。」など３語文で話すことができるようになってきた。 ・「おこっている」等の感情を表す言葉や「ピアノひく。」など，身近な動作を表す言葉を使って話しをすることができようになってきた。	・お話遊びでは，キャラクターが登場するとすぐに「ジャンプップー。」等のキャラクターの名前を言ったり，キャラクターを倒すためにジャンプや投げキッスなどの動きをして体を動かしたりして遊ぶことができた。 ・乗り物遊びでは，複数の乗り物から台車を選び，台車に乗って教師に引っ張ってもらう遊びをしたり，自転車遊びでは，乗りたい自転車を自分で選んだり，「赤い自転車，乗る。」など，乗りたい自転車を教師に伝えることができた。 ・カードゲームでは，自分のカードを引く順番やカードの枚数，遊ぶ時間など，イラストやタイマーなどを使用することで，遊びのルールを理解して，教師や友達と一緒にゲーム遊びをすることができた。	・教師の手本を見て，音の鳴らし方やリズムを覚え，曲のリズムに合わせて，ベルハーモニーや太鼓を演奏することができた。 ・しっぽ取りの活動では，鬼役となって，友達のしっぽを取ったり，しっぽを取られないように鬼から逃げたりするなど，ルールを理解して教師や友達と一緒に遊ぶことができた。 ・ターザンロープでは，自分のしたい跳び方をイラストを見て選択したり，教師と目標を確認したりしながら，活動に取り組むことができた。
困難さの変容	・自分のやりたいことや欲しい物などを単語や２～３語の言葉で教師に伝えることが増えた。また，やりたくない活動等をスケジュールカードを外したり順番を変えて伝えたり，「〇〇，ばつ。」「〇〇，しない。」と言って言葉で伝えたりすることが増えた。 ・タイマーを使用して終わりの時間を示したり，文字やイラストなどを活用しながら，遊び方やルールを予め伝えたり，本児と一緒に決めたりしていくことで，スムーズに遊びを終えられるようになってきた。			

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　教師がやり取りしながら本児の気持ちを推測して言葉掛けをするとともに，文字，イラスト，タイマー等を用いて，本児と一緒に気持ちや状況，遊びのルールなどを確認したり，整理したりすることで，自分の気持ちや状況，遊びのルール等を理解しやすくなったと考えられる。

２　本児の好きな活動や遊びの中で，本児のしたいことややりたりことを聞きながら，一緒に遊ぶことや，それらの活動や遊びの中で，やりたい遊びや，使いたい道具などを選択したり，教師と一緒に活動を決めたりしていくことで，教師の働き掛けを受け入れることができるようになってきたと考えられる。

「自立活動の指導」の指導事例（小学部５年生　Ｇ児）

小学部５年１組　教諭　丸山　真幸

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・一定時間注意を向けて課題に取り組むことが難しい。 ・道具などを操作することが難しい。 ・片足立ちの維持や中間位姿勢をとることが難しい。
②困難さの背景とその実態	**〇体性感覚に対する気付きや見る力が弱く，周りの刺激に注意がそれやすい** 自分の身体に入ってくる感覚に対する気付きが弱く，注意を向け，持続させることが難しいため，手元や足元を見ずに活動に取り組むことが多かったり，反応が返ってくるのが遅いとすぐに違う活動に移ろうとしたり，課題中に視線がそれたりする。 **〇握る力が弱く，道具の意味を理解することが難しい** 物を操作した結果に対する気付きや物を適切に操作する経験が少なく，道具の意味を理解して使用したり，道具に働き掛け続けたりすることが難しいため，ばち等の道具を持ってもすぐに離してしまう。 **〇適切な体の動かし方や力の入れ方が分からない** 自分の身体の状態を感じて動きを調整したり，修正して動き直したりして，適切に体を動かしたり力を入れたりすることが難しいため，片足立ちを維持することや，中間位姿勢をとることが難しい。
③指導すべき課題	物を一定の方向に動かす力が育ってきているので，物や自分の身体を動かしたことへのフィードバックを感じながら，手元に注目して物を操作する活動や腕，肩，腰などに適切な力を入れて動かす活動をすることを通して，「自分でできた」という実感を味わえる経験を積み重ねていきたい。
④指導目標	・教師との身体を介したやり取りを通して，適切に力を入れたり，身体を動かしたりするとともに，手元に注目しながら課題を行うことができる。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項目			・他者とのかかわりの基礎に関すること	・保有する感覚の活用に関すること ・感覚を総合的に活用した周囲の状況の理解に関すること	・姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること	・コミュニケーションの基礎的能力に関すること

⑤具体的な指導内容	・教師とのやり取りを通して，自分の身体に注意を向けて，余分な力を抜いたり，適切な力を入れて動かしたりする。	・目で見ながら手や腕の動きを調節し，物を操作する。
⑥指導の場	国語・算数・自立活動	国語・算数・自立活動

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	国語・算数・自立活動	国語・算数・自立活動
⑦指導内容・方法	・余分な力を抜き，リラックスした状態になるように，教師が，力が入っている部位にゆっくり触れたり軽くもみほぐしたりする。 ・教師の合図と身体援助を受けながら腰に適切な力を入れたり，滑らかに腕を上げたり下ろしたり曲げたりする。	・教師に提示された具体物を見てから手に取り，課題を遂行するようにする。また，明らかに形状の異なる具体物を提示し，見分けて穴に入れる課題を行う。 ・操作する道具を指さし，始まりの場所を伝えたり，視線がそれたときは，操作する手を教師が握ったり指さしで示したりして，視線を課題に戻すようにする。

Ⅱ　指導の経過・結果

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	国語・算数・自立活動	国語・算数・自立活動
指導の実際と子供の評価	・手首，肩，腰などの力が入っている部位に，「ダランだよ。」の言葉掛けをしながら触れることで，自分で力を抜くことが増えてきた。 ・膝を立てた仰向けの姿勢で，教師の身体援助と「せーの。」の言葉掛けを受け，腰を自分で上げることができた。 ・教師が本児の腕を持ち，肩方向に少し圧を加えると，自分の腕に注目した。その上で「こっちに動かしてごらん。」の言葉掛けと腕を動かす方向を教師が手を添えて伝えると，自分で力を入れて動かすことができた。動かす力が強いときに，身体を通して力加減を伝えると，それに合わせて動かすことが増えてきている。	・ペグとリングの入れ分け課題では，６月当初は，入らなくても一つの入れ物に入れ続けていたが，７月頃には，入らないと，自分で入らないことに気付いてもう一方の入れ物に入れることができるようになった。11 月頃になると手を止めて入れる場所を目で確認してから入れるようになった。 ・輪抜き課題では，輪が軸に引っかかって抜けないときに，教師が本児の手首を軽く握り，視線が向いたときに一緒に動かして確認することを繰り返すと，手元を見ながら輪をスムーズに動かすことができるようになってきた。12 月頃には、教師が直接身体に触れずに握っている手を指さしながら軸に沿って動かすと、その動きに合わせてついてくることがあった。
困難さの変容	教師と身体を介したやり取りを通して自分の身体を意識して動かすことを行ったことで，以前よりも課題に取り組む時間が長くなった。また，様々な物に働き掛け続けることが増え，ばちを持ち続ける等，道具を使うこともできてきた。入ってくる感覚を基に動きを調整したり，修正したりする力も付いてきたが，片足立ちを維持することや中間位姿勢をとることに対する変容は大きくは見られなかった。	

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　自分の身体に入ってくる感覚への気付きを高めたこと

腕を動かす課題では、教師が手を添えて肩の方向に少し圧を加えることで、腕に注意を向けながら動かすことができ、普段自分で動かすときよりも入ってくる感覚に意識を向けることができた。このような教師と身体を介したやり取りを繰り返し行うことを通して，自分の身体に入ってくる感覚への気付きが高まり，以前よりも「自分でできた」という実感を味わうことができた。そのことにより，以前よりも注意を向ける時間が長くなったり，物へ働き掛け続けたりすることができるようになった。そのため，課題に取り組める時間が長くなったり，ばちを持ち続ける等の道具を使用する様子が見られたりするようになった。

２　感覚に働き掛ける教材を用いたこと

輪抜き課題や入れ分け課題は，抜けないときと抜けたとき，入ったときと入らなかったときで自分に入ってくる感覚が違う課題となる。手に持っている輪、ペグ、リングが入ることで、入らないときに感じられる固有感覚がなくなり、入ったことを理解することができる。これらの課題を用いたことで，自分の身体に入ってくる感覚を基に物を動かした結果を判断することができ，活動の終わりやまとまりの理解につながった。「どうなったら終わりなのか」が分かることで，終わっていない状態を理解することができ，終わりに向かうために目を使って動きを調整しながら物を操作することができるようになってきた。

「自立活動の指導」の指導事例（小学部６年生　Ｈ児）

小学部６年１組　教諭　久野　智宏

Ⅰ　指導について

①学習上，生活上の困難さ	・活動や相手の様子に合わせて自分の言動を調整することが苦手である。
②困難さの背景とその実態	**○自分の決まったやり方や人との関わり方がある。** 「A の場面には A´のこと」等，言葉の使い方や行動のレパートリーが少ない。 **○言葉の使い方や行動の調整が難しい。** してはいけないことの理由を理解していても，行動や言動を調整することができずに，同じことを繰り返し，友達ともめたり，教師から注意をされたりすることがある。また，第二次性徴に伴い異性への興味が出始め，触れようとしたり，音に過敏な反応をして，突発的な行動をしたりすることが増えてきた。 **○気持ちが高揚すると言葉掛けを理解することが難しくなる。** 相手が自分の期待する反応をしてくれなかったり，注意をされたりすると気持ちが高揚し，同じことを繰り返してしまう。落ち着いた状態であれば理解できる教師の言葉掛けも気持ちが高揚すると理解できなくなり，笑い続けてしまう。
③指導すべき課題	自分の気持ちを教師や友達に伝え，自分の願う反応を期待するだけでなく，教師や友達の気持ちや提案を受け入れて自分の言動を調整する力を育てたい。そのために，相手の言葉を最後まで聞くことや，自分と相手の視点を入れ替えて考えることができるように，物事を様々な視点から捉えることを指導していきたい。
④指導目標	・相手の気持ちや周囲の状況を理解して，自分の言葉の使い方や行動を調整する。

指導目標を達成するために必要な項目の選定

	健康の保持	心理的な安定	人間関係の形成	環境の把握	身体の動き	コミュニケーション
選定された項目		・状況の理解と変化への対応に関すること	・他者の意図や感情の理解に関すること ・自己の理解と行動の調整に関すること	・感覚や認知の特性についての理解と対応に関すること		・コミュニケーションの手段の選択と活用に関すること ・状況に応じたコミュニケーションに関すること

⑤具体的な指導内容	・様々なやり方や解き方がある課題に取り組む。 ・自分の経験したことや気持ちを言葉で表現する。	・友達や教師と一緒に活動をする。 ・教師の話を聞いて，活動内容や質問の意図を理解して活動に取り組む。	・教師と一緒に文字や言葉などで相手の気持ちや状況を整理し，望ましい働き掛けの方法や気持ちを落ち着ける方法を確認する。
⑥指導の場	国語・算数・自立活動	いきいきタイム 休み時間	自立活動 教育活動全般

各指導の場における指導内容・方法の設定

指導の場	国語・算数・自立活動	いきいきタイム	休み時間	自立活動・教育活動全般
⑦指導内容・方法	・複数の立体図形を組み合わせて，立方体を作る。 ・間違い探しで，違うところを教師に説明する。 ・自分で撮った写真の様子を文字や言葉で表現する。	・友達と一緒に同じ目的に向かって活動する。 ・教師の活動内容の説明を聞き，大事なことは何かを教師と一緒に確認し，行動を調整する。	・必要に応じて教師が友達の様子や表情を言葉にして伝え，自分で言動や行動を調整するきっかけを作る。	・友達とのやり取り等の状況や自分と相手の気持ち，自分が話したことを文字にして表す。 ・本児の話したことに共感し，本児の気持ちを文字や言葉で整理する。

Ⅱ　指導の経過・結果

＜指導期間：６月～12 月＞

指導の場	国語・算数・自立活動	いきいきタイム	休み時間	自立活動・教育活動全般
指導の実際と子供の評価	・立方体を作るパズルでは，完成図だけを見ながらパズルを組み合わせ，上手くはまらないときは，様々な方向から立体を捉えて，様々な順番や方法でパズルを組み合わせることができた。 ・間違い探しでは，二つの絵を見比べて違うところを「大―小」等の対関係を表す言葉を使い教師に違うところを言葉で説明できた。 ・自分が撮った写真を見て写っている物や場所，人の名前を言葉にし，そのときに自分が抱いた気持ちを文字で表現することができた。	・修学旅行の事前学習で行ったちくわ作りでは，友達と横一列に並んで，粘土でちくわを作ったり，教師の合図を聞いてから友達と一緒に色を付けたりすることができた。 ・行事の発表では,「発表するときは 500 円の声で。待っているときは１円の声で。」と本児が分かりやすい言葉に絵を添えて説明すると，それに合わせて声の大きさを調整することができた。	・本児が友達に「○○くん，ぎゅーして。」と言い, 友達から「いやだ。」と言われたときに，教師が「○○くん, 嫌なんだって。他の遊びにしたら？」と提案すると友達に好きなキャラクターを見せて話すことができた。 ・教師と友達が広場で追い掛けっこをしていると,「○○先生，△△くん, 一緒に来て。ここにいて。」と言い，遊びに加わりたいと伝えた。 ・気になることがあるときに，好意がある女児に「○○さん, あっちいけ。」と言うことが 11 月から増え始めた。教師が「何か気になることあるの？」と尋ねると「○○が気になる。」と気になることを教師に言葉で伝えることができた。	・本児が教師の言葉掛けの意味が分からなくなるほど気持ちが高揚した際に，静かな場所に移動した。ノートにそのときの状況や自分と相手の気持ち，望ましい関わり方を文字にして教師と一緒に考えて、確認した。気持ちが落ち着くと書いた文字に視線を向け，話を聞くことができた。 ・他の友達が活動に参加せず，離れた場所にいると「○○さんも一緒にやろう。」と言葉で友達を誘い掛けることができた。
困難さの変容	教師が本児の気持ちや行動に共感しながら，望ましい関わり方を繰り返し伝えたことで，言葉で友達とやり取りすることが増えてきた。また，友達を活動に誘い掛ける等，表現に広がりが見られた。友達や教師の大きな反応や注目を求めるために，同じ関わりを繰り返すことは少なくなった。しかし，自分が不快な気持ちを抱いたときに，好意がある友達に向かって「あっちいけ。」と伝えることが増えた。教師が気になることを尋ねると何が気になるかを教師に言葉で伝えることが増えてきた。			

Ⅲ　子供の指導において効果的だったこと

１　情報を整理して繰り返し伝えたこと

本児は「A の場面には A′のこと」のように，一つの場面に対して決まったことをすることが多かった。人との関わりでも，自分の期待する反応が返ってくるまで，相手が困るような働き掛けを繰り返すことがあった。教師がそのときの状況や本児の働き掛け，それを受けた相手の気持ちを時系列で文字や絵で表し，整理して繰り返し伝えたことで，状況や相手の様子に合わせて，行動を調整することが増えた。

２　やり取りの成功体験を重ねること

本児は，教師に注意されたり，友達ともめたりしたことの記憶が消えにくく，言葉の使い方や行動のレパートリーが少ないことが実態として挙げられた。教師は，本児が相手を困らせるような働き掛けをした際に望ましい働き掛けに言い直したり，望ましい働き掛けができたら言葉で称賛したりして，やり取りの成功体験を重ねるようにした。転んだ教師に「大丈夫？痛いね。」と心配する等，相手を気遣う様子が見られ，言葉の使い方や行動のレパートリーが増えてきた。

（４）自立活動の授業づくりのまとめ

今年度の自立活動の授業づくりをするに当たって，平成 30 年度の研究で取り組んだ「自立活動の指導課題を導き出すプロセスとポイント」を基に，流れ図を活用しながら，幼児児童一人一人の指導課題を導くことに取り組んだ。そこで,「流れ図」を活用して, 幼児児童一人一人の指導課題を導き出すこと，実際の指導の経過から子供の指導について効果的だったことについてまとめる。

（ア）「流れ図」を活用して，幼児児童一人一人の指導課題を導き出す

今年度の研究では，平成 30 年度の研究で取り組んだ「自立活動の指導課題を導き出すプロセスとポイント」の考え方を基に，学級担任全員で子供たちの指導課題について考え，幼児児童一人一人の指導課題を導き出した。教師一人が指導課題までを導き出してから学級担任同士で見合うのではなく，学級担任全員で子供の困難さと，その理由や背景を明らかにし，指導課題を導き出して個別の指導計画に反映させるという流れで取り組んだ。研究日の中では，学級で対象の子供を１名決めて，研究部が時間配分をしながら,「流れ図」の項目ごとに付箋に書き出したり，まとめたりして進めていく演習形式で取り組んだ。その後，それぞれの学級で，学級の他の幼児児童についても同様に行うこととした。

演習後に，幼稚部３学級，小学部６学級，計９学級にアンケートをとった。

アンケートの項目については,

・研究日で行った演習について，よかったことと難しかったこと

・「流れ図」を作成したことを通して，よかったことと難しかったこと

・個別の指導計画の作成に生かすことができたか

である。それぞれの学級に自由記述で回答をしてもらった。集計については，自由記述の中から，類似している内容をまとめ，整理することにした。

①「流れ図」の作成の演習を通して

研究日に演習をしながら，幼児児童一人一人の指導課題を導き出す「流れ図」の作成を行ったことについてのアンケートから，研究日の進め方と「流れ図」の項目内容について意見が出された。

表４は，研究日の進め方についての意見の一部である。

表４　アンケートから研究日の進め方についての意見の一部

よかった点	難しかった点
・それぞれの項目について，一人で考えるのではなく，学級で様々な意見を出し合い，共有できたことがよかった。 ・みんなで共有できた。 ・子供のことをよく考えられた。 ・複数の教師の視点で, 子供の姿を出し合うことで, 自分の気付きと同じ点，自分が気付いていなかった子供の姿を知ることができた。	・限られた時間の中で，子供の課題を書き出して整理するには大変だった。 ・時間が足りなかった。 ・たくさんの困難さの中から一つをピックアップすることが大変だった。 ・準備する時間がほしかった。 ・理想は，他学級，担任以外の教師や保護者などと仮説を立てていくことも必要ではないか。

今回，１時間の中で，各学級に白紙と付箋を配布し，各項目で時間を区切りながら演習を行った。（Ｐ８の図３指導課題を導くプロセスの考え方を参考にし，Ｐ９の図４「流れ図」の項目を参照。）学校で生活している間，教師一人が特定の子供一人に対応しているわけではないので，学級担任一人一人が知っている子供の行動や言葉などは異なり，また子供の表情や行動，声や言葉の理由などについても教師一人一人が感じたり，考えたりすることは異なる。そのことからも，今回，教師一人一人が付箋に自分の意見を書き，出し合うことで，自分の知らなかった子供の一面を知ることができること，また。同じ学級の教師の考え方や捉え方が様々であることを知る機会となった。担任間で相手の教師との違いを知ることで，一人の子供ことを多面的に捉えることができ，より共通した視点をもって子供に対応することにつながった。

一方で，研究日という限られた時間内では，意見を整理していくことが難しいという意見も出された。事前に資料を配付したり，項目の確認をしたりすることで限られた時間内でも意見が十分に出せるようにしたり，研究日の時間を２時間に設定し，出された意見を集約・整理できるようにしたりすることは今後検討していく必要がある。

次に，「流れ図」の項目内容についての意見の一部である。

表５　アンケートから「流れ図」の項目内容，考え方についての意見の一部

よかった点	難しかった点
・一つ一つの項目ごとに，ポイントがあったので，何を考えるべきか分かりやすかった。 ・「子供が主語になる」など，視点のもち方が分かりやすかった。 ・子供の視点から困難さを考えることができた。 ・担任間で共通理解しながら書き表すことで，児童の困難さを整理しやすくなった。	・流れ図を理解できていないまま進めてしまった。 ・新任教師２人では難しかった。 ・児童の実態や指導すべき課題などが妥当なのかという疑問があった。 ・困難さを考えるときに，子供の視点で表現することが難しかった。 ・困難さと困難さの理由を整理していくことが難しかった。

平成 30 年の研究で明らかになった指導課題を導き出すプロセス（図２参照）とポイントに沿って幼児児童一人一人の指導課題を導き出すことに取り組んだ。「流れ図」を活用して指導課題を導くことが初めての教師も多くいたため，一つの項目ごとにポイントを押さえ，付箋に書く具体例を挙げながら演習を行うことにした。

例えば，①幼児児童の学習上又は生活上の困難さを把握するためのポイントは以下の３つであった。

・子供の立場に立って明らかにすること
・子供の日頃の様子（事実）から整理すること
・日常，関わっている教師だけでは見えないこともあることを考慮し，複数の教師で話す機会をもつと，生活全体が見えてくることもあること

このようにポイントを具体的に示すことで，初めて取り組む教師にも考えやすくすることができた。

例えば，一つ目の子供の立場に立って明らかにするということは，「ぼくは～をする。」，「ぼくは～ができない。」など，子供を主語にして書き出すことを確認することで，子供の表情や行動，言葉などを，教師の視点から子供の視点に置き換えて考えることができた。二つ目の子供の日頃の様子から整理するということは，子供の表情や動き，発した声や言葉の事実をそのまま書き出すことが重要であることを確認した。例えば，「ぼくは，先生の話す言葉が分からない。」と書くと，すでに教師が子供の表情や動き，言葉などから理由を分析して書いていることになるので，この場合は，「ぼくは，先生から話し掛けられたときに，その場から立ち去ったり，大きい声を出したりしてしまう。」などと事実だけを書くようにすることを確認した。具体例を示し，考える視点を共有して進めることで，学級の教師で話し合いながら子供の日常の表情や動き，発声や言葉などを整理することができた。また，子供の困難さの理由についての項目においては，子供は本当に言葉や言葉の意味を理解しているのか，などの子供の実態についての疑問が出てきたときに，子供の実態を教師自身が知らないことを実感し，日常の中で探ったり，確かめたりするきっかけにすることができた。

一方で，考えるポイントや具体的な例が提示されても，子供の困難さを考えることは難しい。子供の困難さを把握するときに，例えば，「子供が遊びをやめられない。」と付箋に書いたとする。これは教師の視点での困っていることなので，子供が困っている視点に置き換えると，「ぼくは，遊びたいのに，遊んでいる途中で先生におもちゃを取られて，泣いてしまう。」と考えることができる。この視点の変換は教師一人では難しいこともあるため，一緒に考えている複数の教師で子供の状況を考えて，「子供は何に困っているのか？」について検討していく必要がある。この視点の置き換えは，すぐにできることで

はなく，一つ一つについて，「これでいいのか。」と不安になることも多い。また，明確な正解はここにはない，ということも事実としてある。そこで，「流れ図」を活用した考え方の経験がある教師が，アドバイザーになって教師の考えを聞きながら進めていくことができる環境が必要である。またこの時点で，教師自身が，子供の困難さに気付くことができていない自分自身を自覚することで，今後，子供の立場に立つ視点を意識した関わり方につながるきっかけになると考える。

②「流れ図」を作成したことを通して

次の表６は，「流れ図」を作成してよかったことの意見の一部である。

表６　アンケートから「流れ図」を作成したことを通してよかった意見の一部

よかった点
・困難さ，背景を実態として深く掘りさげたことで子供理解が深まった。また，困っている様子から「なぜだろう」と考える癖がついた。 ・子供の実態が明確になり，担任全員で共通理解することができた。 ・子供のことを，個人の教師の視点だけはなく，学級担任みんなで話して指導課題を導くことができたことがよかった。 ・３人で課題を共有し，それを考えながら指導に当たるようになった。

よかった点で多く上がったことは，流れ図を活用しながら，学級担任全員で，子供の困難さや困難さの理由を考えたり，話し合ったりすることで，子供の課題や実態の共通理解をすることができたということであった。日々の指導では，教師一人一人が子供の様子を見て，その子供の言動の理由や教師がどのように関わるといいのか試行錯誤をしながら子供とやり取りすることが多い。研究に取り組む中で，学級担任全員で子供の話をすることを通して，子供の表情や動き，声や言葉などの理由に気付きやすくなったり，子供への関わり方をいくつか試したりすることができるようになってきた。自分自身の関わり方だけでは，子供の思いを汲み取ることが難しいことがあったとしても，他の教師の意見を参考に関わり方を変えることで，子供がやり取りに応じてくれる可能性が広がる。

このことから，一人の教師の子供の見方だけではなく，子供と関わっている学級担任全員で子供のこと考えることが重要であるといえる。また，学級担任全員で子供一人一人の指導課題を導き出すことにより，子供の表情や動き，声や言葉などの表現の理由を共有し，共通の指導内容や方法を確認することができたことで，実際の指導場面において，教師が共通のねらいをもった関わり方ができたり，子供が新しい行動などをしたときにも「なぜ，この行動をしたのだろう」と考えたりすることにつながったと考えられる。

次は，「流れ図」を作成して難しかったことの意見の一部である。研究日の進め方（「進め方」と表記）と「流れ図」の項目内容（以下，「項目内容」と表記）の２つについて意見が上げられていたので，まとめて述べる。

表７　アンケートから「流れ図」を作成して難しかったことの意見の一部

	難しかった点
進め方	・流れ図自体を理解することが難しかった。 ・たくさん困難さが出てきて，どの困難さを選択するべきか迷った。正しい方法ではないと思うが，指導目標から考えた部分もあった。 ・経験者が全くいないと書くことが難しいと思う。
項目内容	・障害特性，困難さを出すことが難しく感じた。得意なこと，好きなことが項目として一番上にあると，指導すべき課題としても反映させやすいと思った。 ・大人が困っていることはたくさんあるが，子供が困っていることを考えることが難しかった。 ・「困難さの理由」や「困難さの背景と実態」の区別を付けることが難しい。 ・困難さから指導すべき課題を導いたときに，その困難さの原因が子供の発達的要因なのか，教師の関わりが要因なのか，だんだんと分からなくなった。

「流れ図」は，子供の指導課題を導くための一つの方法であり，項目に子供の情報を当てはめることが目的ではなく，子供の実態を整理し，指導課題を導き出すために活用することを，教師全員に十分に

共通理解する必要があった。この方法以外に，教師が子供の指導課題を導き出すことができればよいのであるが，子供の指導課題を導き出すことはとても難しいことである。「流れ図」は，教師の経験等に関わらず，子供の指導課題を導き出すために，子供の実態を整理したり，教師が順序立てて考えたりするために，活用する手段であることを共通理解する必要があるといえる。

項目内容については，項目を理解することの難しさが多く指摘された。今回は，研究日に１時間の演習を設定したためで，子供の実態を整理する時間を設けずに，子供の学習上又は生活上の困難さから考え始めることにした。特に幼稚部の子供たちについては，子供の困難さが見えにくい、子供が抱えているだろう困難さが、障害特性なのか、年齢なのか、性格なのかが分かりにくい、という意見が上げられた。低年齢の子供の困難さを考えるときには、まずは、日常生活の中での、子供の動きや声、言葉などから考えられる困難さをたくさん挙げることが必要である。その後に、子供の視点に置き換えて困難さを考えていく。そのときに困難さの理由には踏み込まず、子供が表現している言動からできるたけ簡潔に取り上げていくとよいのではないか。また、子供の困難さの理由や原因を探る段階で、理由として考えられる様々なことをその後の日常生活の中で検証していくことが必要である。

③個別の指導計画に活かすことについて

最後に，個別の指導計画に活かすことができたかについての回答である。

表８　個別の指導計画の作成に活かすことができたかについての意見の一部

よかった点	難しかった点
・個別の指導計画の自立活動の部分に反映させることができた。 ・流れ図を作成したことで，子供の中心となる目標や育てたい力を考えやすかった。 ・直接活かすことは難しかったが，子供の困難さや課題を繰り返し学級の教師と話すことで，指導方針の柱は固まっていったような気がする。 ・流れ図で子供の実態や課題を整理することで，個別の指導計画につながったと感じる。	・流れ図を個別の指導計画に活かすために，もう少し時間がほしかった。 ・指導課題のキーワードを押さえることができたが，個別の指導計画は文章で記入するため，文章表現は難しかった。

９学級中５学級が，個別の指導計画の作成に活かすことができたという意見だった。流れ図を作成し，完成させることが大切なのではなく，流れ図を使って手順に沿って整理しながら考えることで，子供の指導課題を導き出しやすくなり，子供の実態を理解した上で自立活動や各教科等の目標を立てることができたと考えられる。今後は，個別の指導計画を作成するための時間を設定するとともに，指導課題につながるキーワードを挙げるのではなく，各学級の話し合いを通して，キーワードを文章にすることにも取り組んでいくことができるとよい。学級に配属されている教師の経験も踏まえ，どのくらいの検討時間が必要か，どこまでの子供の情報を学級全員で共通確認する必要があるのかについて検討していくことが大切である。

（イ）まとめ

アンケートから分かったことは，「流れ図」という一つの方法を使ったからといって，すぐに子供の指導課題を導き出すことは難しいことである。「流れ図」は，子供の実態や自分の思考を整理しながら子供の課題に迫る方法である。子供の抱える困難さについては，表面に見えている部分はごく一部分であり，見えていない大部分に理由や原因がある。私たち教師は困難さの理由や原因を探り，子供一人一人が本当に困っていることや，願っていることに対して働き掛けていくことが教育のポイントと考える。そのために，子供と関わる複数の教師の視点で，子供の実態を捉えて，子供の困難さの理由や原因を明らかにし，育てたい力を設定することが大切である。

また，「流れ図」を使って考えるときには，「流れ図」の項目で使っている言葉の意味を一つ一つ確認し，共通理解することが必要である。子供の情報を項目に当てはめて記述するだけでは，子供の困難さ

から指導課題を導き出す手順は理解できても，子供の困難さの理由や原因が明らかになったり，指導課題の優先順位が定まらなかったりする。学校は，様々な経験や知識をもつ教師が集まっている組織であるからこそ，いくつもの具体例を示し，手本となるような考え方を提示することを通して，教師自身が子供の新しい側面に気付いたり，発見したりできるようにしていくことが必要である。

（ウ）今後の課題

今後の課題は，以下の２点である

・「流れ図」は，子供の指導課題を導くための一つの方法であり，子供の実態を整理し，指導課題を導き出すために活用することを共通理解すること

・「流れ図」の項目内容について，言葉の意味や考え方を確認し，共通理解しながら整理すること

②子供の指導において効果的だったこと

自立活動は，個々の幼児児童の障害による学習上又は生活上の困難を改善するために行う指導である。各学級の指導事例を整理，分析すると，困難さにいくつかの共通する特徴があること，また，その特徴に対して共通する指導のポイントがあることが明らかとなった。各学級の指導事例の困難さ，困難さの背景とその実態，指導について効果的だったことを整理し（別紙資料 P55），困難さの特徴を分析すると以下のようになった。

（ア）幼稚部について

①相手からの関わりに気付かない子供への指導のポイント

ひよこ組のＡ児は，教師や友達などの相手からの関わりに気付かないという困難さがあった。一方で，Ａ児は教師に抱きかかえられてぐるぐる回してもらう遊びや，くすぐり遊びなど自分の好きな遊びをするときには，笑顔になり声を出して楽しい気持ちを表現したり，自分から教師に近付いて視線を合わせたりするなど教師を意識した行動が見られた。

そこで，まずは，身近な大人と一緒に好きな遊びをすることを通して，相手からの関わりに気付き，楽しい気持ちやうれしい気持ちを感じる経験を増やすことを目標に指導した。指導の場は，遊びの時間を中心に行った。

Ａ児への指導について効果的だったことは，まずは，Ａ児の好きなトランポリンやブランコの遊具を使った遊び，追い掛けっこやぐるぐる遊び，くすぐり遊びなどのＡ児が好きな遊びを本児が満足するまで十分に取り組んだことである。教師と一緒に遊ぶ中で，教師が自分の遊びたいことを受け入れてくれる存在であると気付き，自分から教師に期待して近付いたり，教師の手を引いて，自分のしてほしい遊びを自分の伝えられる方法で伝えようとしたりすることが増えてきた。また，Ａ児に関わるときは，Ａ児の正面から視線を合わせて名前を呼んだり，Ａ児の視線の高さに写真や具体物を提示したりしていた。併せて，遊んでいるＡ児の様子に合わせて，「楽しいね。」などの言葉掛けをした。教師が正面から視線を合わせたり，言葉掛けや身振りをすることで，一緒に遊んでいるときに，自分から教師に視線を向けたり，顔を覗き込んだりすることが増えてきた。

このことから，相手からの関わりに気付かないという困難さをもつ子供への指導のポイントは以下のようにまとめることができる。

- 子供の好きな遊びや好きなことに合わせて、十分に関わること
- 子供の正面から、言葉掛けをしたり、身振りで表現したりして関わること
- 子供の様子に合わせて、共感的な言葉を掛けること

②自分の思い通りにならないこと，やりたくなしことなどを促されると，泣いたり，物を投げたりする行動で表現する子供の指導ポイント

次に，ひよこ組のＡ児，りす組のＢ児，うさぎ組のＣ児は，自分の思い通りにならないこと，やりたくなしことなどを促されると，泣いたり，物を投げたりする行動で表現し，自分の本当に伝えたいことを実現できないという困難さがあった。具体的には，Ａ児は，明瞭な発語がなく，自分の気持ちに応えてもらえないときには感情が高ぶって泣いたり，嫌なことがあると相手をつねったり，押したりする行動が見られた。Ｂ児は，嫌な気持ちや悲しい気持ちになったときに，泣いたり，物を投げて感情を表現していた。Ｃ児は，苦手なことや嫌なことに対して，「ばいばいしー。」と言葉で言って相手からの関わりを拒んだり，思っていることと逆のことを言ったりしていた。Ａ児への指導については上記で述べたので，ここでは，Ｂ児とＣ児の指導の要点を述べる。

Ｂ児への指導では，Ｂ児の好きな絵本や遊具を介して，Ｂ児の好きな遊び方で教師が一緒に遊んだり，

教師と交互に言葉でのやり取り遊びや体を使った追い掛けっこなどに取り組んだ。教師が子供の好きな遊びを一緒に楽しむことを通して，教師に笑顔で視線を合わせ，声や指さし，身振りで「もう一回やってほしい」という気持ちを伝える行動が増えた。教師からの提案や促しに応じたくないときには，「ちがう。」，「いらない。」など言葉で答えることも増えてきた。

C児への指導では，まずは，安心して活動するために，C児にとって分かりやすい身振りや表情，擬態語を使用して活動内容を伝えたり，活動の前に手本となる動画を提示したりして，教師はC児が理解できるように関わった。そのことで，新しい活動が始まるときにも，自分から着席して教師の話を聞き，活動内容を理解して取り組むことが増えた。また，教師がC児に分かるように具体的にしてほしいことを伝えるようにしたことで，自分から靴を履くなど教師からの提案を受け入れることが増えた。さらに，教師がC児の好きな絵本やアニメの話題をもとに再現遊びを行うことで，C児から教師を遊びに誘うようになったり，そのやり取りの中で言葉を覚え，日常生活の中でも使用したりすることが増えた。

これらのことから，自分の思い通りにならないこと，やりたくなしことなどを促されると，泣いたり，物を投げたりする行動で表現することに困難さがある子供への指導ポイントは，以下のようにまとめることができる。

- 子供の好きな遊びを、子供の好きな遊び方で一緒に遊ぶこと
- 子供に分かるような言葉や身振り、表情で表現して子供が理解できる方法を使いながらやり取りをすること
- 教師が子供にとって一緒に遊ぶことが楽しいと思える存在になること

（イ）小学部について

①感覚に関する課題がある子供への指導のポイント

小学部１年生のD児は，常に動いていて，じっくりと活動に向かったり，休んだりすることができなず，身近な大人とのやり取りを通して，新しいことを学ぶことが難しいという困難さがあった。小学部５年生のG児は，一定時間注意を向けて課題に取り組むことが難しく，物や道具の用途を理解することが難しく，自分の力を発揮する場面が限られていた。D児，G児ともに，感覚に関する課題があることがあげられており，共通して，物をよく見ること，教師と一緒にまたは一人で物を操作することが目標に指導した。

D児への指導では，まずは，教師が正面から，視線を合わせて関わった。教師がD児の名前を呼び掛けたり，着替えの袋を目の前に提示したりすることで，教師からの働き掛けに気付き，教師に視線を向けたり，提示した袋を見せると自分から服を脱いだりするようになった。次に，回転や揺れなどの感覚に訴える遊具を使った遊びを十分に行ったことで，自己刺激行動が軽減し，教師の顔を見ながら腕を引いて「やりたい」という要求を伝えたり，揺れが止まると教師の腕を引いて「もっとやってほしい。」と何度も要求したりするようになるなど，様々なことを学びできることが増えてきた。

G児への指導では，まずは，教師と身体を介したやり取りを通して，G児が動かす身体部位や相手からの関わりに気付くように言葉掛けをしたり，直接触ったりするなどの働き掛けをした。手首・肩・腰などの力の入っている部分に教師が「だらん，だよ。」と言葉掛けをしながら触れることで自分から力を抜くことが増え，自分の体への関わりに気付き，その関わりを受け入れて動かそうとするようになった。そうした教師の働き掛けに応じる中で「自分でできた」という実感を味わい，物に向かう時間が長くなったり，物へ働き掛け続けたりすることができるようになり，分かることが増えた。

このことから，落ち着いて活動に向かうことが難しい，自己刺激が多い，物をよく見たり，操作したりするなど感覚に関する困難さがある子供への指導のポイントは，以下のようにまとめることができる。

・相手からの働き掛けに気付きやすいように正面から関わること
・教師と身体を介したやり取りをしながら、子供が自分の体に意識を向けて、体の力を抜いたり、入れたリして動かすこと
・子供の課題に応じた感覚に働き掛けるための教材を使用すること

②自分の思いや気持ちを相手に伝わる言葉で表現することが難しい子供への指導のポイント

小学部３年生のＥ児，小学部４年生のＦ児はともに，自分の思いや気持ちを相手に伝わる言葉で表現することが難しいという困難さがあった。

Ｅ児への指導では，まずは，本児が自信をもって活動に取り組むために，イラストや文字，動画等を活用して，教師とやり取りを行った。E 児が疑問に思ったことについて，ノートに書いたり，教材を作成して説明したりしたことで，理解できる言葉が増え，物事の理由が分かり，自分から行動することが増えた。また，事前に教師とやり取りしながら，自分がやることを決めたり，手順表を見たりすることで，一人で取り組むことが増えた。また，「おたすけまん」という係の名称や腕章など，やりたいけどやれないかもしれない，頑張りたいけど頑張れないかもしれないというＥ児の気持ちを支える教材を活用したことで，自信をもって意欲的に取り組むことができた。次に，教師が，E 児が，「～したくない」という気持ちを教師に伝えたときには，その気持ちを受け止めてから，理由を尋ねるようにしたり，やり取りしながら，Ｅ児自身が気持ちを整理する時間を作ったりした。教師が，別の活動の選択肢を提案することや，自分の思いを受け止めてもらえる安心感をもつことで，自分の気持ちや思いを言葉で伝えながら教師とやり取りすることが増えた。

Ｆ児への指導では，まずは，Ｆ児の好きな遊びの中からＦ児がやりたい遊び，使いたい道具を選んだり，教師が交渉しながら一緒に決めたりした。複数の乗り物の中から自分で選択し，教師に「赤い自転車乗る。」と言って伝えたり，課題の順番や，やりたい課題の量を教師と交渉しながら決めたりして，落ち着いて取り組むことが増え，拒否ではなく，他の提案を受け入れる力が身に付いてきた。次に，文字やイラストを用いてＦ児の気持ちや状況を整理したり，ルールなどを理解できるようにしたりした。まずは F 児の気持ちを受け止めてから，教師がノートにイラストや文字で，スケジュールを書きながら，授業の内容や，どの場面でＦ児のやりたいことができるかを説明した。何度も教師と書いて話してとやり取りする中で，今の状況を理解しようとすることが増えたり，ルールを理解しながら取り組んだりすることができた。

このことから，自分の思いや気持ちを相手に伝わる言葉で表現することが難しいことに困難さがある子供への指導のポイントは，以下のようにまとめることができる。

・子供の気持ちや思いを教師が否定や拒否することなく受け止めること
・子供の実態に応じて、文字やイラスト、動画等を活用し、教師とのやり取りを通して、子供自身が自分のすることや物事の理由、ルールを分かって取り組むことができるようにすること

③活動や相手に合わせて自分の言動を調整することが難しい子供への指導のポイント

小学部６年生のH児は，活動や相手に合わせて自分の言動を調整するという困難さがあった。H児への指導では，まずは，教師が，状況やH児の働き掛け，それを受けた相手の気持ちを，順を追って文字や絵で表し，整理して一緒に確認したり，H児の気持ちが高揚したときには，静かな場所へ移動してから話をするようにしたりした。教師は，まずはH児の気持ちや行動を受け止めながら，ノートに状況やH児の気持ち，相手の気持ち，どんな関わり方をすればよかったのかなど書き，教師と一緒に考えたり，確認したりしたことで，落ち着いて教師の話を聞き，日常の中で，友達との言葉でのやり取りが増えた。

また，「〇〇さんも一緒にやろう」などと教師や友達を言葉で活動に誘いかけることもあった。次に，やり取りの成功体験を積み重ねた。H児が相手を困らせるような関わりをしたときには，相手にとって望ましい言葉に言い直して，「できた。」で終わるようにしたり，自分から望ましい関わりができたきには称賛したりするようにした。そのことで，同じような場面があったときに，相手を気遣う言葉や行動が見られるようになってきた。

このことから，活動や相手に合わせて自分の言動を調整することに困難さがある子供への指導のポイントは，以下のようにまとめることができる。

・教師が子供の気持ちや行動を受け止めること
・教師とのやり取りを通して、子供に自分自身の気持ち、相手の気持ち、今の状況、どう関わればよかったのかなどについて考えさせること
・教師と一緒に望ましい言動を確認し、「できた」という成功体験で関わりを終えること

（ウ）まとめ

自立活動は，個々の幼児児童の障害による学習上又は生活上の困難を改善するために行う指導であるため，同じような指導方法にように思えても，どんな教材使うか，どんな言葉を使うか，どのタイミングで何を提示するのかなど子供によって異なる。その上で，各学級の実践事例を基にしながら，様々な困難さをもった幼児児童への効果的だった指導のポイントについて整理すると，教師が子供との関わるときは，まずは，子供の気持ちを拒否したり否定したりすることなくそのまま受け止めることが大切であった。学校生活の中において，学級の子供の状況，活動の場面などにより，子供の気持ちを十分に受け入れることが難しいことが多くある。だからこそ，まずは，教師が子供の抱いている思いに共感し，言葉を掛けることが重要な関わりである。また，コミュニケーション面に課題がある自閉症を併せもつ子供たちだからこそ，自分の気持ちを分かってくれる大好きな相手と，自分の好きな遊びを一緒しながらやり取りすることで，自分以外の相手に気付き，自分のやりたいことややりたくないことなどの思いを表情や動き，声や言葉で表現し，言葉や物事の成り立ち，相手の気持ちなどを学んでいくことが分かった。さらに，文字やイラスト，動画等を活用しながら，教師とやり取りすることを通して，子供自身が自分のすることや物事の理由，ルールを分かって取り組んだり，相手の気持ちや今の状況，どう関わればよかったのかなどについて考えたりすることが大切であった。

（エ）今後の課題

今後の課題は，以下の２点である

・子供の指導課題から目標設定して行った授業づくりについて，指導内容や指導方法，評価の観点等について複数の視点で検討しながら授業改善を行うこと
・授業改善を行うことを通して，子供の変容について整理し，子供の困難さに応じて効果的な指導方法等を明らかにしてまとめること

２　各学級の授業づくりについて

（１）各学級の研究テーマについて

各学級で幼児児童一人一人の指導課題を導き出した上で，今年度子供にどんな力を育てたいか，何を大切にした指導を行いたいかなどを検討して研究のテーマや対象授業を決めた。各学級の研究テーマを表９に示す。

11 月，12 月の３回の研究日では，幼稚部，小学部１，２，３年生の低学年，小学部４，５，６年生の高学年の３グループに分かれて授業研究会を行った。この授業研究会も Web 会議システムの ZOOM を活用して行った。事前に授業の指導案を配布し，録画した対象授業の動画を視聴することとした。その上で，研究テーマである育てたい力を基にした協議を行った。授業者が研究テーマである育てたい力を設定した理由や，授業づくりの経過，本時の授業について説明し，子供の評価を基に，参加した教師全員で，教師の関わり方や環境設定，教材・教具の工夫などについて協議をし，子供の変容に有効であったことや次の授業に向けて見直すことなどを整理した。

表９　各学級の研究テーマ

学部	学　級	研究テーマ	指導の場
幼稚部	ひよこ組	様々な活動を通して，教師と一緒に遊ぶことが楽しいと感じて関わる力	おべんきょうタイム
	りす組	教師や友達と遊ぶ楽しさを感じ，自ら関わったり，いろいろな活動に取り組んだりする力	設定遊び
	うさぎ組	様々な物に触れたり，経験したりする中で，興味・関心を広げ，主体的に学びに向かう力	設定遊び
小学部	１年生	教師の働き掛けに気付き，応じて，やり取りする力	国語・算数・自活
	２年生	健康や安全のために必要な生活動作や習慣を身に付け，自分から取り組む力	日常生活の指導
	３年生	自分の気持ちを伝えたり，相手の働き掛けに応じたりする力～支え合い，学び合える仲間を目指して～	いきいきタイム 日常生活の指導
	４年生	教師や友達と一緒に活動しながら「楽しい」などの気持ちを共有し，自分の気持ちを言葉や身振りなどで表現する力	いきいきタイム
	５年生	感覚を適切に受け止めたり，体の動きを自分で調整したりスムーズに動かしたりする力	自立活動
	６年生	友達と一緒に活動したり，友達と関わったりして学ぶ力	いきいきタイム

（２）各学級の授業づくりの実際について

実際の各学級の授業づくりについて，幼稚部りす組，小学部３年生，小学部６年生の実践を報告する。

幼稚部りす組
「教師や友達と遊ぶ楽しさを感じ，自ら関わったり，いろいろな活動に取り組んだりする力」を育む素材遊びの授業づくりについて

幼稚部りす組　教諭　吉元まお里　若林季　髙山真美

Ⅰ　授業づくりのテーマ設定の理由

本学級は，４歳と５歳の幼児５名で構成される年中学級であり，在籍する幼児は学校生活２年目となる。昨年度，年少児として１年間を幼稚部で過ごしたことで，幼稚部での生活にある程度見通しをもち，落ち着いて過ごせるようになってきている。新年度になり，教師や友達の入れ替わりがあったが，既に知っている教師や友達と一緒に遊ぶことを通して，新しい友達と同じ遊具で遊んだり，新しい教師に身振り等で「～したい」や「～が欲しい」などの思いを伝えたりするようになってきた。しかし，「～して遊ぼう」と教師を誘ったり，友達と追い掛けっこ等のやり取りをして遊んだりすることは少ない。運動遊びや素材遊びなどの設定遊びでは，トランポリンを繰り返し跳んだり，筆や手に絵の具を付けて画用紙に塗ったりするなど，興味をもった遊具や素材で繰り返し遊ぶようになってきた。しかし，興味のない遊具や素材は，教師が目の前で遊ぶ様子を見せても，遊ばないことがある。

そこで，教師や友達と一緒に遊んで「楽しい」と感じる経験を重ねて，「やってみよう」という思いをもち，教師や友達と同じ場所や物，遊び方で遊んだり，様々な遊具や器具，素材に興味をもって自ら関わって遊んだりするようになってほしいと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　「小麦粉絵の具で遊ぼう」と「綿で遊ぼう」の授業について

１　幼児の実態

幼児らは，指絵の具や寒天など，これまでに遊んだ経験のある素材を使った遊びでは，筆で色を塗ったり，粘土カッターで切ったりするなどして，繰り返し遊ぶようになってきた。また，以前は，手や道具に素材が少し付いただけで泣いていた幼児が，素材が手に付いても平気になったり，自分から触ったりして遊ぶようになってきた。しかし，ホイップ絵の具等の遊んだ経験のない素材は，教師が遊ぶ様子を見せて遊びに誘っても興味をもてずに遊べなかったり，手だけではなくローラー等の自分が持っている道具に素材が付いただけで泣いてしまったりする幼児もいる。

２　題材設定の理由

そこで，小麦粉絵の具と綿を使った遊びを設定した。まず，小麦粉絵の具は，見た目は一般の絵の具と同じように見えるが，画用紙に塗ると色付きが薄く，どろどろ，にゅるにゅるとした感触である。幼児らが遊んだ経験のない新しい素材ではあるが，これまでの遊びと同じように，筆やローラーで塗ったり，手に塗って手形を押したりして遊ぶことができる。これまでの遊び方で遊びながら，見た目や感触などの違いに気付き，新しく触れる素材に興味をもって遊ぶことができると考えた。次に，綿は，昨年度，絵の具を溶いた色水に浸して遊んだことのある素材である。しかし，綿のみに触れて遊んだ経験はない。綿は，触れても手が汚れない素材である。また，綿に触れてふわふわの感触を楽しむだけでなく，綿を集めて埋もれる，綿が上から落ちてくる様子を見る，綿を袋の中に入れる，綿に色水を掛けて染めるなど，綿を使って様々な遊びへと展開できる。幼児らは，その中から好きな遊び方を見付けて，遊びに興味をもって自ら素材に関わり繰り返し遊ぶことができると考えた。

3　指導計画

題材名	ねらい	指導内容	教材・教具	時間
小麦粉絵の具で遊ぼう	・小麦粉絵の具に興味をもち，筆や手で色を塗る。 ・教師や友達が遊ぶ様子を見て，同じように筆を動かして描いたり，ボトルから小麦粉絵の具を絞り出したりして遊ぶ。	・小麦粉絵の具に興味をもつ。 ・小麦粉絵の具を画用紙に塗る。 ・小麦粉絵の具に触れる。 ・ボトルから小麦粉絵の具が出てくる様子を見る。 ・ボトルから小麦粉絵の具を絞り出す。 ・容器の中で小麦粉絵の具が移動する様子を見る。	机 椅子 小麦粉絵の具 画用紙 筆 皿 ボトル 透明容器 雑巾 スモック	5
綿で遊ぼう	・綿に触れたり，ひげや雪などに見立てたりして遊ぶ。 ・教師や友達と一緒に，綿が上から落ちる様子を見て楽しんだり，綿に色水を掛けて色を付けたりして遊ぶ。	・綿に興味をもち，触る。 ・綿を集めたり，綿に埋もれたりする。 ・綿を袋に入れたり，出したりして遊ぶ。 ・頭上から落ちてくる綿を見る。 ・綿をサンタクロースのひげに見立てて遊ぶ。 ・綿に色水を掛けて遊ぶ。	綿 マット 傘 サンタクロースの顔パネル 箱そり ビニール袋 醤油さし 机 椅子 スモック	4

Ⅲ　授業づくりの経過

1　「小麦粉絵の具で遊ぼう」の経過

1時間目	幼児の様子	・小麦粉絵の具，筆を見せると，興味をもって筆に絵の具を付けて画用紙に描いたり，手で小麦粉絵の具に触れたりして遊んだ。 ・教師がローラーを見せると興味を示して受け取ったが，教師がローラーに小麦粉絵の具を付けると嫌がり，ローラーを画用紙にこすり付けて小麦粉絵の具を拭おうとしたり，泣いたりする幼児がいた。 写真１
	次時に向けて	・小麦粉絵の具が手に付くことが苦手な幼児が興味をもって遊べるように，ボトルに絵の具を入れた物を用意して，押し出して見せる。 ・小麦粉絵の具に興味をもてず泣いてしまった幼児は，集団の設定遊びの前に教師と一対一で小麦粉絵の具で遊ぶ時間を設定する。
2時間目	幼児の様子	・教師がボトルから小麦粉絵の具を絞り出す様子を見たり，小麦粉絵の具を手で受け止めたりして遊んだ。自分でボトルから絞り出そうとする幼児もいたが，硬くて小麦粉絵の具が出てこなかった。 ・前回，遊びに参加できなかった幼児は，教師が「行くよ！３，２，１，ぴゅー！」等と掛け声を掛けてボトルから小麦粉絵の具を勢いよく出して見せると，笑顔で見ていた。ボトルを指さしたり，ボトルを持って教師に手渡したりして，「もう１回」と伝えて，繰り返し教師に小麦粉絵の具を出してもらって楽しんだ。
	次時に向けて	・教師がボトルから小麦粉絵の具を絞り出すことを期待して楽しめるように，掛け声を掛けてから小麦粉絵の具を絞り出して見せるようにする。 ・「やってみよう」という思いをもって，自分でボトルを持ち小麦粉絵の具を出して遊べるように，小麦粉絵の具の硬さを柔らかくして出しやすくする。 ・容器に水を入れた物を用意し，水の中に小麦粉絵の具を絞り出して遊べるようにする。

３～５ 時間目	幼児の 様子	・小麦粉絵の具を柔らかくすると，自分でボトルを押して小麦粉絵の具を絞り出して遊ぶようになった。 ・前時までは，教師がボトルから小麦粉絵の具を出す様子を見て楽しんでいた幼児が，ボトルを自分で持ち，小麦粉絵の具を出して遊んだ。 写真２
	次の題材 に向けて	・容器から素材を出す，「わー！」や「それー！」の掛け声を掛けながら遊ぶなど，幼児が好きな遊び方や関わり方で遊びに誘う。 ・集団での素材遊びで，絵の具等苦手な素材を扱う場合は，集団での遊びを実施する前に教師と一対一で素材に触れて遊ぶ時間を設定する。

２　「綿で遊ぼう」の経過

１時間	幼児の 様子	・綿に興味をもち，綿を集めたり，綿を丸めて投げたりして遊ぶ幼児もいたが，綿に興味をもてず，教師が綿を見せて遊びに誘っても綿に触れようとしなかったり，教室から出て行こうとしたりする幼児がいた。 ・サンタクロースの顔のパネルに，ひげに見立てた綿を貼る活動は，多くの幼児が興味をもたず，取り組んだ幼児は一人だった。 写真３
	次時に 向けて	・幼児らが，綿に触れたり埋もれたりして遊べるように，箱そりを用意し，箱そりの中に綿を敷き詰める。 ・綿に興味をもてるように，おもちゃ等のない環境を設定する。 ・綿に興味をもてなかった幼児は，集団での遊びを設定する前に，教師と一対一の遊びを設定し，事前に綿で遊ぶ経験をする。 ・綿に色水を掛けて色を付ける遊びを設定する。何をするのか，どのようにするのかが分かり，「やってみよう」という思いをもって取り組めるように，教師の手本動画を見る時間を設定する。
２～４ 時間目	幼児の 様子	・袋の中の綿を出したり，箱そりの中に綿を入れて，自分も中に入り，綿に触れながら教師に箱そりを引っ張ってもらったりするなどして，幼児全員が綿に触れて遊んだ。 ・綿に色水を掛ける遊びは，教師の手本動画をよく見ていた。動画が終わり，教師が綿と色水の入った醤油さしを出して見せると，数名の幼児は興味をもち，繰り返し綿に色水を掛けて遊んだ。取り組まない幼児もいたが，友達や教師が色水を掛けているところに近付いて椅子に座り，その様子を笑顔で見ていた。 写真４
	次の題材 に向けて	・幼児が苦手ではないと思われる素材でも，初めての素材を扱って遊ぶ前には，教師と幼児が一対一でじっくりと遊ぶ時間を設定するようにする。 ・素材に興味をもち，幼児らが他の場面で楽しんでいる遊び方で遊べるように，教材を用意したり，環境を整えたりする。

Ⅳ　幼児の変容の結果

＜幼児の変容＞	＜効果的だったこと＞ 目標設定，指導内容・方法，教師の関わり方，教材教具，など
・小麦粉絵の具や綿などの素材に興味をもって，教師や友達が遊ぶ様子を見るようになった。	目標設定　指導内容・方法 ・最初は素材に触れて遊ぶのではなく，素材が容器から出てくる様子を見たり，上から降ってくる様子を見たりして，幼児らが好きな遊び方で遊べるようにしたこと。

・指さしや身振り，言葉などで，「もっと～してほしい」という思いを繰り返し教師に伝えて遊びを楽しむようになった。	教師の関わり方 ・教師からの関わりを期待して見ることができるように，「３，２，１！」や「せーの！」，「それー！」などの掛け声を掛けながら，素材を容器から出したり，頭上から降らせたりして，幼児らが好きな関わり方で誘い掛けたこと。
・遊び方が分かると，「やってみよう」という思いをもって，自分で物を操作して遊ぼうとするようになった。	指導内容・方法　教材教具 ・身近な教師と一緒に素材とじっくりと向き合うことができるように，教師と一対一で遊ぶ場面を設定し，教師が楽しそうに遊ぶ様子を見せるようにしたこと。 ・遊び方が分かるように，教師の手本動画を見る時間を設定したこと。

Ⅴ　まとめ（子供の力を育てるための授業づくりのポイント）

１　子供が好きな遊び方や関わり方で教師が遊びに誘うこと

これまでの素材遊びでも，ホイップ絵の具を絞り器から絞り出して見せたり，細かく破いた新聞紙を頭上から降らせたりするなど，様々な素材を容器から出したり，頭上から降らせたりして遊んできた。幼児らは，その遊びに興味をもって，教師が繰り返し容器から出したり，頭上から降らせたりする様子を笑顔で見て楽しんでいた。また，他の遊びの場面で，教師が「まて，まて！」と言って幼児を追い掛けると，追い掛けられることを期待して教師と視線を合わせたり，幼児が教師に近付き，教師が大きな動きや声，表情で「うわー！」と言うと，幼児が逃げていくやり取りを楽しんだりしてきた。素材に触れて遊ぶことが苦手な幼児には，素材を容器から出したり，頭上から降らせたりするなどの好きな遊び方で誘ったり，大きな声や動き，表情などで「うわー！」等，幼児が好む言葉掛けをしながら関わったりすることが大切であると考える。

２　他の場面と共通の掛け声や教材を使用すること

小麦粉絵の具や綿を使った遊びでは，「３，２，１！」や「せーの，それ！」などの掛け声を掛けてから小麦粉絵の具をボトルから絞り出したり，綿を子供たちの頭上に降らせたりして見せた。幼児らは，素材が出てきたり落ちてきたりする様子を期待して見て，「もっと～してほしい」という思いを，身振りや発声などで繰り返し教師に伝えて遊んでいた。この掛け声は，他の場面でも，教師の存在に気付き注目してほしいときに使用している。また，綿を使った遊びでは，他の遊びで使用していた箱そりに綿を敷き詰めて遊ぶようにしたことで，子供たち自ら箱そりに乗って，そり遊びを楽しみながら綿に触れて遊んでいた。他の場面で使用している掛け声や教材を共通して使用することで，興味のない遊びでも，「楽しそう」，「やってみよう」などの思いをもつことができると考える。

３　新しい遊びに取り組むときは，教師と幼児が一対一で遊び，じっくり素材に関わる時間を設定すること，また，教師の手本動画を見る時間を設定し，やることややり方が分かるようにすること

集団の遊びを設定する前に，教師と一対一で遊ぶ時間を設定したことで，他の遊びやおもちゃに気持ちが向かうことなく，新しい素材に気付き，向き合って遊ぼうとしていた。加えて，教師の手本動画をよく見て，「やってみよう」という思いをもって同じように遊んだり，取り組もうとしたりしていた。これらのことから，子供たちになじみのない素材で遊んだり，新しい遊び方の遊びを設定したりするときは，その遊びに興味をもつことができるように，集団で遊ぶ前に教師と一対一で遊ぶ時間を設定したり，教師の手本動画を見たりすることが大切だと考える。

小学部３年
「自分の気持ちを伝えたり，相手の働き掛けに応じたりする力
～支え合い，学び合える仲間を目指して」を育む生活単元学習の授業づくりについて

小学部３年　教諭　髙井彩子　五反田明日見　上野哲弥

Ⅰ　授業づくりのテーマ設定の理由

本学級では，身近な教師が児童と一緒に楽しく遊ぶことや，児童の思いを受け止め，共感することを通して，児童との信頼関係を築くことを大切にしてきた。児童たちは，自分のやりたいことや欲しい物を身振りや言葉で教師に伝えたり，教師の働き掛けを受け入れて行動したりすることが少しずつ増えてきた。しかし，自信がないことや，見通しがもてないこと，理解できないことに対しては，「いやなの。」等と言ったり，泣いたり，怒ったりして拒否することがある。また，友達に対して自分の気持ちを相手に伝わるような身振りや言葉で表現したり，友達からの働き掛けを受け入れて行動したりすることはまだ難しく，友達同士でやり取りする場面は少ない。

研究テーマを設定するに当たって，児童たちが本校を卒業するときに，どのような姿になってほしいかを考えた。私たちは，身近な教師とのやり取りを通して，様々なことに挑戦するようになってきた児童が，６年生になったときには，「〇〇君と一緒にやりたいから，誘ってみよう」，「〇〇ちゃんのやり方をまねしてやってみよう」，「みんなと一緒だったら頑張れる」など，友達と関わり，支え合いながら，自信をもって様々な物事に取り組み，新たなことを学んでいってほしいと考えた。

そこで，研究テーマを「自分の気持ちを伝えたり，相手の働き掛けに応じたりする力を育む授業づくり」とし，いきいきタイム（生活単元学習）の「お話遊び」の授業研究に取り組むこととした。

Ⅱ　授業について

１　児童の実態

本学級には，男子４名，女子２名の児童が在籍している。児童たちは，追い掛けっこをすることや，絵を描くこと，水や砂，スライムなどといった形が変化する素材を使って遊ぶこと，絵本を読むこと，キーボードを弾くことなど，一人一人に好きな遊びがある。教師と一緒に遊んだり，一人で遊んだりすることが多いが，教師を介して，友達と物や道具の貸し借りをしたり，友達と同じようなやり方で遊んだりするなど，友達と物や場を共有するようになってきた。

また，「～ちょうだい。」や「いらない。」，「〇〇先生，～しないで。」などの言葉や，手を合わせること，物を指差すこと，教師の手を引くことなど，身振りや動作を使って自分の思いを表現できる。

様々な実態の児童たちではあるが，絵本の読み聞かせは，どの児童も好きな活動の一つである。昨年度実施した教師自作の絵本を使った「お話遊び」の授業を通して，教師の言葉をまねて，「ねぇねぇねぇ。」と呼び掛けたり，教師の語り掛けた言葉や話の展開に合わせて教材・教具を動かしたりするなど，教師とのやり取りを楽しむとともに，話の内容を理解し，次の展開を期待する力が育ってきた。

２　単元設定の理由

本単元では，「さつまのおいも」（文：中川ひろたか，絵：村上康成，童心社）という絵本を用いることとした。この絵本は，さつま芋が擬人化して表現されており，御飯を食べることや，歯を磨くこと，運動することなど，児童にとってなじみのある生活場面が取り上げられている。また，さつま芋のつるを引っ張って収穫することや，たき火をして焼き芋を作ることという児童が体験したことのあ

る場面が子供たちの絵とともに楽しそうに描かれている。

以上のことから，児童は，この絵本の内容に親しみや興味をもつことができると考えた。また，絵本の展開に合わせて，教師や友達と一緒に声を出したり，友達と力を合わせてつるに見立てたひもを引っ張ったりするなど，絵本の場面を再現する活動に取り組むことを通して，友達や教師との関わりを楽しんだり，友達に自分がやってみたいことを伝えたり，「もっとやってみたい」，「友達のように表現したい」といった意欲を育むことができると考える。

さらに，一人ではできないことでも，友達と一緒であれば達成できたという経験を楽しみながら積み重ねることを通して，児童は，友達と一緒に取り組むことの心地よさや喜びを感じるとともに，集団としての一体感を味わうことができると考え，本単元を設定した。

３　指導計画

次	ねらい	指導内容	教材・教具	時間
一	・絵本の内容や展開を理解する。 ・自分もやってみたい，まねしたいという気持ちをもつ。	・絵本の読み聞かせや，絵本の展開に合わせて教師が演じる様子を見聞きする。	絵本 めくり台 さつま芋の服 さつま芋の模型 帽子 つる（綱） 御飯，風呂，歯ブラシ，トイレの模型 タオル 拍子木 パフパフラッパ	2
二	・教師の言葉や動きをまねしたり，絵本の内容を再現したりすることを楽しむ。 ・教師や友達に働き掛けたり，働き掛けに応じたり，自分で考えた動きを表現したりするなど，教師や友達と関わり合いながら活動に取り組む。 ・絵本を介して，友達と関わり合い，一緒に物事に取り組む経験をする。	・絵本や教師の動きに視線を向け，掛け声を掛けたり，内容に合わせた動作をしたりする。 ・話の内容に応じて，自分の思いを教師や友達に身振りや言葉で伝える。 ・教師や友達からの働き掛けに応じて，動きを見たり，合わせたりする。 ・友達と一緒に掛け声を掛けたり，つるを引っ張ったりする。		4

Ⅲ　授業づくりの経過

以下，授業づくりの経過として，教師と児童，児童同士の関わりや，児童の自発的な表現がどのような指導を通して，どのように変容してきたかを述べる。

１　教師と一部の児童とのやり取りが中心で，児童の自発的な表現が少ない（１～２時間目）

絵本の内容や物の名称，動作を表す言葉を教えるために，さつま芋の模型等，具体物を用いて絵本の読み聞かせを行った（写真①）。児童の中には，絵本の展開を知っており，自ら絵本をめくったり，模型を準備したりと意欲的に取り組む者がいた一方で，活動の意味を理解することが難しく，その場を立ち去ろうとする児童もいた。以下のエピソードは，「さつま芋を引き抜く場面」の児童の様子である。

写真①

さつま芋を引き抜く場面では，Ａ児とＢ児がつるを持ち，引っ張った。うまく抜くことができないと，Ａ児が「みんな，手伝って。」，「みんな，抜けて。（抜いて）」と大きな声を発した。その様子をＥ児とＦ児は見ているが，自ら立ち上がったり，つるを持ったりすることはなかった。また、Ｃ児は落ち着かない様子で立ち歩いたり，Ｄ児は「トイレ。」と言って教室から出ようとしたりしていた。

児童たちは教師が演じる様子を見てはいるが，まねして動いたり，せりふを言ったりすることが少なかった。また，動きに合わせて御飯や風呂などの模型を使用したが，その都度，模型を替える必要があり，活動が中断してしまうため，模型の数を精選することとした。また，児童全員が，絵本に出てくる

言葉や動きの面白さに気付いて，話したり，動いたりできるように，「おいものくらし」（作詞・作曲：中川ひろたか，編曲：大友剛）（以下，既成の音楽）を使用して展開することにした。

２　既成の音楽を使用したことで見えてきた、児童たちの反応の違い（３時間目）

既成の音楽をピアノで弾き語りしたことで，教師の話を聞く場面と，動く場面の違いが分かりやすくなった。特に，さつまいもがトレーニングをする場面では，Ｂ児とＥ児が腕立て伏せのまねをしたり，Ｆ児がさつま芋役の教師と一緒に走ったりと，児童が自ら表現することが増えた（写真②）。しかし，既成の音楽を嫌がる児童もいた。次のエピソードは，授業中のＡ児の様子と，授業終了後のＡ児と筆者との会話である。

写真②

教師が既成の音楽を歌い始めると，Ａ児は，退室しようとしたり，教師におぶさったり，ひざの上に乗ったりして，一人で活動に取り組むことが難しくなった（写真③）。授業終了後，筆者がＡ児に「歌，嫌いだった？それとも，ピアノが嫌？」と尋ねると，「歌，嫌い。ピアノ，好き。」と答えた。筆者が「分かった。じゃあ次は歌，やめようね。」と伝えると，小さな声で「やめようね。」と繰り返し言い，ほっとした表情になった。

既成の音楽を使用したことで，複数の児童は自発的に動いたり，教師のまねをしたりすることができた。しかし、既成の音楽が苦手な児童がいることが分かったため、その音楽は使用しないこととした。

また，指導目標や指導内容について検討した。「さつまのおいも」という絵本の世界観を味わい，楽しむこと，その上で，自分の気持ちを身振りや言葉で表現したり，相手の働き掛けを受け入れたりすることが目標であることを再度確認し，展開や教材を見直していくこととした。

写真③

３　児童たちの表現の広がり（４～５時間目）

前時の指導の反省を踏まえ，本時から拡大絵本やさつま芋を模した児童用の帽子，落ち葉を模したフェルト生地などの教材を追加した。また，既成の音楽は使用せず，Ａ児も好みそうな拍子木やパフパフラッパを，さつま芋の動きや場面が変わるときに鳴らすことにした。さらに，スムーズに展開できるように，絵本を読み進める教師と，さつま芋役を演じる教師とで役割を分けることにした。すると，以下のエピソードのような姿が見られるようになった。

さつま芋がトレーニングをする場面で，Ｂ児とＥ児は教師の伸脚や腕立て伏せをまね，Ｃ児は教師の周囲を歩きながら動きを見ていた。また，Ｄ児は，笑顔で立ち上がり教師に近付いた。

さつま芋が泳ぐ場面では，これまで椅子に座って静かに眺めていることが多かったＦ児が「水遊び。」と話す。次に，さつま芋を引き抜く場面では，これまでは教師に促されてつるを持っていたＣ児とＤ児が，自分で綱を持ち，「ずっぽ～ん。」と抜けた後，にっこりと笑顔になった。

おならを出し合う場面では，Ｂ児が「そしたら…。」と言うと，Ａ児が「えっ！」と言って、次の展開につながるような表現をしていた。

児童が自ら動きだしたり，教師の動きや言葉をまねたり，展開に合わせてせりふを言ったりするなど，一人一人の表現が多様になってきた。また，教師の役割分担によって展開がスムーズになってきたため，１，２時間目で使用していた模型を再度使うことにした。

４　児童たちの表現がさらに広がり，児童同士での関わりが増える（６時間目）

御飯を食べる場面では，児童たちが好むふりかけの模型を使用すると，Ｂ児，Ｃ児，Ｄ児，Ｆ児が一斉に集まり，ふりかけを掛けるＤ児の動きに注目した。歯磨きの場面では，歯ブラシの模型を動かし自分や教師の歯を磨くまねをしていたＢ児が，Ｄ児の歯を磨き始めた。Ｄ児はそれを受け入れ，その様子を見ていたＦ児が，同じように歯を磨き始めた。

写真④

また，さつま芋を引き抜く場面で，複数の児童が集まってきてつるを持ったり，「ずっぽ～ん」と抜けるタイミングに合わせて，Ｅ児が拡大絵本をめくったりすることもあった。

Ｃ児は，相手の動きに合わせたり，まねたりすることが難しい児童である。以下は，Ｃ児が友達の動きを見て，初めて同じ動きで絵本の一場面を表現したエピソードである。（写真④）

Ｂ児が前方に出てきて、腕立て伏せのまねを始めた。Ｃ児がＢ児に視線を向けたとき、Ｃ児の正面にいた教師が「Ｂ児ちゃん、すごい。」と指差しながら伝えると，Ｃ児は，Ｂ児の隣に行き，Ｂ児の姿勢をまねるように四つばい姿勢になり，体を上下に動かして，Ｂ児の顔をのぞきこんだ。

このように，児童同士がやり取りしたり，互いをまねしたりするようになり，教師が想定していなかったような多様な表現が生まれた。

Ⅳ　児童の変容の結果

＜児童の変容＞	＜効果的だったこと＞ 目標設定，指導内容・方法，教師の関わり方，教材教具，など
・教師や友達に注目するようになった。	教師の関わり方　教材教具 ・具体物を使ったり，擬態語で語り掛けたりして，見せ方，聞かせ方を工夫して，話の内容を理解できるようにしたこと。
・自ら動いたり，話したりすることが増えた。	教師の関わり方　教材教具 ・児童の表現を見逃さず，認め，せりふや動きを取り入れて授業を展開したこと。絵本の世界観を味わえるような，教材を作成・使用したこと。
・教師や友達のまねをすることが増えた。	指導内容・方法 ・「〇〇くんが～やっているよ。」と言って，他の児童の注目を集めたり，友達の動きを見る時間を確保したりしたこと。
・教材を使って友達に働き掛けた友達からの働き掛けを受け入れるようになった。	教師の関わり方 ・具体物を使って見せたり，児童一人一人に働き掛けたりしたこと。また，児童からの働き掛けを教師自身が受け入れたこと。さらに，他の児童にも働き掛けるよう促したこと。

Ⅴ　まとめ（子供の力を育てるための授業づくりのポイント）

１　お話遊びそのものを十分に理解し，楽しむこと

まずは，児童が絵本の内容を理解して，「やってみたい」と思える授業となるように，展開や教材を工夫した。児童それぞれの楽しみ方や好きな場面を，表情や動き，言葉から考え，受け止め，３年生オリジナルの展開を作り上げた。児童は表現が受け止められたことで，さらに表現することが増えた。

２　反復しながら発展させていくこと

毎回の授業で児童の反応を確認し，絵本の世界観を大切にしながら、少しずつ発展させるようにした。その中で，単元の始めでは，話の内容や授業の展開が分からず，離席，退室していた児童が，自ら具体物を使って動いたり，促しを受けて話したりして，授業に取り組むことができるようになった。

３　やり取りする場面を教師が限定しないこと

単元の始めでは、さつま芋を引っ張る場面をやり取りの場面として考えていたが，それ以外でも，関わり合う姿が多く見られた。教師がやり取りの場面を限定せず，児童の表現を受け止め，他の児童にも伝えたことで，児童同士のやり取りが生まれ，学び合う姿につながったのではないかと考える。

小学部６年
「友達と一緒に活動したり，友達と関わったりして学ぶ力」を育む
生活単元学習の授業づくりについて

小学部６年　教諭　山地康代　久野智宏　中島篤

Ⅰ　授業づくりのテーマ設定の理由

小学部６年生５人の集団である。多くの児童が６年間，同じ教室で一緒に学校生活を送ってきた。友達の名前を知り，「６年生。」と呼び掛けられると返事をする等，学級への所属意識はあるが，友達と場や活動を共有して活動することが難しい児童や，友達の名前を呼び掛けたり，児童同士が関わって学んだり遊んだりすることが少なく，教師と関わって過ごす児童が多い。だが，友達の様子を見たり，教師を介して友達と関わったりする様子も見られるため，教師との関わりを基盤に，友達と一緒に活動したり，友達と関わったりして学ぶ力を育むことで，友達と関わることの楽しさを味わい，自分から友達に関わり，友達とやり取りしながら生活してほしいと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　生活単元学習（いきいきタイム）の授業について

１　児童の実態

生活単元学習（以下，いきいきタイム）では，お話遊びや水遊び，畑で野菜を育てる活動などをしてきた。活動内容に興味をもち，教師や友達と一緒に学習する児童が多いが，活動内容の見通しをもてない不安からか学習に参加できない児童がいる。友達の様子を見てその動きをまねたり，自分の役割をもち，理解して取り組んだりする児童はいるが，教師の介在を必要とすることが多く，友達と一緒に一つのことに取り組んでいるという実感をもっている児童は少ないと考える。

２　単元設定にあたって

年間を通し，進路や成長，行事などに関する生活全般の単元，校外学習や修学旅行の単元，遊びの単元を計画し，取り組んでいる。単元を設定するにあたっては，児童の興味・関心のあることや生活のまとまりを考慮し，体を動かしたり，物を操作したりする学習をしながら，友達や教師と関わり合える場面を設定したいと考えている。また，これまでの経験をもとに，新しいことを学ぶ機会としても捉えている。

３　指導計画（年間指導計画より抜粋）

単元名及び指導期間	テーマに関する単元のねらい	テーマに関する学習内容
夏祭りをしよう 全８時間	・遊び場を自分たちで作ったり，友達と一緒に遊んだりする。	・遊び場で使用する物や看板などを作る。 ・店員とお客さんの役割に分かれて，遊ぶ。
修学旅行で箱根に行こう 全 30 時間	・箱根の特色を知り，それに応じた活動を教師や友達と一緒に体験する。 ・友達や教師と一緒に活動したり宿泊したりすることを通して，楽しい思い出をつくる。	・日にちや場所，箱根の特色などを知り，しおりを作る。 ・修学旅行の活動を事前に体験する。 ・思い出を写真や素材を使って表現する。
レベルアップ授与式をしよう（月１回，全８回）	・自分や友達，学級が頑張ったことを振り返り，互いを褒め合う。	・一カ月ごとに頑張ったことを，写真を見て振り返り，児童それぞれと学級全体に教師から表彰状を受け取る。

Ⅲ　授業づくりの経過

１　「夏祭りをしよう」の経過

児童の様子	指導の評価
・遊び場づくりでは，自分のやりたいお店を選び，教師と一緒に準備するが，友達の様子をあまり見ていない。 ・客役の児童が焼きそばを作ろうとすることがあった。店員役は，遊びに誘い掛ける言葉や何をするのかが分からず，立っていたり，場を離れたりすることがある。 ・チケットや遊び場の物を渡すことはできるが，視線を合わせていることが少ない。	・友達を意識できるように，グループ別にしたり，活動を分担したりするなど，友達と同じ目的で活動することが分かるための工夫が必要である。 ・店員は何をするかが分かるように，操作する物を順番に置く等して環境を整える。教師も店員役と客役になり，「いらっしゃい。」，「どうぞ。」などと，役割に応じた言葉の手本を示し，一緒に遊ぶ。 ・「○○くん，どうぞ。」等，名前を呼んで関わることが生活の中でも少ない。
単元全体の評価：単元の目標であった「友達と一緒に遊ぶ」ことが難しく，教師と一緒に遊んだり活動したりする児童が多かった。活動の場から離れる児童もいて，目標設定が高かったと考える。「○○遊び」という一つのテーマで遊ぶ経験が少ないことや，普段の生活から友達の様子を気にすることが少ないことも関係していると考える。また，児童同士の関わりが生まれるように，友達の名前を呼ぶ機会を設定する等，教師が一緒に活動しながら児童と児童をつなぐことを意識して指導したい。	

２　「修学旅行で，箱根に行こう」の経過

児童の様子	指導の評価
・スライドの写真やイラスト，文字を見て，その名前を言ったり，文字を読んだりする児童が多く，友達の言葉を聞いて，「海賊船。」等と答える児童がいた。姿勢が崩れたり，画面を見ていなかったりする児童もいた。 ・かまぼこ作り等の体験的な学習では，友達の様子をちらりと見ることがあった。教師が友達の様子を伝えると様子を見たりまねしようとしたりするが，自分から見ることは少なかった。 ・「○○さん，一緒にやろう。」と自分から友達を誘う児童がいた。 ・教師の合図に合わせ物を操作した児童が複数いた。隣の児童を見ることもあった。	・スライドを見たり文字を読んだりしながら，活動を共有している。児童が文字を読んでいる間は，教師は言葉を掛けず，友達の声が聞けるようにする。スライドの文字は多くなりすぎないように配慮する。 ・友達の様子を見るのは，自信がないときに，友達の様子からヒントを得ようしているのではないか。感染症対策で，児童同士の距離を取っているため，互いの様子が見えにくい。 ・授業の始めに，みんなで一つの物を作ることを伝えたことで，友達を誘ったのではないか。 ・教師の合図に合わせ，同時に活動することは，友達を意識することにつながるのではないか。
単元全体の評価：友達の言葉を聞いて，スライドを見たり言葉を言ったりするなど，教材・教介して活動を共有する場面があった。友達を見たり，誘ったりするなど，友達を気にする様子が１学期に比べると増えている。制作活動では，友達の様子が見えるように配置を工夫するとともに，教師が友達の様子を伝えていきたい。また，「○○くんを見てごらん。」という言葉掛けでなく，「○○くんは何をしていた？」と聞いたり，ときには見守ったりすることも必要であると考える。	

３　「レベルアップ授与式をしよう」の経過

児童の様子	指導の評価
・６～７月は，その月の学習についての写真を見て，その様子を教師に伝えるが，賞状をもらうことや，友達を褒めることまでに至らない。 ・８～11 月は，友達は何をしているのかを聞くと，写真の様子を説明する児童が増えた。自分の賞状をよく見るが，友達が賞状	・なぜ賞状をもらうのか，賞状の価値が分からず，友達のことまで意識が向きにくい。学習の流れを変えず，児童の様子を見ていく。 ・学習内容が分かり，家庭で褒められることにより，自分の賞状をよく見るが，友達も褒められていることまでつながらない。学級の賞状は代表者が受け取るため，自分たちが表彰さ

をもらう様子に注目する児童は少なく，学級全体の表彰にも，注目していない。 ・12 月は，個人の賞状をスライドに映すと，友達の賞状も見ていた。「６年生の表彰をします。」と言うと，「修学旅行。」と答えた児童がいた。	れていることが分からない。 ・友達の賞状を見て，自分の賞状との違いに気付いたのかもしれない。修学旅行は，友達と一緒に活動したという実感があったのではないか。
単元全体の評価：自分が褒められることにうれしさを感じるようになったが，友達を気にしたり，自分から拍手をしたりする児童はいない。12 月は，修学旅行が表彰の対象だったため，自分たちの体験として印象に強く残ったのではないか。他の授業で自己評価をしたときに，できた/できないの評価をする児童がいた。1 月からは自分たちで決めた生活目標を評価して表彰するようにしたい。	

Ⅳ　幼児・児童の変容の結果

＜児童の変容＞	＜効果的だったこと＞ 目標設定，指導内容・方法，教師の関わり方，教材教具，など
・友達と一緒に場を共有する。 ・友達と同じ活動をする。	指導内容・方法 ・「やってみよう」，「できた」などの充実感や達成感がもてるように，生活に関連すること，興味関心のあること，新たに興味をもちそうなこと，活動量などを考慮し，学習を組み立てた。 ・物を操作したり，体を動かしたりする学習を取り入れた。 ・何度か同じ方法や流れを繰り返し，安心して参加できるようにした。
・友達の声を聞く。	教師の関わり方　教材教具 ・友達の声が聞こえるように，教師が聞く様子を示す。その後，「〇〇くんは何と言っていた？」等と問い掛けた。 ・読みやすく聞きやすい文字の量にするように配慮した。
・友達の様子を見る。	教師の関わり方　環境設定 ・友達の様子に注目できるように，「〇〇くん，□□しているよ。」と注目してほしいことを具体的に伝えた。 ・友達の様子が見えるように，机や椅子を配置した。
・友達に物を渡したり，受け取ったりする。	教材教具 ・物を介在させることで関わりは生まれるが，視線を合わせることが少ないため，相手を意識できるように，名前を呼んだり言葉を添えたりした。
・友達を誘う。	目標設定 ・みんなで一つの作品を作る等，一人ではできないことを目標にした。

Ⅴ　まとめ（子供の力を育てるための授業づくりのポイント）

１　教材教具の工夫

物を操作したり，介在させたりすることで児童の関わりが生まれやすいが，児童の視線の向かい方等に教師が意識を向けていないと，ただ物が動いているだけになることもある。友達を見る，言葉を聞くことの難しい児童には，物を使って一緒に活動を共有することは有効であると考える。

２　教師の関わり

友達と一緒に活動したり，関わったりするために，教師が一緒に活動したり，言葉掛けをしたりすることは，必要である。しかし，児童 - 教師という関係のみになると，友達へ意識を向けることが少なくなる。そのため，言葉掛けを工夫することや，ときには教師が児童の様子を見守ることも必要であると考える。

３　活動設定と環境設定

二人組や三人組などの小グループで活動したり，役割を分担したりするなど，同じことをする友達や違うことをしている友達がいることへの気付きが，友達との関わりを生むこともあった。また，互いの活動が見えるように机等を配置することで，同じことをしようとしたり，自分のしていることが

正しいかどうか確認したりする様子も見られた。感染症対策をする中で，児童の距離の取り方に配慮し，ときには教師が児童の様子を代わりに伝えることも必要である。

４　集団としての目標設定と，児童それぞれの実態やねらいを明確にすること

実践を重ねる中で，児童が場や活動を共有し活動するために必要な力は何か，友達と関わるために必要な力は何かをできるだけたくさん挙げ，整理する必要性が出てきた。また，整理する過程で，それらには段階性がありそうなこと，また，児童それぞれの持っている力が段階ごとに並んでいるのではなく，凸凹があることが見えてきた。また，児童が関わりをもつためには，活動の場と活動内容の共有がされることが前提となることも分かってきた。６年生という生活年齢を考慮し，集団として何を育てるのか，個々の持っている力を発揮するためにどのような学習内容を計画するのかなど，個々の児童が人と関わるためにどのような力があるのか把握し，何を育てるのかを明確にすることで，教材や教具，教師の関わり方が変わっていくのではないかと考える。

５　いきいきタイムだけでなく，各教科等，教育活動全体との関連性を考えること

場所や活動の共有や，人と関わって学ぶことは，いきいきタイムに関わらず，学校の教育活動全体で行われる。また，各教科等がもつ特性によって指導内容や方法が異なる。そのため，各教科等で友達と学び合うための指導内容や方法も学級内で共通理解するようにしてきた。これにより，いろいろな場面での児童の様子を共有することができた。

３　各学級の授業実践のまとめ

（１）指導のポイント

今年度の各学級の実践において，共通して効果的だと考えられる指導のポイントを以下の二つに整理した。

・幼児児童の主体性が生まれるように工夫したり，主体性を尊重したりすること

幼稚部りす組の実践では，幼児が「やってみよう」や「もっと～したい」という思いをもって遊びに向かえるように，幼児の好きな遊び方や関わり方で遊びに誘うことを大切にしていた。小学部３年生の実践では，児童が絵本のおもしろさを知り，「やってみたい」や「続きを見たい」などと思えるように，教材教具を用意し，授業展開を考えることで，児童が自分の思いや気持ちを表現したり，相手からの働きかけを受け入れたりすることにつながった。これらのことから，幼児児童の主体性が生まれるように，指導内容・方法，教材・教具や教師の関わり方を工夫することが，幼児児童が興味をもって遊びや学びに向かったり，自分の思いを表現したりすることにつながると考える。

・幼児児童が，教師や友達に気付き意識できるように，教師の関わり方を工夫すること

相手からの関わりに気付きにくかったり，応じることが難しかったりすることは，自閉症の障害特性の一つである。幼稚部りす組での実践では，教師からの関わりに気付き，期待して見ることができるように，普段から大きな動きや声で関わったり，「３，２，１。」や「せーの！」などの毎回同じ掛け声を合図にしたりすることを心掛けていた。小学部の実践では，友達に注目することができるように，「〇〇くんが，～しているよ。」と具体的に様子を言葉にして伝えたり，「〇〇くんは，何をしていたかな。何と言っていたかな。」と問い掛けたりすることを大切にしていた。その結果，友達に注目したり，友達のまねをしたりするようになった。これらのことから，幼児児童が，教師や友達を意識して遊びや学びを深めるためには，教師の関わり方の工夫が大切であると考える。

（２）研究方法についての評価

年度末に，本校職員を対象に，今年度の研究についてアンケートを行った。「各教科等の授業において幼児児童の変容から，目標設定や指導計画，指導内容や指導方法などにおいて効果的であった指導についてまとめること。」について，「できた」，「ややできた」という回答は 64 パーセント，「できなかった」，「ややできなかった」という回答は 36 パーセントだった。アンケートの結果を基に，研究方法についての成果と課題を整理した。

＜成果＞

・学級担任，学部の教師と一緒に研究したこと

学級やグループという集団で話し合う中で，それぞれの場面の幼児児童の様子を共有することで，効果的な指導方法を探ることができたという意見や，幼児児童の課題について，学級内で解決案を考えて実行したという意見があった。また，学級単位で勉強会を実施して指導方法の検討を行った学級もあった。これらのことから，学級やグループという小集団で幼児児童の実態を理解して共有し，効果的な指導方法を探り，授業づくりを行うことができたと考える。

・効果的な指導方法を見付けること

各教科の指導につながる自立活動の指導をする中で，児童の実態に応じた指導のポイントを確認しながら指導方法を検討し，授業改善を行ったという意見や，授業の映像を見返すことで幼児児童の変容を捉え，指導方法を確認することができたという意見があった。また，幼児児童の実態と合わせて指導内容・方法の効果を探ることは良かったという意見もあった。これらのことから，幼児児童の変容から指導方法を検討し，効果的な指導のポイントを探ることができたと考える。

＜課題＞

・子供の変容の理由を捉えること

幼児児童の変容を感じながらも，なぜその変容が見られたかという理由まで探ることができなかったという意見が複数あった。また，学級や個人で効果的だと考える指導方法を探ったが，実際に効果的だったのか，他の方法もあるのではないかという不安があるという意見もあった。これらのことから，幼児児童の変容の理由を分析し，教師間で共有し指導に生かすことは今後の課題であると考える。

・授業改善を行い，効果的な指導方法をまとめること

研究授業を通して様々な意見をもらい授業評価をすることはできたが，評価を基に授業改善まで行うことはできなかったのではないかという意見や，効果的な指導方法を探ることはできたが，まとめることはできなかったという意見があった。また，研究の対象期間が短いのではないかという意見もあった。今回の研究では，各グループ１回の授業研究会を実施し，授業を評価することはできたが，その後の授業改善や効果的な指導方法のまとめについて共有する機会を設定することができなかった。改善した授業の幼児児童の様子を共有したり，効果的な指導方法についてまとめて発表したりする場の設定が必要だったと考える。

４　オンラインでの授業研究会について

先に述べたように，今年度実施した授業研究会は，Web 会議システムをつないで行った。授業研究会を実施した後に，参加職員に対して毎回アンケートを取り，課題点については次の授業研究会で改善するようにした。アンケート結果から，オンラインで授業研究会を実施するためのポイントと課題について次のように整理した。

（１）オンラインで授業研究会を実施するためのポイント

・使用する資料は事前に参加者に配布する

事前に指導案や授業研究会の進め方についての資料は配布していたが，各学級で育てたい力を設定した理由やそれまでの授業づくりの経過などについて，授業者が説明する際に使用したスライド資料の配布は行っていなかった。このことについて，授業研究会で使用する資料は事前に配布し，参加者が自由に見ることができるようにしておくことで理解が深まるという意見が多かった。スライド資料を画面上で共有するだけでは，授業者の説明を理解し，協議を深めていくことは難しいことが考えられる。授業研究会で使用する資料は，事前に参加者に配布するか，メール等でデータを送信し，参加者がいつでも資料を確認できるようにすることが大切である。

・授業研究会で出た意見はリアルタイムで文字入力して共有する

通常の授業研究会であれば，出された質問や意見は，記録係がホワイトボード等に書くことで，参加者全員で情報を共有しながら協議を進める。しかし，オンラインでは，従来の方法での情報共有は難しく，協議内容を記録したホワイトボードを画面に映して共有する方法を試してみたが，画面に映る文字が小さく分かりにくいという意見が多かった。そこで，ワード等のソフトを使用して，パソコンに協議内容を直接文字入力したデータを画面共有して授業研究会を進めると，記録した内容が分かりやすいという意見が多かった。オンラインでの授業研究会の記録は，パソコンに直接文字入力したものを画面共有すると，参加者全員で同じ情報を共有することができる。

・授業の動画はそれぞれの機器で再生する

感染症を予防する観点から，授業の様子は参観するのではなく，参加者は，授業の様子を動画で撮影したものを見て，授業研究会に臨んだ。参加者がそれぞれの機器で動画を再生して視聴したグループと，ホストが動画を再生し，画面共有して視聴したグループがあった。画面共有で動画を視聴したグループ

では，動画再生がうまくできなかったり，再生できても途中で画面が固まってしまったりして，トラブルが多かった。一方，それぞれの機器で動画を再生して視聴したグループは，大きなトラブルがなかった。授業の動画を視聴する方法は，授業研究会の前に動画をそれぞれの機器で視聴して参加する，若しくは，授業研究会の中でそれぞれの機器で動画を再生して視聴する時間を設けるなどの方法が望ましいと考える。

（２）オンラインで授業研究会を実施する場合の課題

・授業の動画は，必要な情報が得られるように撮影する

授業の動画を見て，子供の様子はよく分かったが，子供が何に対してどのように反応していたのか分からなかったという意見があった。また，授業で使用していた教材を間近で見たり，触れたりすることができないため，授業者が教材を提示して，具体的な使用方法について説明してもよいのではないかという意見もあった。授業研究会の参加者が，授業の動画を見て必要な情報を得て，議論を深めることができるように，子供の様子と，子供が反応している物（教師が提示している教材等）の両方を見ることができるように動画を撮影したり，授業者が授業で用いた教材について説明する時間を設けたりするなどの工夫が必要であると考える。

・議論を深めるために，協議の柱を絞る

個別学習や，授業者がある程度協議の柱を立てた授業研究会では，協議の視点を幼児児童一人に向けたり，協議の柱を中心に意見交換をして議論を深めることができたという意見があった。一方，集団の授業や，協議の柱を立てずに，参加者の意見から議論を深めようとした授業研究会では，話題にする幼児児童を限定したり，協議の柱を絞ったりすることが必要ではないかという意見があった。オンラインによる授業研究会では，参加者が自由に発言することが難しかったり，参加者同士の意思疎通が難しかったりするため，意見交換に時間を要する。決められた時間内で議論を深めるためには，対象となる幼児児童を１～２名に限定したり，事前に協議の柱を絞って参加者に意見を求めたりする必要があると考える。

別紙②

Ⅴ　今年度の研究のまとめ

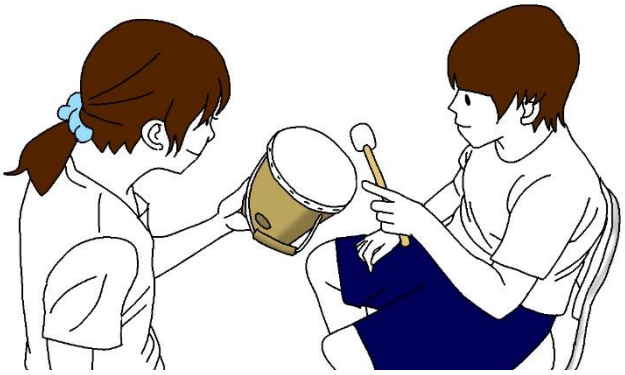
今年度の研究では、子供一人一人の指導課題を踏まえた各教科等の授業づくりとして、自立活動と各学級の授業づくりについての実践をまとめた。

自立活動の授業づくりでは、幼児児童一人一人の指導課題を導き出すために、平成 30 年度の研究の成果より、学級担任全員で自立活動の「流れ図」を活用しながら，幼児児童の学習上又は生活上の困難さ，その理由や原因を探り，整理しながら指導課題を明らかにした。学級担任全員で、子供の困難さや困難さの理由を考えたり、話し合ったりすることで、子供の課題や実態の共通理解をして、指導課題を導き出し、共通の指導内容や方法で実践を積み重ねることができた。一方で、「流れ図」の項目内容に関することでは、「流れ図」の項目内容の言葉や考える視点の共通理解ができておらず、作成を進めていく上で教師が難しさを感じていたことが確認できた。「流れ図」で使っている言葉の意味を一つ一つ確認したり、手本となるような考え方、実践例を提示したりしながら、子供に関わる複数の教職員の視点で、子供の困難さや困難さの理由や原因を明らかにし、子供の指導課題を導くことができるようにしていきたい。また、自立活動の授業づくりでは、８学級の指導事例を整理、分析し、子供の困難さにあった共通する特徴、また、共通する指導のポイントが明らかになった。

各学級の授業づくりでは、各学級で研究テーマを設定して取り組んだ。ここで報告している３学級の授業実践では、自分から友達に働き掛けたり、友達からの働き掛けに気付いたりしながら友達と一緒に活動をしたり、学び合ったりする力を育むことをテーマとして授業づくりが行われた。効果的だと考えられる指導のポイントとしては、幼児児童の主体性が生まれるように工夫したり、主体性を尊重したりすること、幼児児童が教師や友達に気付き、意識することができるように、教師の関わり方を工夫すること、が挙げられた。また、今年度、感染症対策の一つとして、オンラインでの授業研究会を行った。授業研究会の反省から、オンラインでの授業研究会を実施するためのポイントと課題についても明らかになった。

次年度も、知的障害を伴う自閉症の幼児児童一人一人の指導課題を明らかにした自立活動の授業づくりを軸とした研究を進めていきたいと考えている。日々の授業づくりの中で、子供の変容を基に、子供ができるようになったこと、できなかったことの理由や原因を様々な方法で探り、整理してまとめながら、子供が育つ根拠を明確にした授業づくりが提案できるように、学校の教師全員で研究を進めていきたい。

【別紙資料】



別紙①

表１　自立活動の指導事例から一部を抜き出した幼児児童の困難さ，困難さの背景と実態，効果的だった指導

学級	幼児児童の学習上，生活上での困難さ	困難さの背景とその実態	効果的だったこと
幼稚部 ひよこ組 Ａ児	・教師や友達からの関わりに気付かず，一人で遊びを楽しむこと ・自分の思い通りに行かないこと，嫌なこと→泣いたり，相手をつねったりしてうまく伝えられないこと	・一人遊びに集中しているため，教師や友達から関わりに気付いていない ・相手に気持ちや要求を伝える経験が少ない。 ・相手に気持ちや要求を伝える表現が少ない。 ・望ましくない関わり方で，周りの大人に自分の気持ちを伝える。	・教師が本児の好きな遊びや遊具を使用した活動内容を設定すること ・本児の正面で関わったり，本児と目を合わせながら言葉を掛けたりすること
幼稚部 りす組 Ｂ児	・やりたくないことを要求される，嫌なことをされる →泣いたり，物を投げたりして表現すること ・手伝ってほしいときに，教師にお願いができない。	・気持ちを表現する手段が少ない ・自分の思いを表現する言葉が少ない ・人と関わり，気持ちを共有したり，やり取りしたりする経験が少ない ・教師からの働き掛けを受け入れることが難しい	・子供の好きな関わり方で遊ぶこと ・子供の好きな物を介して遊ぶこと ・教師と一緒に遊んで「楽しい」という経験を積み重ねること
幼稚部 うさぎ組 Ｃ児	・初めての環境，初めての活動，苦手なこと，何かを指示されること →拒む，物を投げる，たたく，その場から離れる，別の活動をし続けること	・様子や動きを表す言葉など，正しく理解している言葉が少ない ・伝えたいことを適切に言葉で伝えることが難しい ・初めて関わる人や行うこと，活動の切り替えなど，変化への対応が難しい	・子供にとって分かりやすい言葉や表現で指示をしたり，活動内容を伝えたりすること ・教師との信頼関係を高め，教師と一緒に行いたいやり取り遊びを増やすこと ・始まりと終わりを明確にしたこと
小学部 １年生 Ｄ児	・睡眠リズムが安定しないこと ・常に動いていて，じっくりと活動に向かったり，休んだりすることができないこと ・壁や床を強くたたくため，けがが多いこと ・大人の手を引く，体によじ登る以外に，自分の要求を伝える方法が少ないこと	・生活リズムを作ることが難しい ・周辺視遊びやあご打ちなどの自己刺激行動を続けている ・感覚の鈍麻 ・人とやり取りする経験が少ない	・教師が正面から，視線を合わせて関わったこと ・感覚に働き掛ける活動を存分に行ったこと ・教師に体を預けるなど，リラックスした状態を知る活動を行ったこと
小学部 ３年生 Ｅ児	・不安なこと，自信がないこと →泣いたり怒ったりして，活動に取り組むことができない。 ・自分の思いや気持ちを相手に伝わる言葉で表現すること	・失敗を恐れる，これから先に起こることに対して、心配になりすぎる ・自分が抱く感情を受け止めながら，物事に冷静に取り組むことが難しい ・相手への伝え方が分からない	・イラストや文字，動画などを活用して，教師とのやり取りをしながら，物事を理解すること ・子供の気持ちを受け止めて，教師とやり取りしながら，気持ちの整理をする時間を作ること
小学部 ４年生 Ｆ児	・質問に答えることが難しいこと ・自分の気持ちを言葉で表現できないこと →大きな声を出す，頭を壁にぶつける ・遊びを終えること	・理解できる動作や感情，状況などを表す言葉が少ない ・要求や拒否の気持ちを言葉で伝えることが難しい ・ルールや決まりなどの理解が難しい	・文字やイラストを用いて，子供の気持ちや今の状況を教師と一緒に整理すること ・教師とやり取りしながら，子供自身が選択すること
小学部 ５年生 Ｇ児	・一定時間注意を向けて課題に取り組むこと ・道具などを操作して使うこと ・片足立ちの維持や中間姿勢をとること	・体性感覚のうち，皮膚，筋肉，関節の感覚に対する気付きや見る力が弱く，周りの刺激に注意がそれやすい ・握る力が弱く，道具の意味の理解が難しい ・適切な体の動かし方や力の入れ方が分からない	・教師と体を介したやり取りを通して，自分の体に入ってくる感覚への気付きを高めること ・感覚に訴え掛ける教材を用いたこと
小学部 ６年生 Ｈ児	・活動や相手の様子に合わせて，自分の言動を調整すること	・自分の決まったやり方や人との関わり方がある ・言動の調整が難しい ・気持ちが高揚すると，教師からの言葉掛けを理解することが難しい	・情報を整理して繰り返し伝えたこと ・やり取りの成功体験を重ねること

別紙②

今年度の研究日等の日程及び内容

実施日	研究日・校内研修会の内容
６／12	第１回「今年度の研究と研究の進め方について」 ・今年度の研究テーマ、研究の目的、方法について共通理解をする。
６／22	校内研修「自立活動について」 ・各学部で自立活動の指導について共通理解をする。
６／26	第２回「指導課題を導き出そう～流れ図を活用した作成演習～」 ・各学級で代表事例児を１名決めて、子供の困難さ、困難さの理由や原因、困難さの背景などの意見を出し合い、指導課題を導き出す。
７／15	第３回「学級の研究テーマ発表」 ・各学級で今年度取り組む研究のテーマ、テーマ設定の理由、指導場面について共通理解をする。
９／23	第４回「授業研究会の進め方について」 ・授業研究会の日程、授業研究会グループ、授業研究会の進め方について共通理解をする。
９／30	第５回「流れ図作成のアンケート結果、自立活動の経過の書き方について」 ・第２回の「流れ図」の演習におけるアンケートの集計結果、自立活動の実践についての経過とまとめ方の様式について、共通理解する。
11／11	第６回「各グループで授業研究会①」 ・幼稚部りす組、小学部３年生、小学部５年生の授業研究会を実施する。
11／12	第７回「今年度の研究のまとめ方について」 ・現在のコロナの感染状況から、自閉症実践研究協議会の中止、研究のまとめ方、発表方法について共通理解する
11／25	第８回「各グループで授業研究会②」 ・幼稚部うさぎ組、小学部６年生の授業研究会、小学部低学年の事例検討会を実施する。
12／９	第９回「各グループで授業研究会③」 ・幼稚部ひよこ組、小学部１年生、小学部４年生の授業研究会を実施する。
１／20	第 10 回「今年度の研究のアンケート実施について」 ・研究のアンケートを実施すること、次年度研究していきたいことについてアンケートの提出を依頼する。
３／9	第 11 回「今年度の研究アンケートの集計結果，次年度の研究の方向性」 ・研究アンケートの集計結果から次年度の研究の方向性を共通理解する。
３／24	第 12 回「今年度の研究のまとめ」 ・集録を読みながら、自分の考えたことや感じたことを言葉にして伝えたり、学校の研究として取り組んだことを共通理解したりする。

第３部　オンラインでの取組

Ⅰ　はじめに

Ⅱ　一斉休業中の指導について

Ⅲ　オンラインでの行事について

Ⅳ　オンラインでの取組の実際

Ⅴ　オンラインでの取組のまとめ

オンラインでの取組

小学部教諭　五反田明日見，久野智宏

Ⅰ　はじめに

今年度は，新型コロナウイルス感染症により，本校の教育の在り方が大きく見直された１年であった。昨年度末の３月から５月までの３か月間，緊急事態宣言により一斉休業となり，幼児児童が登校し，教師や友達と「対面で」学習するという当たり前の教育ができなくなった。６月以降，教育活動が再開されてからも，年間を通じて，運動会やのびのびまつり（外部団体の協賛を得て開催する学校行事）などの行事は中止となり，幼児児童や教師らが集合し，密になりかねない集会等も行えない状況となった。しかし，新型コロナウイルスの影響により，直接，見て，聞いて，関わって学ぶことが難しい状況の中でも，これまでのように幼児児童の学習の機会を保障するために，オンラインを活用した新たな取組を試み，実践を積み重ねてきた。今年度の取組を通して，オンラインでの指導を行う際に，どのようなことがポイントとして挙げられるのか，更に，今後，オンラインでの学習を発展していくためには，どのような点が大切であるかについて，明らかになったことを述べる。

Ⅱ　一斉休業中の指導について

１　一斉休業中の指導を行うにあたって

教育現場において，３月～４月は，卒業・修了，入学・進級し，新しい生活や環境（教室や担任）が始まる時期である。この期間は，子供たちがこうした変化や新しい生活・環境について知り，納得して受け入れたり，新たな担任等との関係作りをしたりする大切な時期でもある。今年度も４月に，学校は，新年度の体制に移行したが，一斉休業が続く中で，担任と幼児児童，担任と保護者が直接，顔を合わせてコミュニケーションをとることが難しい状況が続いた。

そのような状況の中，保護者からは，長期化する一斉休業により，いつ学校が始まるのかが分からない，先の見えない不安があることや，外出自粛などにより，家庭で過ごす時間が多くなり，保護者の負担や家庭での様々な子育てに関する悩み事等が増えてきているという声が上げられた。また，目に見えないウイルスによって，「外出ができない」ことや「家庭で過ごさなければならない」こと，「学校が休み」であることなどの現状を子供にどのように説明すればよいか，そして，どのように家庭で過ごせばよいかなどの不安の声もあった。

私たち教師も，新年度の教育が開始されたものの，幼児児童との直接的な関わりを通した実態把握や教育ができないことへの不安と焦りを感じた。また，家庭で過ごす幼児児童に対して，どのようなアプローチができるのか，保護者との関係作りをどのように進めていくのかという点において，模索している段階であった。

２　学校全体の取組

これまで，誰もが経験したことのない事態の中，まず，教職員全体で「幼児児童が，安心して家族と一緒に，家庭で過ごすためには，学校は何ができるのか」，「長期化する一斉休業の中で，幼児児童の学習の機会をどのように確保するのか」，「保護者とどのように協同関係を築いていくのか」という点を踏まえ，休業期間中の学校全体の取組の方針について，共通理解を図った（図１）。

幼児児童	幼児児童が，様々な手段通して，担任と関係作りをするとともに，現状を理解したり，学校生活が始まることに期待感をもったりすることができるようにする。
保護者	保護者が，現在の生活の中で感じている子育ての悩みや，感染症等への不安，思いなどについて担任に話したり，一緒に対応策を考えたりすることを通して，前向きに生活を営むことができるようにする。
教職員	教職員自身の健康に十分に配慮しながら，全教職員が協力して幼児児童の学びを保障し，幼児児童や保護者の心のケアを行うための取組を検討し，実施する。

図１　学校全体の取組の方針

そして，具体的に幼児児童と保護者にどのような取組ができるのかについて，教職員一人一人が把握し，各学級，学部，係等で，分担・協力して取り組んだ（図２）。また，様々な不安を抱える保護者に対しては，休業期間中，学校と家庭はどのようにやり取りをし，連携していくのかについて，明確に示すため，図３を資料として配布した。

図２に示した休業期間中の幼児児童への取組の①・②の詳細は，表１に示す。

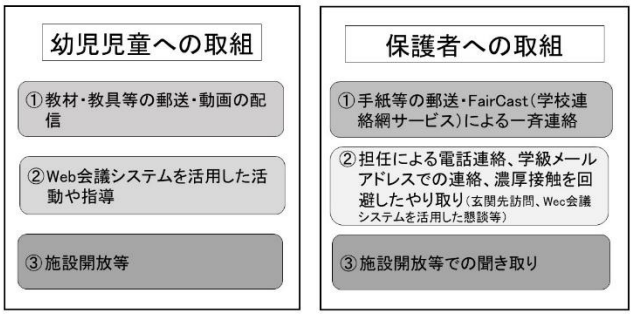


図２　休業期間中の取組

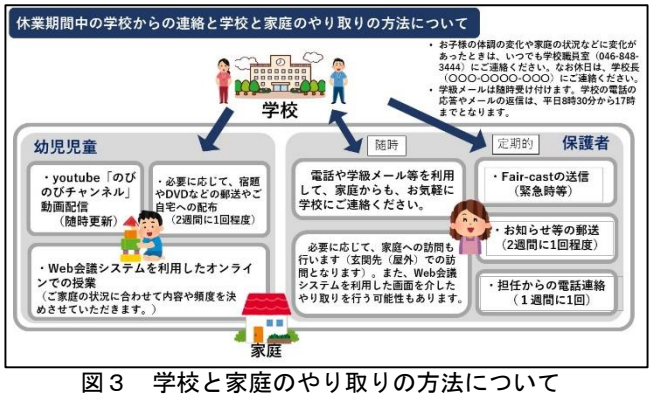


図３　学校と家庭のやり取りの方法について

表１　幼児児童への取組①②の詳細

・動画の配信：のびのびチャンネル（歌，運動，絵本，生活，その他のカテゴリーで計 21 本の動画掲載）での限定配信，DVD を郵送 ・Web 会議システムを活用した授業：オンラインでの同時双方向型の授業 ・ホームページの活用：学校ホームページにお知らせを掲載（臨時休業の延長，のびのびチャンネルのリンクや解説，PCR 検査手順表等の公開）

また，長期化する一斉休業により，さらに，子供たちの学習の機会を確保するために，５月からは，学校と家庭を Web 会議システムでつないだオンラインでの授業を開始した。本校では，Web 会議システムとして，「Zoom（Zoom　Video　Communications 社）」を活用し，学習を試みた。

Ⅲ　オンラインでの行事について

一斉休業が明け，６月より，本格的に教育活動が再開したが，感染症予防の観点から，一堂に会しての儀式行事や，日常的な他学年との合同の授業，夏季の水泳の授業などの季節に伴う学習や校外学習，調理実習などが中止や制限を設けることとなった。また，10 月の運動会や２月ののびのびまつりなど，幼児児童，教師が一堂に会して行う学校行事も中止となった。そのため，子供たちが活動や行事を通して季節を意識したり，学習成果を人前で発表したりするような場も非常に限られ，従来の教育活動には至らない部分が多かった。そこで，新しい生活様式の中で，感染症予防対策を講じながら，子供たちが季節の行事を楽しみ，他学級の友達や教師とも関わりを深め，共に学んだり，その中で，自分の役割を果たし達成感を味わったりする経験を重ねてほしいと考え，新しい学習形態の在り方を模索し，今年度はオンラインを活用した学習や活動，行事を計画し，実施した。

Ⅳ　オンラインでの取組の実際

次のページからは，休業期間中の各学級のオンラインでの学習の指導記録（３事例）とオンラインでの行事の取組（３事例）を報告する。

＜オンラインでの学習　幼稚部ひよこ組＞

オンラインでの学習の指導記録

幼稚部教諭　ひよこ組　飯島杏那，大門志帆，中濟珠実

Ⅰ　オンラインでの学習を始めるにあたって

本学級は３歳の男児３名と女児１名，４歳の男児２名の合計６名の幼児で編成された学級であり，どの幼児も学校生活を送ることが初めてである。また，入学式が６月に変更されたため，４，５月の在宅学習を開始する上で，幼児や保護者と直接会う機会のないまま，在宅での学習を計画することとなった。そのため，まずは一斉休業中である５月の中旬に，担任全員で各家庭に教材を届け，保護者と顔を合わせてからオンラインでの活動を開始した。

幼児の実態として，保護者等身近な大人が近くにいることで安心して過ごすことができる幼児が多く，その中で，欲しい物に手を伸ばす，手をたたく，大人の手を引くなど，それぞれの方法で要求や気持ちを伝えることができる。大人からの働き掛けに対しては，身近な物の名前や動きを表す言葉を聞いて理解する幼児，言葉と身振りを併せることで理解する幼児，言葉だけでなく写真や具体物を見ることで理解する幼児がいる。興味・関心は様々で，身体接触を伴う遊びや体を動かす遊び，シャボン玉，歌やダンスなどそれぞれに好きな遊び，活動がある。そのため，オンラインでの活動では，様々な活動を設定し，幼児の好きな物や苦手な物，幼児の様子を保護者に聞き取ったり，幼児の様子に合わせて言葉掛けをしたりしながら実態を把握していくように心掛けた。活動後は保護者とメールでの振り返りを通して，活動を行った感想や，困ったことなどについて共有し，次のオンラインでの活動に生かすことにした。

休業期間中は，福祉サービスの事業所を利用している幼児が少なかったため，ほとんどの幼児が家庭で過ごしていた。そのため，家庭での生活をより過ごしやすく，豊かにできるよう，場を設定したり，遊びを提供したりできるとよいと考えた。また，家庭での悩みについても保護者に聞き取り，オンライン上でのやり取りやメールでの振り返りの中で支援できるように心掛けた。

Ⅱ　オンラインでの取組のねらい

・保護者と一緒に，活動内容に興味をもって見たり，触れたりして遊ぶ。（幼児のねらい）
・活動に対する我が子の興味・関心に合わせて関わったり，感じたことや気付いたことを共有したりする。（保護者のねらい）

Ⅲ　指導スケジュール

月日	A 児	B 児	C 児	D 児	E 児	F 児
4 月 10 日	DVD 送付（担任紹介，「サンサンたいそう」（作詞：やなせたかし，作曲：近藤浩章），手遊び歌「とんとんとんとんアンパンマン」（作詞：不詳，作曲：玉山英光））					
4 月中	週一，二回　電話連絡					
5 月 11 日	家庭訪問①（担任挨拶，教材貸し出し，Web 会議システムの内容説明，教材配布）					
5 月 13 日	個別での Web 会議システムを活用した学習①「こいのぼりを作ろう」					
5 月 14･18 日	教材送付（活動内容説明，カスタネット）家庭訪問②（様子聞き取り，教材送付）					
5 月 20 日	個別での Web 会議システムを活用した学習②「音楽に合わせて楽しもう」					
5 月 21･25 日	教材送付（活動内容説明，シャボン玉用教材，C児：DVD）家庭訪問③					
5 月 27 日	個別での Web 会議システムを活用した学習③「シャボン玉で遊ぼう」					
6 月 1 週目	個別での Web 会議システムを活用した学習④「選んで遊ぼう」（B 児：未実施）					
※活動は一回 15 分程度とし，①導入（「はじまるよ」（作詞，作曲：不詳），アンパンマンのパネルシアターなど）②各活動③終末（「おしまい」の歌（本校幼稚部教員），アンパンマンの手遊び等）という流れで展開した。終了後に，メールで感想と家庭での様子（普段の遊びの終わらせ方等毎回異なる内容）を聞き取るようにした。						

Ⅳ　指導の実際　　（○：成果，●：次回に向けての課題・改善点）

日にち	5月 13 日	活動名	こいのぼりを作ろう
ねらい	幼児	・保護者と一緒に絵の具に触れたり，教師の歌声を聴いたりする。	
	保護者	・Web 会議システムの使い方について知る。	
指導内容	・保護者と一緒に画面に映る教師を見る。 ・画面に映る教師が行う手本を見たり，保護者と一緒に絵の具に触れたりする。 ・教師の歌声を聴いたり，保護者と一緒に手遊びをまねしたりする。		
活動の様子	幼児	○始まりの歌や終わりの歌を聴いて笑顔で注目し，保護者と手を動かしていた。（B，F 児） ○絵の具を自分から触ったり筆を使用したりして塗っていた。（A，C，D，E 児） ○シールを貼っていた。（B，F 児） ●教師や保護者が絵の具に触る様子を見て，活動場所から離れていた。（D 児） ●初めての活動であったため，教師が呼び掛けたり歌ったりすると別の場所に移動したり，泣いたりしていた。（F 児） ●きょうだい児が一緒に参加している家庭もあり，教材を取り合う様子が見られた。（E 児）	 写真１　活動の様子
	保護者	○自分から我が子の様子を伝え，一緒に活動したり，教師からの問い掛けに答え，我が子の様子を見守ったりしていた。 ●活動に向けて環境を整えている家庭もあればおもちゃが出たままの家庭もあり，様々であった。	
次回に向けて	・画面に注目できるように，幼児の好きなキャラクターの教材を映し出して，活動に誘う。 ・使用する音楽や歌詞の内容を幼児に合わせて変える。 ・幼児が活動に向かえるように，保護者に環境を整える工夫を具体的に伝える。 ・きょうだい児も一緒に楽しめるように，きょうだい児分の教材も一緒に送付する。		

日にち	5月 20 日	活動名	音楽に合わせて楽しもう
ねらい	幼児	・音楽を聴いたり，カスタネットを鳴らしたりする。	
	保護者	・活動の様子を教師に伝えたり，我が子と一緒に活動したりする。 ・我が子の様子に応じて環境を整える。	
指導内容	・保護者や教師と一緒に音楽を聴いて体を動かしたり，保護者と一緒にカスタネットを鳴らしたりする。 ・好きなキャラクターを見付けて，画面を意識したり注目したりする。		
活動の様子	幼児	○好きなキャラクターを見付け，画面に注目したり，手遊び歌を見てまねしたりしていた。（B，C，D，F 児） ○教師や保護者と一緒にカスタネットを触ったり鳴らしたりしていた。（全員） ●初めての活動が苦手で泣いていた。（C 児）	 写真２　活動の様子
	保護者	○我が子が活動に集中できるように，きょうだい児に事前に教材を渡したり，テレビを消したりするなど，環境を整えることができた。 ●パソコンの位置の関係で子供が椅子の上に立って活動する等，環境が整っていない家庭があった。	
次回に向けて	・幼児に合わせて導入や終末の活動内容を変更したり，事前に教師が手本となって活動する様子の DVD を用意したりする。 ・活動の前に保護者と一緒に幼児の姿勢や活動場所の環境を確認する。		

＜オンラインでの学習　幼稚部ひよこ組＞

<table>
<tr><td>日にち</td><td colspan="2">5月 27 日</td><td>活動名</td><td>シャボン玉で遊ぼう</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ねらい</td><td>幼児</td><td colspan="3">・保護者が吹くシャボン玉を見たり興味をもったりする。</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="3">・我が子に手本を見せたり教師に様子を伝えたりする。</td></tr>
<tr><td>指導内容</td><td colspan="4">・保護者が吹いたシャボン玉を見たり触ったりする。
・自分でシャボン玉を吹いたり，保護者のまねをしたりする。
・画面に映る教師に気付いたり，画面に注目したりする。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動の様子</td><td>幼児</td><td colspan="2">○幼児に合わせて活動を工夫することで画面に注目できることが多かった。(C，D 児)
○保護者が吹くシャボン玉の様子を見たり，自分でシャボン玉を吹いたりしていた。(A, B, C，D，E 児)
○シャボン玉遊びが好きな幼児が多く，活動終了後も家庭で泡遊びを楽しんでいた。(A, C, E 児)
●活動に興味がもてず場所を移動していた。(F 児)</td><td rowspan="2">
写真３　活動の様子</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="2">○教師とのやり取りを通して環境を工夫する家庭があった。
○教師からの指示を聞いて我が子に教材を提示したり，我が子と一緒に活動を楽しんだりしていた。
○我が子の気持ちや様子を教師に伝えていた。</td></tr>
<tr><td>次回に向けて</td><td colspan="4">・それぞれの幼児に合わせた導入や終末の活動は今後も継続していく。</td></tr>
</table>

Ⅳ　オンライン学習の指導を通しての成果と課題

	○成果	●課題・改善点
幼児	・Web 会議システムで行うことで画面に注目することができる幼児がいた。 ・保護者やきょうだい児と一緒に活動を行うことができた。 ・家庭だけではできない活動に取り組めた。 ・画面に好きなキャラクター等を映すことで画面に注目する時間が増えた。 ・毎週取り組むことで，担任の顔を覚えたり，活動を楽しみにしたりするようになった。	・いつも使用しているスマートフォンやタブレット端末でなじみのない動画（人や声など)を見聞きさせられることに戸惑う幼児がいた。 →幼児の好きなキャラクターを使って活動の導入を行うことで，画面に注目しやすくし，活動に誘うようにした。
保護者	・事前に家庭の環境を整えたり，活動内容に合わせた場所を設定したりするようになった。 ・教師に問い掛けられなくても我が子の様子を伝え，教師と共有するようになった。 ・教師の代わりとなって我が子に問い掛けたり，手本を示したりしてくれるようになった。	・あらかじめ活動内容を見せても，理解できず落ち着かない我が子に対して，どのように活動内容を伝えたらよいか分からなかった。 ・急にパソコンの前に連れて行き，我が子の気持ちを活動に向かせることが難しかった。 →教師とのメールでのやり取り等を通して，できるだけ活動場所の環境を改善してもらい，活動に取り組めるようにした。
教師	・家庭での幼児の様子や，保護者と幼児の関わり方を知ることができた。 ・個々の実態に合わせて活動の展開を工夫したり，内容を変えたりすることができた。 ・教材の提示の仕方や問い掛け方を工夫しながら取り組むことができた。	・その場にいないため，幼児の状況が分かりにくいことがあった。 →保護者に幼児の様子について問い掛けながら活動を進めた。 ・保護者との関係性を築く前に，家庭に活動場所を設定してもらったり，パソコンの準備をしてもらったりすることに対しては，やり取りの難しさを感じた。また，幼児の好きな活動が分からず，なかなか楽しめない幼児への関わりが難しかった。 →活動中のやり取りやメールでの振り返りを通して関係を築いたり，幼児の普段の様子や保護者との関わり方について尋ねたりした。

Ⅴ　オンラインでの学習をする上で大切なこと

1　画面に注目しやすい内容を設定し，環境を整える

画面に注目したり，活動に参加したりするためには，それぞれの幼児の興味・関心に合わせた教材や内容を用意することが重要であった。幼児の興味・関心については，入学前のアセスメントの情報に加え，保護者とのメールや活動中のやり取りを通して把握し，活動や教材に生かしていった。また，画面に注目しやすい環境を整えるため，使用する椅子や机を保護者とやり取りしながら調整したり，おもちゃを片付ける，テレビを消すなど，環境を整えたりしてもらいながら進めた。

2　家庭で日頃から楽しく活動できる内容を設定する

Web 会議システムを用いた活動を通して，保護者から「家だけでは思い付かない遊びを体験できた」等の感想をいただいた。このことから，幼児の家庭内での生活を豊かにするために，親子で取り組みやすく楽しめる遊びを，学校が提案することが大切であると考える。保護者が無理なく準備できる物を用いたり，取り組みやすい内容を設定したりすることで，家庭内での親子の関わりを豊かにし，幼児の興味・関心を広げることにつながると考える。

3　各家庭に応じた家庭生活支援に取り組む

幼児への関わり方を保護者と一緒に考えたり，教師が提案したりすることで，幼児が活動に対して前向きになったり，保護者が我が子に合わせて自主的に考えて接する姿が見られたりするようになった。また，活動終了後のメールのやり取りで，家庭で困っていることの相談を受けることも多かった。これらのことから，オンライン上のやり取りでも，教師と保護者が連携しながら，それぞれの家庭のニーズに合わせた支援を行っていくことが可能であり重要であると考える。オンラインの画面を通して，教師が幼児と保護者のやり取りを見ながら，保護者に具体的なアドバイスを伝えたり，一緒に改善策を考えたりしながら関わっていくことが大切だと考える。

＜オンラインでの学習　小学部１年生＞

オンラインでの学習の指導記録

小学部教諭　１年　加藤 敦，小林健吾，二宮綾香

Ⅰ　オンラインでの学習を始めるにあたって

本学級は，男子５名，女子１名の学級である。６名中５名は，本校幼稚部から就学した児童で，１名は，地域の療育機関から就学した児童である。児童の実態については，３～５語からなる文で話し，「いつ」，「どこ」，「誰」，「何」の質問に答えたり，自ら大人に質問をしたりする児童や，発声は不明瞭ではあるが，指差しや身振り，表情で要求や思いを伝えることができる児童，言葉や発声でのやり取りは難しいが身近な大人の手を引く等，行動で要求や思いを伝える児童がいる。また，興味・関心は，タブレット端末等を使い，動画を見たり，ゲーム等のアプリで遊んだりすることを楽しむ児童，粘土遊びや人形遊びなど物を使って遊ぶことが好きな児童，おもちゃ等には興味を示さず，トランポリンやブランコなど感覚的な遊びを楽しむ段階の児童など，実態は様々である。

休業期間中，すべての児童が，日中は週に２～５日程度，放課後等デイサービスを利用して過ごしていた。したがってどの児童も比較的，生活のリズムが大きく崩れることはなかった。一方で，一斉休業に伴い，３月は幼稚部の卒業式のみを実施，さらに４月に予定していた入学式も６月に延期となり，その間学校に登校したり，教師と児童，教師と保護者が直接学校で顔を合わせたりすることが一度もない状況でのオンラインでの授業の開始となった。そこで，本学級では，まずは担任と保護者との関係作りのためにオンラインでの保護者個別懇談を実施した。そして保護者から現在の児童の様子を聞き取り，実態把握をした上で，一人一人の児童に応じたオンラインでの授業のねらいと内容を計画し，教師と保護者で協力して実施した。なお，１名の児童（以下Ｆ児）については，地域の療育機関から本校に入学する児童のため，児童の実態と保護者の要望等を踏まえてオンラインでの授業は実施せず，教師が家庭を訪問し，直接児童と関わりながら保護者と協力して入学，登校に向けての指導を行った。

Ⅱ　オンラインでの取組のねらい

１　オンラインでの保護者個別懇談会のねらい

・オンラインでの保護者懇談会を通して，担任と保護者が互いを知り合う。
・現在の家庭の状況や保護者の思いや願いを知り，休業中の各家庭に応じた具体的で必要な指導や支援について，保護者と一緒に考える。
・今後の指導に生かすために，現在の児童の生活リズムや家庭での過ごし方，興味・関心を知る。

２　オンラインでの授業のねらい

・画面を介して教師が提示する物を見たり，教師の話を聞いたりする。
・教師の呼び掛けや働き掛けに気付き，身振りや声で返事をしたり，教師の質問に答えたり自分から質問したりするなどして，やり取りを楽しむ。
・新しい担任や教室について知ったり，興味をもったりして，小学生になったことが分かる。

Ⅲ　指導スケジュール

月 日	A 児	B 児	C 児	D 児	E 児	F 児
４月	上旬：教材の送付，中旬：各家庭と電話，メールでのやり取り					
５月 11～15 日	オンラインでの保護者個別懇談（各家庭 45 分程度）					保護者と電話でのやり取り

5月 18～22 日	オンラインでの授業①（個別） 1回 20 分程度	個別懇談（対面）
5月 21 日	教材の送付	家庭訪問 家庭生活支援
5月 25～29 日	オンラインでの授業②（個別） 1回 20 分程度	

※オンライン授業（個別）は1回当たり 20 分程度（①挨拶，②呼名，③絵本読み，④クイズ，工作など個々に応じた活動，⑤挨拶）とし，その後 10 分程度，保護者と担任で授業の振り返りを行う。

Ⅳ　指導の実際

日にち	5月 11 日～15 日	活動名	オンライン保護者懇談会（各家庭と個別の実施）
ねらい	保護者	・オンライン保護者懇談会を通して，担任と保護者が，顔合わせをする。 ・休業中の家庭の状況や保護者の思いや願いを知り，休業中の各家庭に応じた具体的で必要な指導や支援について，保護者と一緒に考える。	
内容	・接続方法，Web 会議システムの使い方を確認し，各家庭と学校をオンラインでつなぐ。 ・画面上で顔を合わせ，担任と保護者が互いに自己紹介をする。 ・休業中の児童の生活リズムや家庭での過ごし方，保護者の思いや考えを聞く。		
活動の様子	保護者	○学校と家庭の初めてのオンライン接続だったが，電話でのサポートをしながら各家庭問題なく接続することができた。 ○担任３名と初めて同時に顔を合わせた懇談だったが，リラックスした雰囲気の中で互いに自己紹介したり，話をしたりすることができた。 ○休業中の家庭での児童の様子や保護者が感じている不安，困っていることなどを学校と家庭で共有することができた。	
	児童	○担任と保護者がオンラインでやり取りをする様子に興味をもち，画面を見たり画面に向かって話し掛けようとしたりする児童がいた。（D 児）	
次回に向けて	・家庭の都合と児童がデイサービスを利用する日を踏まえ，次回オンライン授業をする日をメールにて日程調整する。 ・保護者から聞いた最近の児童の興味・関心，様子を踏まえて，オンライン授業で行う読み聞かせ等の活動内容と各家庭に郵送する教材について検討し準備をする。 ・オンラインでの授業における教師の役割分担（進行，画面操作，接続サポートなど）をし，事前にリハーサルを行う。		

日にち	5月 18 日～22 日	活動名	一緒に勉強しよう①
ねらい	児童	・画面を見て，保護者と一緒にオンラインでの授業に参加する。 ・新しい担任や小学部の生活について知り，興味や関心をもつ。 ・画面の教師に気付いて見たり，画面を介したやり取りに興味をもったりする。	
	保護者	・教師とオンラインでの授業における児童の様子について共有し，児童に応じた活動内容や，家庭での関わり方について教師と一緒に考える。	
指導内容	・画面を介して教師と一緒に挨拶をしたり，教師に名前を呼ばれて返事をしたりする。 ・画面に映る担任や，小学部玄関，1年生教室（自分の新しい教室）などの様子を見る。 ・教師の絵本の読み聞かせを見聞きしたり，教師が出すクイズに答えたりして，画面を介したやり取りを楽しむ。		
活動の様子	児童	○児童の顔写真を見せながら名前を呼び掛けたり，興味のある物（人形，イラストなど）や児童にとって身近な教師がする絵本の読み聞かせ，予定表を画面に映したりすると，画面の前に座って，注目したり，返事をしたりする様子が見られた。（A~E 児） ○Web 会議システムの機能を活用し，児童に注目させたい画面に切り替えながら活動を進めることで，児童が何を見るかが分かり，興味をもって画面に注目したり教師の質問に答えたりしていた。（A~E 児） ●２択クイズでは，「どっち。」などの言葉のみでの質問の理解が難しかった。（B 児，E 児） ●教師が画面に提示した物に対して，児童が何に興味をもって見ているのかを画面を介して把握することが難しかった。（B 児，E 児）	 写真１　朝の会の様子

＜オンラインでの学習　小学部１年生＞

		●テレビや室内の物などに興味が移り，画面を介したやり取りに集中できなかった。（A 児，D 児）	 写真２　活動の様子
	保護者	○児童の様子に合わせて教師の言葉掛け等を児童の隣で繰り返して言ったり，どこに注目すればよいかを指さしたりして伝えていた。 ●児童が画面の前から離れた際に，どの程度，言葉を掛ければよいか，戸惑う様子が見られた。（教師に遠慮する様子等が見られた。）	
次回に向けて	・保護者に，オンラインでの授業前に食事等の身の回りのことは済ませ，児童が気になるおもちゃ等は片付けてもらう。 ・活動後の保護者との振り返りを踏まえて，画面に映す教材と同じ物を事前に家庭に郵送したり，児童の実態に応じた視覚情報の提示や発問の仕方等を考えたりする。 ・活動中に，保護者にどのようなときに，どのタイミングで児童のサポートに入ってもらうか，教師側にどのような情報をリアルタイムで伝えてもらうかを検討し，事前にメール等で具体的に伝える。 ・児童の表情が見えるように，カメラの位置を画面の近くに配置してもらう。		

日にち	5 月 25 日～28 日	活動名	一緒に勉強しよう②
ねらい	児童	・画面を見て，保護者と一緒にオンラインでの授業に参加する。 ・画面に映る教師や教師が提示する物に気付いて見たり，画面を介したやり取りに興味をもったりする。	
	保護者	・教師とオンラインでの授業における児童の様子について共有し，児童に応じた活動内容や，家庭での関わり方について教師と一緒に考える。	
指導内容	・画面を介して教師と一緒に挨拶をしたり，教師に名前を呼ばれて返事をしたりする。 ・教師の絵本の読み聞かせを見聞きしたり，教師が出すクイズに答えたりして，画面を介したやり取りを楽しむ。 ・郵送した教材（パズル，工作の材料など）を使って，画面を介して一緒に行う。		
活動の様子	児童	○教師の質問に言葉で答えたり，保護者の促しを受けながら画面上の選択肢を選んで指さしで答えたりすることができた。（A 児，D 児） ○自ら教師に「先生は，今日，何を食べたの。」「先生はどれが好き。」「○○したよ。」「じゃんけんしよう。」など，質問や提案などをした。（A 児，D 児） ○事前に郵送した予定表を，画面を見ながら児童が手元で操作して確認することで，やることが分かって活動に参加することができた。（B 児，E 児） ○保護者と相談して考えた工作の活動に，きょうだい児も加わり，親子と画面を介した教師とで一緒に行うことができた。画面で作り方を説明する教師に注目して話を聞く様子や，楽しんで取り組む様子が見られた。（C 児）	
	保護者	○保護者もオンラインでの活動や活動中の教師とのやり取りに慣れてきて，必要に応じて児童に隣で働き掛けたり，様子を見守ったりするようになってきた。	

Ⅳ　オンライン学習の指導を通しての成果と課題

	成果	課題・改善点
児童	・個別の実施を前提とし，個々の児童の興味や関心に応じた教材等を用いて授業を実施することで，画面に注目したり，画面を介して教師が自分に働き掛けていることに気付いて応じたりすることができるようになった。 ・決まった時間に定期的に行うことで，オンラインでの授業を楽しみにする児童もおり，一日の生活リズムを作る一助となった。 ・オンラインでの授業を通して，新しい環境（新しい担任，友達，小学部玄関や教室など）について知るきっかけとなり，6 月の小学部入学・始業に当たり，見通しをもったり，落ち着いて入学式を迎えたりすることができた。	・画面を介した教師とのやり取りに気付いたり応じたりすることが難しい児童もいた。 →新しい担任と児童が関係作りをする上では，直接，対面での関わりが必要な児童もおり，児童の実態や家庭の状況に応じて実施した。 ・家庭での実施のため，周囲に興味のあるものがあると気持ちがそれてしまう児童もいた。 →保護者に，事前にオンラインでの授業のねらいや活動の流れを伝えることで，児童の実態に応じて児童が集中して取り組むことができるように，家庭内の環境を整えたり，必要に応じて児童の隣で支援をしたりしてもらった。

保護者	・オンラインでの保護者個別懇談で，担任と保護者が画面を介して顔を見ながら話をすることで，相互に親睦を深めることができた。 ・定期的に，オンラインでの授業や懇談をすることで，保護者が率直な思いや要望，休業中の家庭での過ごし方，不安や悩みなどについて担任や学校に直接伝えたり，情報交換をしたりすることができた。	・機器の操作や学習を展開するに当たり，保護者が児童の隣で，サポートをする必要があった。 →保護者がオンラインでの授業に同席できる時間帯に実施する必要がある。 ・家庭の状況によっては実施回数，時間などの制限がある。
教師	・保護者から直接，児童の現在の興味・関心，家庭での様子などの情報を得たり，画面を介して児童の様子を見たりすることができ，実態把握と，オンラインでの授業の指導計画や家庭への支援計画を考えることができた。 ・オンラインでの授業後に，毎回 10 分程度，保護者から児童の様子を聞き取りすることで，要望や授業の改善点などを保護者と共有し，次回の授業に活かすことができた。	・入学前で，担任と児童が直接関わったことがない状況でのオンラインでの授業であったため，実態把握が十分にできず，活動を設定することが難しい面もあった。

Ⅴ　オンラインでの学習をする上で大切なこと

１　児童の興味・関心を生かした教材を用いながら，見せ方や聞かせ方を工夫して取り組むこと

教師と児童がオンラインで，画面を介したやり取りや学習をするためには，画面を介して自分に働き掛ける教師に気付き，興味をもったり，児童が画面の向こうの教師へ働き掛けたい，伝えたいと思ったりするような教師と児童の関係性を構築することが重要である。さらに，児童が画面に注目したり，注目しながら話を聞いたりする力が必要になる。そうした力を付けていくためには，まずは，児童の興味や関心のある物や話題をきっかけにして，児童が注目したり，思わずやりたくなったりするような教材を用いたり，話し掛けたりすることが大切である。その中で，オンラインでの授業で使用するアプリの機能や特性などを生かして，教材を見せる角度や見せる時間など提示の仕方を工夫したり，児童が分かる言葉掛けや発問の仕方を工夫したりすることが重要である。

２　児童の実態に応じて学習のねらいや内容を精選し，児童の反応を見逃さずに取り組むこと

初めての試みであるオンラインでの授業では，児童の集中時間に合わせて，学習のねらいを絞り，学習内容を盛り込み過ぎず，取り組むことが大切である。対面での授業の雰囲気とは大きく異なり，教師が児童の様子や反応（表情，声，動き，集中の様子，疲労の様子など）を把握しにくい面もある。したがって，教師も画面から得られる限られた情報に注意を払いながら，教師の言葉掛けや発問に対する児童の反応や思考する速さを慎重に観察して，焦らずに児童の反応を待ったり，学習を進めたりすることが大切である。

３　保護者と協力し，児童の実態を把握したり，周囲の環境を整えて学習に取り組んだりすること

児童の実態によっては，オンラインでの学習をするに当たり，児童の隣で，画面の向こうの教師の働き掛けを児童に直接促したり，児童の意図や考え，思いを教師に伝えたりしながら，学習のサポートをする保護者の存在が必要である。その際には，教師の指導のねらいや学習内容，児童への支援の仕方，児童が学習に集中できるような環境の作り方などについて，事前に保護者にしっかりと伝えて，共通理解を図り，学習に臨むことが大切である。これは，家庭の状況等によっては，保護者自身の負担になることもあるが，一方で児童の実態や学習に取り組む様子を保護者と共通理解し，協働して児童の成長のために取り組むチャンスでもある。オンラインでの学習のねらいや教師の意図を伝え，保護者と相談し，協力しながら学習を進めていくことで，担任と保護者との関係作りにもつながる。

オンラインでの学習の指導記録

小学部　４年　教諭　間山響子，稲本純子，柿本将太

Ⅰ　オンラインでの学習を始めるにあたって

本学級には，男子５名，女子１名，計６名の児童が在籍している。前年度の学級担任全員が他地域に転勤したこと，今年度の学級担任３名のうち２名が今年度転勤・転任してきた教師であることから，保護者の不安感が強く，４月の上旬から電話でのやり取りをしたり，学級主任のみが家庭訪問を行ったりしながら，休業期間中の児童の様子や保護者の不安感などについて聞き取りをしていた。

児童のコミュニケーション面に関しては，単語や２，３語文の言葉で自分の要求を伝える児童や平仮名の 50 音表やタブレットの音声機能を活用して会話をする児童がいる。また，絵本やカレンダーなどを指さして，自分の伝えたいことを表現する児童もいる。教師からの質問に関しては，イラストを提示して「これは何ですか。」と尋ねられると，複数の選択肢から対応した文字を選んだり，言葉で答えたりすることができる。一方で，「今日の朝御飯は，何を食べましたか。」の質問には，答えることが難しい児童が多い。言葉だけのやり取りだけでなく，イラストや文字などを使って質問を提示することで，質問の意味が分かり，答えることができる児童がいる。また，童謡や歌遊びが好きで，教師の動きをまねして一緒に手遊びをしたり，歌を口ずさんだりすることを楽しむことができる児童がいる。

休業期間中は，６家庭のうち５家庭は，週に３～６日間放課後等デイサービスを利用していたことから生活習慣の乱れはなく過ごしていた。１家庭は，放課後等デイサービスの利用を控えていたため，ほぼ一日家で過ごしており，昼夜逆転している生活の状態であった。そこで，オンラインでの学習では，まずは，児童の興味・関心のあることを活用しながら担任と児童，保護者との関係作りをすること，児童の実態を把握することを目的とすることにした。また，家庭によっては，毎日 30 分程度，同じ時間に学習を設定して，生活習慣を整えることも併せて目的とすることにした。

Ⅱ　オンラインでの取組のねらい

・画面に注目し，教師を見たり，教師からの呼び掛けや問い掛けに答えたりする。
・教師の歌い掛けを聞いたり，動きをまねしたりしながら，歌の一部を歌ったり，体を動かしたりする。
・教師や友達の顔を見たり，やり取りをしたりすることで学校生活を楽しみにする。
・教師と保護者とで情報交換をしながら，保護者の新年度の学校生活への不安感を和らげる。

Ⅲ　指導スケジュール

月　日	A 児	B 児	C 児	D 児	E 児	F 児
５月 12，14 日	・個別での学習「Zoom をはじめよう」 →各家庭と時間を設定して，学校対家庭とのテストミーティング					
５月 14，21 日	・調理「焼きそばを作ろう」，絵本読み「よわむしモンスターズ」（のぶみ著　講談社），図画工作「あじさいを作ろう」，手遊び「ピクニック」，運動「縄跳びをしよう」，「風船で遊ぼう」，体操「エアロビクス」，学級の畑作り，朝の会を教師が実演している動画の DVD を送付する					
５月 22～29 日	・個別での学習「先生と一緒に勉強しよう」１回：20～40 分 →A 児（４回），B 児（５回），C 児（３回），D 児（９回），E 児（５回），F 児（５回）					
５月 25～28 日	・一斉での学習「みんなで朝の会をしよう」（自由参加）					
５月 29 日	・一斉での学習「４年生が始まるよ」（自由参加）					

Ⅳ　指導の実際

<table>
<tr><td>日にち</td><td>5月 12 日</td><td>活動名</td><td colspan="2">Zoom をはじめよう</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ねらい</td><td>児童</td><td colspan="3">・画面に映る教師や自分の姿を見たり，教師の話を聞いたりする。
・教師からの質問に，言葉や指さしで答える。</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="3">・自宅の機器を使って，Web 会議システムに接続したり，退出したりする。</td></tr>
<tr><td>指導内容</td><td colspan="4">・お互いに自己紹介をしたり，教師の質問に画面のイラストから選んで指さしたり，言葉にしたりして答える。
・家庭の学習環境，インターネットの接続環境などの確認をする。
・Web 会議システムへの接続，退出などの使い方を確認する。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動の様子</td><td>児童</td><td colspan="2">○画面に映る自分に気が付き，画面に自分の顔を近付けたり，口を開閉したりして遊んでいた。（A 児，D～F 児）
○教師から名前を呼ばれると，返事をしたり，問い掛けに答えたりする児童がいた（A児，B 児，E 児）。一方で，保護者の促しがあると答えることができる児童もいた。（C 児，D 児，F 児）
○無事に全家庭の接続ができた。
●タブレット端末やおもちゃを持っていたので画面に注目することが難しい児童がいた。（A 児，D 児，F 児）
●５分ほどで席を離れる児童がいた。（D 児）</td><td rowspan="2">
写真１　E 児活動写真</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="2">●教師からの質問に児童が答えないときに，保護者が教師の質問を繰り返して何度も児童に問い掛けることがあった。</td></tr>
<tr><td>次回に向けて</td><td colspan="4">・事前に，保護者に学習内容とねらい，関わり方についてメールで伝えて確認する。また，学習前には，おもちゃを片付けるなど学習環境を整えてから取り組む。
・言葉だけのやり取りが難しい児童がいたので，児童の興味・関心に応じて，手遊びや体操，プレゼンテーションソフトを活用したクイズなどを用意する。</td></tr>
</table>

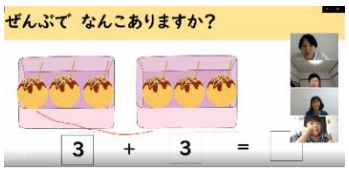
<table>
<tr><td>日にち</td><td>5月 26 日</td><td>活動名</td><td colspan="2">先生と一緒に勉強しよう</td></tr>
<tr><td rowspan="2">ねらい</td><td>児童</td><td colspan="3">・画面を見て，自分で文字を読んだり，数を数えたり，教師からの問い掛けに答えたりする。
・教師の絵本読みを聞き，ペープサートを操作したり，体を動かしたりする。</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="3">・児童が答えるまで待ったり，児童の様子を教師に伝えたりする。</td></tr>
<tr><td>指導内容</td><td colspan="4">・イラストを見て，単語を答えたり，数を数えたりする。
・教師の言葉を聞いて，絵本に出てくるペープサートを選んで操作したり，指定された動きをしたりする。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動の様子</td><td>児童</td><td colspan="2">○画面に映ったイラストを見て，イラストの名称を答えたり，数を数えたりすることができた。（A～F 児）
○教師の絵本読みを聞きながら，指定されたペープサートを選んで画面に見せたり，登場人物の名称を言ったりすることができた。（A 児，B 児，D～F 児）
●プレゼンテーションソフトを活用した，国語や算数のクイズでは教師の問い掛けに答えるなどのやり取りができるが，画面で顔を見ながらの言葉でのやり取りが難しいことが多かった。（C～F 児）</td><td rowspan="2"> 

写真２　D 児活動写真

写真３　E 児活動写真</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="2">○学習環境を整えたり，教師の問い掛けに児童が答えるまで待ったりすることができた。</td></tr>
<tr><td>次回に向けて</td><td colspan="4">・国語・算数のクイズの場面だけでなく，教師の顔を見ながらの手遊びや運動や体操などを行い，教師とやり取りする場面を取り入れるようにする。</td></tr>
</table>

＜オンラインでの学習　小学部４年生＞

<table>
<tr><td>日にち</td><td colspan="2">５月 28 日</td><td>活動名</td><td>朝の会をしよう</td></tr>
<tr><td rowspan="2"></td><td>児童</td><td colspan="3">・画面に映る教師や友達に気付いて，相手を見たり，相手に言葉を掛けたりする。
・自分の役割が分かり，挨拶をしたり，返事をしたりする。</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="3">・児童と一緒に，挨拶をしたり，返事をしたりする。</td></tr>
<tr><td>指導内容</td><td colspan="4">・日付，天気，名前呼びをする。
・画面の文字を読みながら挨拶をしたり，イラストを選んだりする。
・教師の歌い掛けを聞いたり，手の動きをまねしたりしながら手遊びをする。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">活動の様子</td><td>児童</td><td colspan="2">〇画面に友達が映ると，指さしをしたり，ほほ笑んだりする児童がいた。
〇保護者と一緒に挨拶の文字を読んだり，教師に名前を呼ばれると返事をしたりすることができた。
〇教師の手遊び歌を聞いたり，動きを見たりしながら，教師の動きをまねて体を動かすことができた。
●名前呼びなど，画面に友達がアップになっているときに，視線がそれる児童が多かった。</td><td rowspan="2">
写真４　朝の会写真</td></tr>
<tr><td>保護者</td><td colspan="2">〇児童の役割のときに，児童と一緒に挨拶をしたり，活動の内容を促したりすることができた。</td></tr>
</table>

Ⅳ　オンライン学習の指導を通しての成果と課題

	〇成果	●課題・改善点
児童	・放課後等デイサービスを利用していない児童にとっては，毎日学習する時間になり，生活リズムを整えることができた。 ・休業期間中に，学習に向かう機会ができた。 ・学校再開に向けて，少しずつ教師や友達とのつながりを作り，準備することができた。 ・学習の回数を重ねると，自分からパソコンの前に座って準備したり，集中して画面を見たりすることが増えた。	・毎日放課後等デイサービスを利用している児童にとっては，負担感があったので，実施回数は減らして設定した。 ・自分の生活する場所で学習するため，学習に向かう環境を整えることが必要だった。 ・画面の相手とやり取りする経験がなく，教師の問い掛けに答えられないことも多くあった。保護者に協力してもらい，繰り返し問い掛けたり，言い直したりする必要があった。
保護者	・児童の学習に向かう姿勢や学習内容の理解について知ることができてよかった。 ・年度が変わり，初めて会った教師の顔を見ながらやり取りしたり，教師が児童と学習する場面を隣で見たりすることで，信頼関係を築くことができた。 ・休業期間中，学校とつながりを感じられてよかった。安心感をもつことができた。	・保護者ができていると思っていることに関しては，たくさん言葉掛けをしたり，やらせようと促したりする行動が増えるので，事前に教師が学習内容や学習のねらい，保護者の関わり方をメールで伝えて共有してから学習を行うようにした。また，児童との学習後，教師と学習の様子を振り返ったり，最近の家での様子などを聞き取ったりした。
教師	・児童一人一人に応じて課題を設定して実施したことで，毎回改善しながら学習を行い，児童の認知面での実態把握ができた ・一人の児童の学習の様子を，担任全員で見ることができた。複数の視点で，児童の現在の課題や次の学習内容について話しながら進めることができた。 ・初めて会う児童や保護者だったので，顔を見ながらやり取りをし，関係作りをすることができてよかった。	・児童にとって学習に集中できる環境を作っていくことが難しかった。家の構造や児童の生活している場所や生活の流れが分からない中で，可能な範囲で家庭にお願いしながら進めた。 ・画面上でできること，できないことがよく分かった。直接的な指導ができないため，学習の中でのできないことができるようになるという指導内容は難しいと感じた。

Ⅴ　オンラインでの学習をする上で大切なこと

１　自分の生活の場で学習環境を整えること

家庭で学習することは想像以上に難しいことである。事前に保護者に協力してもらいながら，家での生活状況や児童の生活リズムを確認し，児童の日常生活の中で学習に取り組むことができる環境を整えることが重要である。何の機器を使用するか，椅子に座るのか座らないのか，遊び道具は片付けることができるか，事前の学習予告はいつするのか，などを丁寧に確認しながら児童が学習に向かう姿勢を作ることが大切である。

２　物を介したやり取りから始めること

児童にとって，普段から関わりのある相手であれば，画面を通しても知っている顔や声だと認識することができるが，今回は年度初めの休業期間中ということもあり，直接関わったことのない相手と画面越しでやり取りすることは，本当に難しいことであった。そこで，教師からの問い掛けに答えたり，教師の動きをまねしたりするためには，児童の実態に応じて，児童が知っているキャラクターや言葉，数字などを活用してプレゼンテーションソフトで教材を提示したり，絵本読みではペープサートを用いたりすることが効果的であった。画面上で，同じ物を見たり，物を操作しながら同じ動きをしたりすることで，少しずつ相手の顔や声を知り，相手からの働き掛けに応じることができるようになる。

３　保護者と連携しながら進めること

オンラインでの学習は，教師が児童に直接指導することができないので，児童の隣にいる保護者に協力してもらいながら学習を進める必要がある。教師と保護者とで学習のねらいを踏まえた関わりをするために，事前に保護者に学習のねらい，学習の内容，保護者の関わり方をメールで連絡して伝えておくことが大切であった。また，学習後に，保護者から児童の学習の様子や次回の学習への要望を聞いたり，教師の感じた児童の様子や学習の改善点を話したりし，保護者と教師が一緒に振り返りをすることがオンラインでの学習の授業改善につながり大切であった。

きらきらコンサートの取組について

小学部教諭　５年１組　河場哲史

Ⅰ　きらきらコンサートの概要

本校では，「幼児・児童が，プロの演奏家による歌やピアノ，打楽器の演奏を聴いたり，演奏に参加したりすることを通して，生演奏の迫力に触れたり，楽しんだりすること」を，主なねらいとして，「きらきらコンサート」と題して，本校を会場に，年一回のコンサートを実施している。2012 年（平成 24 年）から 2014 年（平成 26 年）までの三年間は，ジャズピアニストの谷川賢作さんの単独コンサートという形式で，2015 年（平成 27 年）から 2019 年（令和元年）の５年間は，谷川さんに加えてパーカッショニストの安井希久子さんの２名によるコンサートの形式で実施している。この「きらきらコンサート」では，演奏を聴かせていただくだけでなく，実際に楽器に触れさせていただき，一緒に音を奏でたり，幼児・児童になじみのある曲を一緒に演奏したり，好きな絵本の読み聞かせに演奏を合わせていただいたり，教育実習生が演奏に参加したりなど，様々な取り組みを行ってきた。昨年度は，児童が自作した曲を一緒に演奏しながら披露する等，本校の幼児・児童にとって，音楽についての興味や関心を深める重要な行事となっている。

Ⅱ　活動内容

今年度は，感染症予防の観点から，一堂に会してのコンサートを実施することが不可能となったが，谷川さんと安井さんの演奏を幼児・児童に届けることはできないかと検討を重ね，演奏を録画した動画を学級ごとに鑑賞させていただく形式で実施した。そこで，「幼児・児童が，プロの演奏家の演奏を，友達や教師と一緒に楽しむこと」，「演奏の視聴を通して，曲や楽器等についての関心を広げること」の２点をねらいとすることとした。併せて，谷川さんと安井さんとの距離が離れていても，つながっていることを幼児・児童に実感してもらいたいと考え，Web 会議システムを使用しての開会式を設定することとした。演奏をお願いするにあたっての選曲については，事前に教師に幼児・児童の好きな曲や絵本などをアンケートで聞き取り，それらの中から谷川さん，安井さんと相談して決定した。具体的な活動内容は表１のとおりである。またコンサート当日に向けて，各学級で事前に学習を行いやすくするために，担当の分掌部で演奏曲の音源，歌詞カード，谷川さんと安井さんの紹介スライド，演奏曲を紹介するためのイラストと文字のスライドを用意し，自由に使用できるようにした。

表１　今年度の活動内容

	開会式（Web 会議システム）	演奏などの動画（８本）
活　動	①谷川さんから一言 （当日はコメントだけでなく厚意で楽器紹介や簡単な演奏を披露していただいた。） ②校長先生の話 ③児童代表お礼の言葉 **写真１　お礼の言葉を述べる小５児童**	・「とんとんとんとんとんひげじいさん」･･･本校からのリクエスト曲 ・「おばけなんてないさ」･･･本校からのリクエスト曲 ・「きゅうしょく」･･･谷川さんのオリジナル曲 ・「くじら」･･･谷川さんのオリジナル曲 ・「おべんとうバス」･･･教師が絵本の読み聞かせを行った動画に演奏動画を合わせて，安井さんに編集をしていただいたもの ・「校歌」･･･通常の演奏，ボサノバ風の演奏の２種類を用意していただいた。通常の演奏には教師の歌う動画を合わせて，教師が編集したものを用意した。 ・「安井さんのビデオメッセージ」･･･都合により開会式に参加できなかった安井さんから提供していただいたもの

※活動で使用した曲や絵本の作詞者と作曲者については別紙__参照

開会式には，Web 会議システムを使用して全学級が参加し，動画視聴は学級ごとに実施し，それぞれの幼児・児童の実態に合わせて，八本の動画の中から選択して視聴した。

Ⅲ　幼児・児童の様子

１　幼稚部

開会式では，概ね谷川さんの演奏を楽しんだり，校長や友達の話をよく聞いたりすることができていた。椅子に座ることが難しい幼児もいたが，教室のそれぞれの場所からテレビ画面を見ることがで

きた。動画視聴では，画面をよく注目していた。知っている歌がたくさんあって楽しめていた。年長の学級は，すべての映像を見ることができ，リクエストも含め合計で１時間程度楽しむことができた。学級でも実際に使用される打楽器等を用意したことで，映像を見ながら音を鳴らして楽しんでいた。

写真２　ひよこ組の様子

写真３　りす組の様子

写真４　うさぎ組の様子

２　小学部

低学年は，開会式では，谷川さんの働き掛けに，手を挙げて話したいことを表したり，登場する楽器を見て，「すごいね。」と言ったり笑顔を見せたりして喜んでいた様子が見られた反面，開会式を長く感じて集中が途切れたり，途中で音声が途切れたことから怒ったりする児童もいた。動画視聴では，リラックスしながら，画面によく注目して見ていた。視聴中に知っている曲を口ずさんだり，体を揺らしたりダンスを踊ったりして楽しむことができた。また，曲のテンポに合わせて「速く。」や「次はゆっくり。」など，楽しそうに話をする様子も見られた。一通り見終わった後に「もう１回見たい。」との声が上がったので，リクエストがあった曲をアンコールとして視聴した学級もあった。また，演奏中の手元をよく注目して見ていた児童もいた。

高学年は，開会式では，楽器の音が途切れることもあったが，谷川さんをよく見ていた。動画視聴では，演奏している楽器がアップになったり，キャラクターが動いたりするところをよく見ていた。また，知っている歌を口ずさむ児童，体を揺らして楽しむ児童が多かった。テンポの変化や，トントントントンなどの歌詞の変化を楽しんで，まねして歌っている児童もいた。「おべんとうバス」や「校歌」では，学級の担任や知っている教師を見付けて，名前を呼んだり，一緒に歌ったりしていた。棚を配置し，空間を狭くしたことで，立ったり歩いたりする児童もテレビ画面に注目することができた学級もあった。

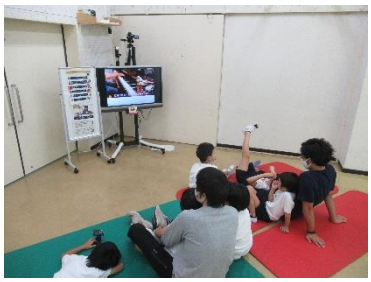


写真５　小学部１年生の様子

写真６　小学部５年生の様子

写真７　小学部６年生の様子

Ⅳ　まとめ

今年度の「きらきらコンサート」の成果と課題を次に述べる。

１　成果

視聴しやすい広さや，視聴する体勢などの環境を整えることで集中しやすくし，幼児・児童にとってなじみがあり大好きな曲であれば，動画の視聴を繰り返し楽しめることが明らかになった。また映像を作成する際に，演奏している手元や楽器がアップになったり，キャラクターが動いたり，テンポや歌詞が変わったりするところをよく観たり聴いたりする傾向があることも分かってきた。学級の担任や知っている教師を見付けて，名前を呼んだり，一緒に歌ったりしていたことから，知っている人が登場することも有効な手段であると言える。実際に使用される打楽器等を用意したことで，映像を見ながら音を鳴らして楽しんでいたことから，視聴しながらの楽器演奏も楽しく活動を進めて行く上で効果的であった。

２　課題

幼児や低学年の児童にとっては，集中したり落ち着いて視聴したりするためには，音声の安定が重要なポイントであるので，接続の安定や音の大小などの機器の調整を丁寧に確認しながら進める必要があると考えられる。

交流及び共同学習の取組について

小学部　６年１組　教諭　久野智宏

Ⅰ　交流及び共同学習の概要

小学部では平成 11 年度から，横須賀市立 A 小学校と交流及び共同学習に取り組んでいる。A 小学校との交流及び共同学習は，A 小学校の６年生の中から，交流学級が決められ，一つの学級を六つのグループに分け，本校の各学年の児童と交流をしている。本校の児童は，交流及び共同学習を通して，A 小学校の児童について知り，関わりを通して社会性を養うことをねらいとしている。A 小学校は，交流及び共同学習を「総合的な学習の時間」に位置付け，本校の児童と活動する中で，障害児とのコミュニケーションの仕方や遊び方などについて学ぶ機会としている。

昨年度は，５回の交流及び共同学習に取り組んだ。両校は事前準備として，児童の名前と顔写真，好きな物が示された自己紹介カードを作成し，交換した。本校では，各学級で教室内に自己紹介カードを掲示し，A 小学校の児童について事前に知る機会を設けた。また，本校の交流及び共同学習の担当教師が，A 小学校で出前授業を行い，本校の概要や障害理解などについて伝える機会があった。

交流活動では，本校と A 小学校の児童が交互に相手校を訪問し，運動や工作，簡単なゲームなどを一緒に行った。A 小学校に本校の児童が訪問した際には，A 小学校の児童がプログラミングした簡単なゲームをする学級もあった。こうした活動を通して，本校の児童は，A 小学校の児童の誘い掛けを受け入れ，少しずつ，様々な活動に参加するとともに，いろいろな関わりを経験することができるようになってきた。A 小学校の児童にとっては，本校の児童との関わりを通して，本校の児童と一緒に楽しめる活動を計画して一緒に楽しんだり，一人一人が分かる方法で関わろうとしたり，積極的に関わろうとするようになってきた。

今年度は，感染症予防の観点から，従来の直接的な交流活動を実施することが難しかった。そうした状況であっても，児童一人一人が，相手のことを知り，自分のことを表現したり，相手の働き掛けを受け入れたりする経験を積むことができるように，従来の活動内容を変更して取り組む必要があった。そこで，Web 会議システムを活用して，間接的な交流活動に取り組んだ。間接的な交流活動では，必要な機材の関係から，A 小学校児童を本校の特別教室に招き，各学級と Web 会議システムを介してつながり，活動に取り組むこととした。

Ⅱ　活動内容

表１　今年度の活動内容

	１回目（９月 14 日）	２回目（11 月 13 日）
活動	１　始めの挨拶 ２　手遊び ３　体操 （「パプリカ」作詞作曲　米津玄師） ４　お知らせ A 小学校児童の発表（ダンス・劇） ５　終わりの挨拶 【活動場所】 各学年の教室，第一プレイルーム	１　自己紹介 ２　ダンス「パプリカ」 「くりはま体操（作詞作曲　工藤久美）」 ３　A 小学校児童の発表 小１：クイズとお話（紙芝居） 小２：指人形 小３：ダンスと劇 小４：クイズと紙芝居 小５：絵尻取りと読み聞かせ 小６：紙芝居 【活動場所】 各学年の教室，会議室等の特別教室（６か所）

Ⅲ　児童の様子

初回の交流は，小学部チャンネルにＡ小学校の児童も参加した。画面にＡ小学校の児童が映ると，教室に掲示してある自己紹介カードを見て顔と名前を確認し，画面に映っていないと「○○ちゃん，いないね。」と言葉にする児童がいた。Ａ小学校の児童は，劇を発表したが，音声が聞こえにくかったことで，画面を見続けることが難しい児童が多かった。しかし，Ａ小学校の児童が，ダンスを披露すると，再び画面に視線を向けたり，席に戻ったりする児童もいた。

２回目の交流では，各学年に分かれて交流を行った。Web 会議システムを予定より早い時間から接続し，自由に手を振ったり，画面越しに言葉を掛け合ったりする時間を設けた。自己紹介では，画面に視線を向け，Ａ小学校児童の自己紹介を聞き，相手の名前を繰り返し言う様子が見られた。本校児童が自己紹介をする際には，カメラに向かって自己紹介カードを見せたり，教師と一緒に自分の名前を言ったりすることができた。Ａ小学校の児童が各学年の実態に応じて企画した発表では，絵本の読み聞かせ等，画面に映りやすく，内容が分かりやすいものが多かったため，画面に視線を向ける児童が多かった。

写真１　初回の交流の様子

写真２　絵本の読み聞かせ

写真３　自己紹介

Ⅳ　まとめ

１　成果

２回目の交流では，両校の児童が画面越しに互いに手を振り合う等，Web 会議システム上で自由にやり取りする時間を設けたことで，相手の存在を意識して，自己紹介をすることができた。Ａ小学校の児童の発表は，本校の児童にとって親しみのある内容が多く，じっと画面を見ていたり，Ａ小学校の児童の言葉掛けに対して，言葉や身振りで答えたりする児童がいた。相手と自由にやり取りする時間があったことで，画面越しでも自分の働き掛けが相手に伝わり，反応が返ってくることを実感し，画面に視線を向けやすくなったと考えられる。また，Ａ小学校の児童が行った発表の多くは，紙芝居や絵本の読み聞かせなど，視覚的に見て，内容の分かりやすいものが多かった。Web 会議システム上で，視覚的に見て内容が分かり，相手とのやり取りを伴うものが教材として適していると考えられる。

２　課題

オンラインでの交流活動では，相手の細かな表情や声色の変化，体の動きなどが分かりにくく，相手との距離感や関係性の間で生じる間合いなどに気付きにくく，相手の反応を伺いながらやり取りをすることが難しかった。そのため，両校の児童にとって，互いを知り，関わり合うという点では制約があった。Ａ小学校の児童が，呼び掛けても，画面越しであるため，本校の児童が応答することは難しく，Ａ小学校の児童からの一方的な働き掛けが多かった。Web 会議システム上では，相手からの視線の向きや相手との距離感など，自分が働き掛けられているという実感をもてる手掛かりが少ないため，やり取りが成立しづらかったと考えられる。また，働き掛ける側も相手から反応が返ってこないので，自分の働き掛けが相手に伝わったという実感を抱くことも難しかった。Web 会議システム上で交流活動を行う際には，直接的な交流活動と同様に自分の働き掛けが相手に伝わったという実感が伴うように，相手の反応を表した表情の描かれたイラストなど，コミュニケーションを視覚的に補助する教材を用意したり，双方向のやり取りが伴うような活動を設定したりすることが必要と考えられる。

＜小学部チャンネルの取組＞

小学部チャンネルの取組について

小学部教諭　５年１組　河場哲史

Ⅰ　小学部チャンネルの概要

本校小学部では，児童が一堂に会し互いのことをよく知る機会とすること，人前での挨拶や司会進行や発表等を経験する機会とすることなどをねらいとして，平成 29 年度より，学部集会を月１回の年８回程度実施してきた。これらの活動を通して，児童が友達や教師に関心をもったり，司会や挨拶などの役割を担ったり，自分たちの学習の成果を発表したりすることができるようになってきた。

今年度は，感染症予防の観点から，他学級と合同で活動することができず，小学部児童が一堂に会しての学部集会を実施することが不可能となった。そこで，他学級の児童や教師と間接的にでも関わったり，互いの様子を確認し合ったり，日頃の学習の成果を発表したりする機会を設定できないかと考え，一斉休業期間中のオンラインでの授業でも使用した Web 会議システムを活用し，学部集会の新たな形として小学部チャンネルを実施することとした。３か月の休業期間と併せて，学校再開後も他学級の児童同士の関わる機会をもたせることが難しく，新たな取組であることなどから，「他学年の友達や教師について知ること」，「活動内容を理解し，学級の友達や教師と関わりながら活動に参加すること」の２点を学部全体のねらいとして設定した。

Ⅱ　活動内容

表１　今年度の活動内容

	１回目（7/16）	２回目（9/14）	３回目（10/2）	４回目（11/18）	５回目（12/17）
担当	６年生	６年生	５年生	４年生	６年生
活動	１始めの挨拶 ２集まりの歌 ３転入生と１年生の紹介 ４終わりの挨拶	１始めの挨拶 ２集まりの歌 ３ダンス「パプリカ」 ４発表（交流校） ５終わりの挨拶 （A 小学校６年生との交流及び共同学習として実施）	１始めの挨拶 ２集まりの歌 ３ダンス「パプリカ」（６年生映像） ４発表「きらきらぼし」（５年生） ５終わりの挨拶	１始めの挨拶 ２集まりの歌 ３ダンス「パプリカ」（３年生映像） ４研修生の紹介 絵本読み「おおきなかぶ」（教員） ５終わりの挨拶	１始めの挨拶 ２集まりの歌 ３手遊び「やきいもグーチーパー」（教師作成映像） ４研修生の紹介 発表「修学旅行」（６年生） ５終わりの挨拶

※活動で使用した曲や絵本の作詞者と作曲者については別紙__参照

小学部チャンネル実施後に，毎回，各学級で評価を行い，学部会や学級主任会において，学部全体で反省点や次時への改善点を共通理解しながら活動を進めていった。

Ⅲ　児童の様子と次時へ向けての改善のポイント

１回目の活動では休業期間中に Web 会議システムに慣れていたことから，画面に注目できたり映っている友達に気付いて呼名をしたり，司会等の役割に集中して取り組めたりしたといった様子が見られた反面，学年によっては画面に集中できずに注意がそれてしまったり，興味をもてず，自分の席を離れて立ち歩いてしまったりする児童の様子も見られた。そこで次回に向けて，次の５点を確認した。

- 児童の集中時間を考え，活動時間を 30 分程度にすること。
- 活動に目的意識をもたせるために，手遊びや体操やダンス，絵本の読み聞かせや季節の歌，パネルシアターなどの興味のある楽しみな活動を盛り込むこと。
- 活動にメリハリを付けるために，動的な活動と静的な活動を交互にバランスよく配置すること。
- それぞれの活動の始まりと終わりを明確に意識できるように，それらを視覚的に分かりやすく提示すること。
- 画面越しでのやり取りを，具体物を操作することでより実感しやすくするために，学年を表示するうちわの教材等を進行する係の児童や教師と，各学級の児童の双方に準備すること。

２回目の活動では表１のとおり，A 小学校６年生との交流及び共同学習として実施した。小学部チャンネルが２回目ということもあり，前回よりも落ち着いて参加できた児童が多かった。今回から取り入れたダンス「パプリカ」は，児童にとって興味・関心が高く，なじみがあって好きな活動であるため，積極的に参加したり楽しめたりした学年が多かった。しかし，ダンスの前半の音が聞き取りにくかったり，分割画面であったために，手本の児童のダンスが見えにくかったり，手本のダンスを踊っている児

童にとって，自分が全体に対してどのように映っているのかが分かりにくかったりしたという反省があがった。音量の調整や画面の操作，手本のダンスの見せ方などに課題が残った。そこで次回に向けて，次の２点を確認した。

・次回もダンス「パプリカ」を行うが，事前に録画した物に歌詞を入れ，画面共有で視聴すること。 ・画面の切り替えなどのパソコンの操作を教員が行うこと。

３回目の活動では，今までの積み重ねもあり，画面をよく見て，知っている教師や友達に手を振ったり，画面越しに呼び掛けられると返事をしたりする児童の姿が見られた。また，録画した歌詞付きのダンス映像を流したので，画面に映る児童の動きをまねたり，歌詞を口ずさんだりする様子が見られた。発表「きらきらぼし」も動画を上映した結果，画面に集中してよく見ていた。併せて，発表を担当した学年も，当日が発表の本番といった過度の緊張感もなく，自分たちの合奏を楽しみながら視聴することができた。司会等の役割を担った児童は，教師と一緒に集まりの歌を歌ったり，カメラに向かって呼び掛けたりするなど，自分の役割を理解して最後まで取り組むことができたが，マイクの収音等の関係で，自分の言葉が画面越しの相手に十分に届かず，本人としては，懸命に伝えているが，教師が，何度かやり直しを求めざるを得ない場面があったことが反省としてあげられた。そこで次回に向けて，次の２点を確認した。

・児童一人一人の発信したことが，相手に伝わっているということを感じることができるように，教師が児童の表現を受け止めながら「～君が，手を振っているよ。」等，他学級の児童や教師の応答や様子を伝えること。 ・画面越しであっても，他学級の児童や教師との一体感を得ることができるように，教師が絵本の読み聞かせをしている動画を視聴しながら，声を出したり，体を動かしたりするなど新たな活動に挑戦すること。

４回目の活動では，映像に注目するとともに，画面に映る他学級の友達や教師に手を振ったり，言葉を掛けたりする様子が増えた。また，「おおきなかぶ」の読み聞かせや演劇をしている映像を視聴することを楽しむとともに，教師や友達と一緒に体を動かしたり，掛け声を掛け合ったりする活動に取り組み，内容を理解して楽しむ様子が増えてきた一方で，活動そのものに集中できない様子が見られる児童も出てきた。併せて，ダンス「パプリカ」を繰り返し行ってきたことで，児童によっては興味が薄れている様子が見られるようになってきた。そこで次回に向けて，次の３点を確認した。

・活動により集中することができるように，進行を教師が行うこと。 ・季節の手遊び歌「やきいもグーチーパー」を教師が歌ったり，手遊びをしたりしている映像を用いた活動を行うこと。 ・上級生の生活に興味をもったり，憧れの気持ちを抱いたりすることができるように，小学部６年生に修学旅行の思い出を発表してもらうこと。

５回目の活動では，画面に映る他学級の友達や教師に呼名をしたり，手を振ったり，言葉を掛けたりする様子が更に増えてきた。少し早めに接続することで落ち着いたり期待感をもったりして参加できる児童も増えてきた。手遊び歌「やきいもグーチーパー」では，画面を見ながら歌を口ずさんで動きをまねしたり，じゃんけんに勝つようにグーチョキパーをして楽しむ児童がいたりした。修学旅行に関しては，関心の高さもあり集中して見入っている児童の姿もあった。全体を通して，回を重ねるごとに画面越しでも友達や教師との関わりややり取りが増えてきている。一方で，Web 会議システムの難しさとして，マイクを基本的にミュートにしていることなどから，特にスポットを当てた画面では相手の反応が確認しにくいという課題は残った。そこで次回に向けて，次の点を確認した。

・教師が進行をする場合，拠点となる教室で，児童と一緒に司会をすること。

Ⅳ　まとめ

今年度の５回の小学部チャンネルの成果と課題を次に述べる。

１　成果

音量の調整や見やすさを考慮した画面の切り替えなどの環境を整えて集中しやすくし，児童にとってなじみがあり分かりやすく繰り返しや動きの面白さが伝わる映像や，興味・関心の高いテーマ（今年度は修学旅行）を用いることで，画面越しであっても相手に意識を向けたり，働き掛けに反応したり，自分から働き掛けたりすることができるようになることが，今年度の実践より明らかになった。

２　課題

相手の反応を確認しながら活動を進行していくことの難しさが改善されていない。教師の児童への働き掛け方，情報機器の取り扱い方や，活動内容に合わせた使い方の工夫など，様々な観点から再検討する必要があると考えられる。

Ⅴ　オンラインでの取組のまとめ

１　オンラインでの学習をする上で，大切なこと

各学級の実践を振り返り，学校と家庭の間で，オンラインでの学習をする上で大切なことを，五つの項目に整理した。

（１）教師と幼児児童の関係作りから始めること

画面を介したオンラインでの学習をする上では，幼児児童が，画面を介して働き掛ける教師の存在に気付き，興味をもつこと，そして，その教師と画面を介してやり取りをしようとすることが必要である。そのためには，教師と幼児児童との関係性が重要である。今回は，年度が移行し，新しい担任や環境になる時期に一斉休業になったことにより，特に，担任と幼児児童とが直接関わる機会がなく，その中でのオンラインでの授業が開始されたため，どの学級も，教師と子供との関係作りが大変難しかった。そこで，以下のような方法で，教師と幼児児童の関係作りを行った。

ア）事前に教師と保護者での面談を実施し，まず，保護者との関係性を築くこと

Web 会議システムを活用した授業を行う前に，どの学級も保護者と画面を介しての面談を行った。担任紹介をしたり，保護者の声に耳を傾け，思いをしっかりと受け止めて，家庭での最近の子供たちの様子を聞き取ったりして，まず，保護者との関係作りから始めた。そうすることで，子供との画面を介した学習をするときには，子供たちが，自分の身近な人（保護者）が，画面上で，やり取りをする相手（教師）に興味をもったり，保護者と教師が何気なくやり取りをしている様子や雰囲気に，安心して学習に取り組んだりすることができたと考える。

イ）幼児児童との関わりのある教師がきっかけとなって関わりを広げる

幼児児童にとって，「画面を介して自分に話し掛ける人」が知っている人や，関わったことがある人であれば，聞き慣れた声で語り掛けられることに安心感を抱いたり，画面を介しても，自分の分かる言葉で教師とやり取りができる面白さを感じたりすることができるのではないかと考える。学級によっては，昨年度から持ち上がった教師もいたため，その教師が，T1 となって授業を進め，画面上での子供たちの様子をじっくりと見て，実態把握を行ったり，働き掛けたりしながら，オンラインでの幼児児童との関わりを広げた。そして，幼児児童が，少しずつ画面上での学習に慣れてきたところで，新しい担任とのやり取りを始め，担任それぞれとの関わりも広げながら，関係作りを行うことが多かった。

（２）幼児児童の実態や興味・関心を把握し，オンラインでの活動・学習を考えること

ア）オンラインでの活動・学習を実施する目的とねらいについて

今回のオンラインでの取組では，幼稚部から小学部までの子供たちを対象としていたため，生活年齢や実態，発達段階によって，オンラインでの授業で，できることや可能なことが異なっていた。そのため，同じオンラインでの授業であっても，幼稚部と小学部では，その目的や，やり方，教師が指導及び支援する対象も異なっていた。幼稚部段階の目的は，「家庭での幼児の様子の実態把握」，「家庭での親子活動を教師がオンラインでサポートをする」「保護者への助言・支援（家庭生活支援）」ということが挙げられる。小学部段階では，「家庭での児童の様子の実態把握」「教師と児童（個別・集団）との学習を行う」ということであり，それぞれの目的に応じて，教師は，授業の中でのねらいを設定したり，活動内容を組み立てたりする必要があった。

また，小学部１年生の実践で挙げられたように，Web 会議システムを活用した授業は，対面での授業とは異なり，教師が幼児児童の様子や反応を把握できる範囲が限定され，デジタルの映像や音の影響によって，その場の雰囲気が伝わりづらいという課題があった。そのため，対面での授業以

上に，ねらいを絞って，学習内容を精選することで，教師が画面を介して子供を見る視点や評価の視点が焦点化され，授業改善に生かしやすくなるのではないかと考えられる。

イ）活動内容について

活動内容を設定するに当たって，子供たちの興味・関心を知るということが重要であった。今回は，年度初めの５月から実施した取組であったため，アセスメントの結果や前年度の担任からの聞き取り，保護者からの情報を基にしたり，画面を介して子供たちと関わり，指導を積み重ねたりしながら，幼児児童の好きなことや得意なことを把握し，幼児児童が思わずやりたいと思う活動の設定や教材作りを行った。そのためには，子供の強みや，興味・関心，学習課題を上手く組み合わせて，学習内容を考えることが大切であった。また，提示する教材が，子供たちの興味・関心を生かしたもの，既習した題材等を生かした馴染みのある教材であることで，子供たちの視線が画面に向かい，そこで働き掛ける教師の存在に気付き，やり取りを生み出すきっかけにもなったと考える。

ウ）活動時間

対面の授業とは異なり，教師が直接，手にとって一緒に取り組んだり，教えたりすることができないため，活動時間は，子供たちが，おおよそ一人で画面に向かい教師とやり取りしながら取り組むことができる時間として，20 分程度で設定しているところが多かった。一方で，子供によっては，対面での授業とは異なり，タブレット端末やパソコン，テレビでの画面を介したやり取りだと，集中しすぎて疲労感が増してしまう可能性もあるため，そのための配慮が必要であった。

エ）参加人数

対面での授業と同様に，子供の実態やねらいに応じて，参加人数を決めることが大切である。例えば，個に応じた指導，活動を行う場合は，教師と一対一で授業をすることで，子供のペースに合わせたやり取りや，好きなこと，できることを生かした活動を行うことができる。また，小学部の学級の実態によっては，友達の顔が画面に映ることで注目し，より，教師や友達とのやり取りが広がってほしい，教育活動再開前には，学校や学級の友達のことを思い出し，登校に期待感をもってほしいというねらいから，学級の数名の子供たちで授業を行い，一斉の指導をするということもできた。

（３）Web 会議システムの特性を踏まえた見せ方，聞かせ方の工夫をすること

ア）見せ方の工夫

見せ方の工夫として，主に３点挙げる。１点目は，Web 会議システムの様々なアプリケーション機能を活用することである。子供たちが，授業を進める教師の話に注目できるように，子供側の画面をリモートで操作して，話をする教師の画面のみを拡大して映したり，朝の会などの教師とやり取りをする活動では，パワーポイント資料を画面に共有して映しながら進めたりするなど，様々なアプリケーション機能を活用して授業を行うことで，子供に分かりやすく伝えたり，働き掛けたりすることができた。

２点目は，様々な情報機器を活用するということである。幼児児童が，学習を行う家庭では，タブレット端末やパソコンの画面を，子供たちが見やすいようにテレビの大きな画面に映し出している家庭が多かった。そうすることで，子供たちの視線が正面を向きやすくなったり，大きな画面によって，教師や友達の様子が見やすくなったりするという点において効果的であった。また，教師が，授業を行う際には，パソコンに内蔵されているカメラのみを使うのではなく，タブレット端末や，パソコンに USB で接続できる Web カメラを用いることで，映像を配信する際に，教師の動きをカメラで追ったり，すぐに，カメラの向きを変えたりすることができるため，活動内容や見せた

い物に合わせて，情報機器を選定するということも大切であった。

３点目は，授業を行う教師の動きや表情を豊かに大きく表現するということである。対面での授業でも，日々，心掛けていることだが，画面を介したやり取りでは，接触を伴う関わりができないことや，教師の動きも画面を通すことで平面に見えてしまうということが難しい点であった。そのため，いつも以上に，動きや表情に変化や，強弱，緩急を付けて，大きく表現することが大切であった。

イ）聞かせ方の工夫

聞かせ方の工夫として大切なことは，実態に応じて子供が分かる言葉を用いて話し掛けることである。特に，言葉でのやり取りが難しい段階の子供に対しては，見せ方の工夫と併せて，働き掛けることが大切である。また，対面での授業と同様に，間の取り方を工夫したり，「いくよ。」「せーの。」などと期待感をもたせるような言葉を用いたりすることで，幼児児童が，自ら教師に語り掛けたり，教師の言葉を聞こうと耳を傾けたりする姿につながるのではないかと考えられる。

ウ）幼児児童の反応への対応

画面上でのやり取りは，通信環境により，映像や音声にタイムラグが生じ，幼児児童の様子に即座に反応することが難しかったり，教師の言葉が聞こえていなかったりすることがある。そのため，子供たちの様子や反応に目を配りながら，話す速さを調整したり，幼児児童の反応を待ったりしながら進めていくことが重要だった。また，集団での授業を行う場合，教師側の画面に参加する幼児児童全員の顔が映らないこともあり，全員の様子に目を配りながら授業を進行することが難しいという課題があった。そのため，授業を進める教師（T1），幼児児童の様子を観察しT1に伝える教師（T2）など，それぞれで役割分担をし，ティームティーチングで指導を進めることで，子供たちの様子や反応を見落とさずに学習を行うことができた。

エ）機器の設置の仕方等による工夫

オンラインでの授業を行う際には，使用するパソコンやタブレット端末のカメラの位置を，幼児児童の表情や，教材を操作する手元などの様子が映りやすい位置に設置することが子供の反応を捉えて進行する上で大切である。また，幼児児童は，画面に注目することが多いので，その視線の先（例えば，画面の上部）にカメラを設置することで，教師がその様子や反応を捉えて，言葉掛けを行い，スムーズに指導を行うことができた。

（４）家庭での学習環境を整えること

幼児児童にとって，家庭は，生活の場であり，自分の好きなことができる場，家族と一緒にくつろぐことができる場であると考えられる。そのため，オンラインでの学習をする際，子供たちは，家庭という生活の場が，突然，授業の場となり，そこで学習をすることへの戸惑い，自分の好きなことができなくなるのではないかという不安を感じている様子がうかがえた。使い慣れたテレビやパソコン，タブレット端末から教師の声が聞こえたり，教師の姿が見えたりすることで，興味や関心をもった子供もいた一方で，その場を離れたり，泣き出したりする幼児児童がいた。また，好きなおもちゃを手放せなかったり，家の中にある物に注意が逸れて活動に参加できなかったりするということもあった。そのような様子に対して，以下のような学習環境を整える工夫が考えられた。

ア）活動前の準備と学習環境を整える工夫

活動前の準備として，主に，２点挙げる。１点目は，オンラインでの学習や活動をすることを子供たちが生活の一部として受け入れられるように，事前に保護者が活動の予告をすることである。２か月間の休業期間を過ごした子供たちにとって，オンラインでの活動という新しい活動に向かう

ためには，そもそも「Zoom とは何なのか」,「どのようなことをするのか」を一つ一つ丁寧に伝え，教える必要がある。そのために，保護者と教師が画面上で話をしている場面を実際に見せたり，のびのびチャンネルで配信した「Zoom をやってみよう」という Web 会議システムについての説明動画を見たり聞いたりして，オンラインで画面を介して，教師や友達の顔を見たり，話をしたりすることができるものであるというイメージをもてるようにした。２点目は，幼児児童が，オンラインでの活動に気持ちを向かえるようにするために，室内の環境を整えたり，直前までしていることを納得して終えたりしておくことである。保護者に協力してもらいながら，活動前に，使っていたおもちゃやタブレット端末などを子供と一緒に片付けて，遊びの「おしまい」を伝えることで，気持ちを切り替えてオンラインでの活動に取り組めるようにすることである。また，おもちゃ等を，活動中は子供の視界に入らない所に置いたり，布を掛けて見えなくしたりして，活動中に注意が逸れないようにする工夫も大切であった。

イ）活動中の環境を整える工夫

活動中の工夫としては，気持ちを切り替えて，落ち着いて学習や活動に取り組めるようにするために，学習で使用する部屋や椅子，机を新たに設置している家庭もあった。幼児児童にとって，学習で使う物があることで，気持ちを切り替えるきっかけにもなったと考える。また，工作をしたり，素材に触れたりする活動や教師と画面を介しながら言葉でのやり取りが中心の活動では，座って活動する時間が長くなる。よって，その児童に合わせた椅子や机を使用することで，姿勢が安定するため，手元や画面を注目し続けることにもつながると考える。

（５）保護者との協力・連携

今回の活動・学習は，幼児児童と一緒に活動を行う保護者の協力がなければできない取組であった。取組を通して，幼稚部と小学部段階では，オンラインでの活動における教師と保護者の役割の違いが見えてきた。

幼稚部段階では，保護者が子供と関わりながら活動をし，それを教師がオンラインでサポートし，助言するという役割であった。

小学部段階では，保護者が教師の言葉を子供の耳元で復唱したり，子供が自ら教師に働き掛けられるように，サポートをしたりする役割を担い，教師と連携しながら活動に取り組んでもらった。このように，年齢段階，幼児児童の実態によって，保護者と子供との関わりが変化してくるため，教師が活動を行う際の配慮事項を具体的に伝えたり，保護者から子供の様子を聞き取れるように問い掛けたりすることが大切である。また，活動の授業改善を行うには，幼児児童の様子をそばで見ている保護者からの情報を生かすということが重要であった。授業後に，教師と保護者で振り返りを行ったり，メールで意見を求めたりすることで，画面上では見えない子供たちの様子を知り，次時の授業改善につなげ，保護者と協同しながら，子供の成長を促すことができるのではないかと考えられた。

２　オンラインでの行事をする上で，大切なこと

三つの行事を振り返り，オンラインでの行事を行う上で大切なことを，四つの項目に整理した。

（１）幼児児童の興味・関心に基づく活動設定

オンラインでの行事に子供たちが参加するためには，テレビ画面に視線を向け続けることが必要であった。テレビ画面に視線を向けることで，活動内容を理解して，行事を楽しむことができるように子供たちの興味・関心に基づく活動を設定する行事が多かった。オンラインでの行事で多く行われた活動は，ダンス，歌，絵本の読み聞かせであった。これらの活動は画面に視線を向けたことで活動内容が理解しやすいものであった。画面を見ながら踊ったり，歌を口ずさんだりするなど，様々な表現でオンラインでの行事を楽しむことができていた。ダンスと歌は動きを伴う活動であったが，絵本の読み聞かせは，画面をじっと見つめることが多く動きを伴わない活動であった。動きを伴わない活動であっても，子供たちにとって，なじみ深い絵本であることや身近な教師が登場することで興味をもち，画面に視線を向けることができた。

（２）映像教材を用いること

きらきらコンサート（音楽鑑賞会）や小学部チャンネルでは，教師が作成した映像教材を用いることが多かった。きらきらコンサートの映像教材では，曲に合わせてアニメーションを付けたり，歌詞を付けたりしたことで，映像に興味を示し，画面に注目することができた。小学部チャンネルでは，ダンスや手遊びを映像教材にして用いた。映像教材を画面に映すことで，注目すべき対象が明確になり，画面に映っている教師や友達を見て，振り付けや手遊びをまねすることができていた。従来の行事であれば，活動は一度しか取り組めないことが多いが，映像を繰り返し見ることで，自分のお気に入りの歌やダンスに何度も取り組み，楽しむことができた。

（３）落ち着いた環境を作りやすいこと

従来の行事は，他学年や保護者，来賓など多くの人の前で発表をすることが多い。本校の子供たちの中には，大勢の人の前で発表することを苦手としている子供もおり，もてる力を十分に発揮できないまま行事を終えてしまうことがある。しかし，オンラインでの行事であれば，大勢の人の前に出ることはなく，普段過ごしている教室から発表をすることができる。小学部チャンネルでは，司会を務めた子供は緊張感を感じることなく，大きな声で進行をすることができていた。交流及び共同学習では，初めて関わるＡ小学校の児童に向かって，自分の自己紹介カードをカメラに向かって見せたり，自分の名前や好きなことを伝えたりすることができていた。人前に出て発表したり，人前で活動したりすることは幼児期，児童期の子供たちにとって，大切な経験であるが，人前での発表を苦手としている子供にとっては，自分が普段過ごしている教室等の落ち着いた環境から発表をすることで成功体験を重ね，発表に対して自信をもつことができるようになると考えられる。

（４）画面越しでやり取りすること

オンラインでの行事であっても，他学年の友達や教師と関わることができるように，小学部チャンネルでは司会の学年が「集まりの歌」を歌った。「つぎは〇年生？」の歌詞を歌うと，呼ばれた学年が写るようにホストが画面を切り替え，手を振って反応するという画面を介したやり取りを行った。交流及び共同学習では，交流校の子供と自由にやり取りをする時間を設けたことで，お互いに相手を意識して自己紹介をすることができた。Web 会議システムを用いて各教室から行事に参加したとしても，他学年や他学部の幼児児童や教師が画面に映ると知っている友達や教師の名前を言葉にしたり，呼び掛けたりする子供もいたことから，オンラインでの行事では，画面越しであっても関わる機会を設けることが通常の行事と同じように必要であると考えられる。

３　まとめと今後の展望

（１）オンラインでの学習

今年度は，新年度開始時の教師と幼児児童との関係性がまだ十分に築かれていない時期に，オンラインでの学習が導入され，また，オンラインでの学習の取組の前例や，蓄積がない中で，できること，できそうなことに試みながら手探りでの授業開始となった。その中で，実践を積み重ねたり，教師同士で意見を交換し合ったりしながら進め，上記に挙げた五つの視点が，本校の知的障害を伴う自閉症の子供たちにとって，オンラインでの学習をする上で大切なことであった。

２月現在，学校が再開し，日々の教育活動を通して，私たち教師は幼児児童と信頼関係を築き，幼児児童の興味や関心，得意なこと，苦手なことなどの様々な実態を把握し，指導をしている。現在の状況で，再び，学校と家庭で，オンラインでの学習を実施することになれば，これまで述べてきた実践の成果と課題を踏まえ，より，幼児児童一人一人に応じたオンラインでの学習の指導内容や指導方法などを計画したり，新たな可能性を探ったりしていくことができると考える。

（２）オンラインでの行事

オンラインで行った行事の取組から，子供たちの興味・関心に基づく活動を設定し，映像教材を用いることでオンラインでの行事に参加しやすくなると考えられる。また，子供たちが発表をする際にも，落ち着いた環境を作りやすく，もてる力を発揮しやすくなり，成功体験を重ねることができると考えられる。オンラインでの行事であっても，画面越しで友達や教師と関わることが，行事を計画する上で重要であった。しかし，各行事の課題として，画面越しでやり取りをする難しさが挙げられた。今後は，情報機器の扱い方を教師が熟知し，画面越しであっても自身の働き掛けが相手に十分に伝わり，相手も反応しやすいような活動を検討することが課題である。

さらに，オンラインでの行事は，初めての取組が多く，準備や運営に時間を要した。そのため，学級や学部で挙げられた反省の多くは，準備や運営に関することであった。また，子供の評価の視点も画面に視線を向けていたか，画面に映る教師や友達の動きや歌をまねしていたかなど，オンラインでの行事に参加できたかが中心となっていた。今後は，通常の行事のように，準備や運営に関することだけでなく，行事のねらいや目的に対して，子供たちが何を学び，どのような力を身に付けることができたのかを評価することで，オンラインの特性を踏まえた目標を立て，活動内容を計画することにつながると考えられる。

４　課題

オンラインでの学習と行事で，共通して，画面を介したやり取りの難しさが挙げられた。映像や音声にタイムラグが生じることで，教師が画面越しに，子供たちの様子に反応することが難しかったり，教師の言葉が届かなかったりすることがあった。また，画面越しのやり取りであるため，相手との距離感や視線の向きなど，自分が働き掛けられているという実感を抱くための手掛かりがなく，子供たちは教師や友達の言葉掛けに反応することが難しかった。また，教師は，対面での学習や行事に比べ，オンラインでの経験が明らかに少ないため，対面での活動との違いを捉えつつ，オンラインという場での目的やねらいを立て，指導内容を考えることに試行錯誤した。情報機器の操作に関しては，活動中に画面が静止したり，音声が途絶えたりするなどのトラブルが生じてしまうことがあり，それによって子供たちの活動や集中が途切れしまうことも課題であった。

以上のことを踏まえ，今後の課題を以下に述べる。

・画面越しであっても，自分の働き掛けが相手に伝わったり，相手の働き掛けに対して，すぐに反応したりして，やり取りをしながら展開するような活動内容とそれを実現するような情報機器の使い方を検討すること。

・様々なトラブルや，子供の反応を予想し，オンラインの特性を踏まえた活動内容を計画すること。

・画面越しのやり取りを円滑にするためにも，教師が情報機器の扱いに慣れ，トラブル（通信が途絶える，ハウリング，画面の静止など）に対応できるようになること。

【別紙資料】

別紙①

活動で使用した曲や絵本の作詞者と作曲者名

きらきらコンサート

曲名	作詞者	作曲者
とんとんとんとんひげじいさん	不詳	玉山英光
おばけなんてないさ	槇みのり	峯陽
きゅうしょく	谷川俊太郎	谷川賢作
くじら	谷川俊太郎	谷川賢作
絵本「おべんとうバス」	作・絵　真珠まりこ	
校歌	狩野光夫	早坂みどり

小学部チャンネル

曲名	作詞者	作曲者
パプリカ	米津玄師	米津玄師
きらきらぼし	フランス民謡	フランス民謡　武鹿悦子訳
絵本「おおきなかぶ」	A.トルストイ再話　内田莉莎子訳　佐藤忠良画	
やきいもグーチーパー	阪田寛夫	山本直純

研究同人

	校　　長	西垣昌欣	
	主幹教諭	工藤久美	
幼稚部	石川千尋	飯島杏那	大門志帆
	中濟珠実	栗原淳子	野瀬日菜子
	吉元まお里	若林　季	遠藤佑一
	前田里栄子	小榑あすみ	丸山菜子
小学部	塚田直也	加藤　敦	小林健吾
	二宮綾香	西田　泉	髙井彩子
	五反田明日見	上野哲弥	○間山響子
	稲本純子	柿本将太	河場哲史
	中川知香	丸山真幸	山地康代
	久野智宏	中島　篤	前田久美子
連携推進グループ	髙尾政代		
寄宿舎	瀧口智子	中田明斗	小菅夏美
	松浦太一	山﨑真美	千葉直子
養護教諭・看護師	平賀美帆	恒次律枝	
栄養教諭・技能補佐員	中田秀子	青木洋子	
非常勤講師	髙山真美	大垣智紀	
事務	内海　渉	花﨑美由紀	小野口　浩
	松本由美	横山　緑	早田　彩
スクールカウンセラー	渡邊則子	臨時用務員	太田和実

○研究主任

挿絵：前田　久美子（本校教諭）

今年度の自閉症教育実践研究協議会は、感染症拡大の影響により実施できませんでしたが、本誌では１年間の実践研究をまとめたものを集録しました。

令和２年度　自閉症教育実践研究協議会　実践研究集録

令和３年３月　日　発行

筑波大学附属久里浜特別支援学校